

明治大学国際日本学部 学生論集

第3集(2016)

国際日本学部学生論集の刊行に寄せて…………… 国際日本学部長 横田雅弘

小森和子ゼミナール

アジアの英語教育政策と実情の比較 …………… 井口博希 (1)

中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の日本語の身体語彙を使った慣用表現の
意味推測に及ぼす母語の影響

—正の転移と負の転移の視点から—…………… 高ミンソン・牟博宸 (21)

日本語学習者の語彙的複合動詞の意味推測に関わる要因

—日本語習熟度、母語、および語彙の難易度から—…………… 中村華子 (53)

前置詞「at」のイメージスキーマに関する研究

—英語母語話者と日本人英語学習者に焦点を当てて—…………… 本田愛香 (81)

野村清ゼミナール

なぜ日本人はキツネとタヌキに化かされるのか

—民俗学および古典から見た日本人のキツネ・タヌキ観—…………… 浦上ゆうき (105)

眞嶋亜有ゼミナール

Jファッションと日本人

—ロリータから原宿系までにみる日本人の「カワイイ」と独創性—…………… 周晞彤 (119)

明治大学国際日本学部は、2008年に創設され、2012年には国際日本学研究科修士課程が、2014年には博士後期課程が始まり、学部教育から専門的な研究課程に至る体制が整いました。本学部は、明治大学で初めて「国際」の名称を冠し、明治大学の国際化を牽引する象徴的な学部としての役割を担ってスタートしたわけですが、2009年に文部科学省が本格的な大学国際化政策であるグローバル30を開始し、明治大学がこれに選定されたことを考えれば、まさに最適のタイミングでこの学部が誕生していることがわかります。さらに、この学部を中心に2013年度より明治大学中野キャンパスが新設され、国際化と先端研究の拠点として、今度はキャンパスというより大きな単位での展開に拡充され、その成果はスーパーグローバル大学創成支援事業での選定へと繋がりました。

このような国際日本学部の発展は、この学部がさまざまな意味で時代の要請に応えた学部であるからに他なりません。その特色の一つは、ネイティブ教員による少人数の徹底した英語教育であり、目覚ましい成果を上げて日本社会(企業)のニーズに応えています。

二つ目に、日本のさまざまな面白いコンテンツを留学生とともに発見・評価し、それを世界に発信するという本学部の基本理念そのものが、日本食の世界遺産認定や多様なクール・ジャパンへの注目、そして2020年のオリンピック・パラリンピック開催といった日本から世界への発信という大きな潮流に一致したものであると思います。

さらに三つ目として、本学部が、主体的に学ぶ学生の育成を掲げていることも時代の要請に叶うことでしょう。ポップカルチャーや日本的ものづくりにとどまらず、多種多様な日本の先鋭的・先端的なコンテンツをカリキュラムに配し、それを担う最適な教授陣を擁していますが、大学の教育・研究は、教職員がその環境とコンテンツを提供するとしても、それに応え、そこから学び、発展させていくのは学生です。明治大学は、スーパーグローバル申請の柱として「主体的に学ぶ学生の育成」を掲げており、本学部もそれを目指しています。

学生が主体的に学ぶということについて、そのもっとも具体的な形は専門演習において見られると言ってよいでしょう。自由度の高いテーマ設定の中で、学生は指導教員や学生仲間と切磋琢磨しながら、多様な卒業制作を完成させていくのです。外にある知識をただ受け取るだけでなく、それを一度自分を通して自分の言葉として語り直す行為は極めて主体的なものであり、意味のある学びはまさにこの行為により成し遂げられると言っても過言ではありません。今回も、このような学びの成果が国際日本学部学生論集という形で発表され、多様な専門領域での学びの成果が全学生に共有されることは、誠に喜ばしいことです。

これからも、本誌への学生のみなさんの積極的な投稿を期待しております。

アジアの英語教育政策と実情の比較

Comparison of English Education Policy and Actual Situation in Asia

明治大学 国際日本学部

井口 博希

Meiji University School of Global Japanese Studies

IGUCHI, Hiroki

目次

はじめに

I 先行研究

II 研究課題

III 調査

1. 3か国の政策の相違点に関する文献調査
2. 英語教育の実情に関するヒアリング調査
3. 調査対象者
4. 調査の手続き
5. 材料

IV 結果

V 考察

おわりに

付記

参考文献

付録（調査票）

はじめに

本研究では、英語を外国語として学んでいる日本、中華人民共和国（以下、中国）、大韓民国（以下、韓国）の英語教育政策を比較し、どのような点が異なっているのか、そして日本の英語教育において改善しなければならない点は何か、を検討する。

日本の英語教育が問題となって久しい。中学校から高校まで 6 年間かけて英語を学習したにもかかわらず、英語を全く使えない日本人が数多く存在することから、日本の英語教育、特に学校教育を改善するべく活発な議論が繰り広げられてきた。そして、これらの議論の引き金となったと考えられる要因の一つとして、2000 年に行われた「21 世紀日本の構想」懇談会が挙げられるであろう。山取（2005）では、懇談会が提出した報告書において、英語を日本の第二公用語とする、いわゆる「英語第二公用語論」がマスメディアに取り上げられたことをきっかけに論争が始まったと述べている。そして、山取（2005）は、2002 年に文部科学省が提言した『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定についてにより、英語教育向上のための具体的な指標が定められたとしている。その後、文部科学省は 2008 年に小学校 5 年生からの外国語活動の開始、2011 年に学習指導要領の大幅な改定といった英語教育改革を推し進めてきた。しかし、「日本人＝英語ができない、苦手」という認識が今なお定着している現状を見ると、一連の改革に対して疑問を抱かざるを得ないだろう。日本の英語教育改革の成果が疑問視される中、日本と同じく英語を外国語として学習している他のアジア諸国の英語教育の現状はどのようになっているのだろうか。まず、中国の英語教育政策について概観する。矢野・本名・木村・木下（2011）では、グローバル化に対応するため、2001 年に「初等教育から高等教育までの一貫したナショナル・シラバス」を策定し、改革を推進してきたと述べている。韓国に関してはどうか。樋口・泉・衣笠・加賀田・田邊・掛谷・大村・箱崎・藤田（2005）では、1954 年から開始された教育改革について、「国際化に対応できる英語の意思疎通能力の育成という明確な目的をもって、初・中・高一貫教育が進められている」と評している。中国、韓国共に一定の成果を上げていると考えられる。政策の成果は英語試験の点数にも表れている。TOEIC（2014）によると、日本人受験者の平均スコアは 512 点で、調査対象国 48 ヶ国中 40 位に位置しており、この順位は先進国の中ではかなり低い水準と言えるだろう。一方で同じアジアに属する韓国は 623 点、中国に至っては 716 点で日本の平均スコアより 200 点以上高いという結果が出ている。また、TOEFL（2015）に関しても、日本人の平均スコアが 71 点であるのことに對し、中国は 78 点、韓国は 84 点となっており、TOEFL においても日本人受験者の平均スコアがアジア諸国の中で比較的低い水準にあるということが分かるだろう。しかし、小磯（2011）では、英語試験の平均スコアの低さを嘆く日本人が多いが、平均点はその国の国民の英語力を表すものではないと述べている。また、鳥飼（2004）では、TOEFL の受験者に着目し、日本人の平均スコアが低い原因として、受験者数の多さと英語学習に対するモチベーションの低い学習者も受験しているという 2 点を指摘し、TOEFL の平均点＝国家の英語力と見なすのは早計であるとしている。このように、実際の

英語力と英語試験の点数の関係については様々な説があるが、本研究では割愛する。英語教育に関しては、英語教育を向上させるために、日本でも小中高大一貫したシラバスを作成すべきだと論じる研究者が多い。しかし、各国の英語政策がどの程度遵守されているのか、実際の教育現場と政策はどの程度一致しているのかを検討している研究は少ない。

そこで、本研究では、日本、中国、韓国の英語教育政策を比較し、実際に行われている教育とどの程度一致しているか、また、英語教育改革で成果を上げている中国、韓国と日本の相違点を検討する。

この研究によって、日本の英語教育に対して示唆を与えることができると考える。

I 先行研究

本研究にかかわる先行研究としては、中国や韓国などの諸外国と日本における英語教育政策に関する知見である。これまでの主たる研究成果としては、小磯（2011）、矢野・木村・木下・本名（2011）、河添（2005）などの知見が参考になる。

まず、小磯（2011）では、日本・中国・韓国・台湾の成人の英語力を TOEFL と EASS2008 の結果を用いて年代別に分析した。その結果、TOEFL と EASS2008 のいずれの結果においても日本人の英語能力は低い水準にあること、そして全ての地域において 20 歳代以下の若年層の英語能力が伸びていることが判明した。小磯（2011）は若年層の英語能力の向上は学習指導要綱などの英語教育事情の変化に影響を受けているのではないかと考え、若年層における英語能力の規定要因世帯収入・都市サイズ・教育年数・英語使用に対する積極的態様の 4 つに分けて分析を行った。分析の結果、どの地域でも教育年数と英語使用に対する積極的態様の 2 要因が英語能力に影響を及ぼしていることが明らかになった。これらの結果を受けて小磯（2011）は、日本人の英語能力を向上させるには小中高大一貫のシラバスを構築すること、公教育における英語教育の教科、積極的にコミュニケーションを図る態度の育成の 3 点を提言した。しかしながら、小磯（2011）では「英語力」や「英語能力」という語が頻繁に使用されているが、これらの語についての具体的な定義が示されておらず、何を以て「英語力」があるのかが曖昧になっている。また、小中高大一貫のシラバスの内容についても具体的な言及がない。

また、矢野ら（2011）では 14 か国を①英語を母語とする国、②第二言語とする国、③外国語とする国の 3 種類に分け、各国の言語政策について述べている。その中でも日本と同じく③の「拡大圏」に属する中国と韓国の英語教育政策について、以下のように述べている。中国では教育部が初等教育から高等教育までの一貫したナショナルシラバスを作成し、英語教育の改革を推し進めてきた。この改革はトップダウン一辺倒に見られるが、現場の意見を汲み取り政策に反映させていると述べている。一方で韓国の教育政策に関してはグローバル化の波に対応すべく、教育に関する行政機関の再編など、英語能力の向上を目標に迅速に行動する機動力があると評している。両国について、国家が主体となって政策を推進しているということが共通して述べられている。矢野ら（2011）は諸外国の言語教育

政策を比較・調査した結果、日本も中国のような一貫制英語教育を実施すべきだと主張しており、そのためには英語教育におけるナショナルシラバスとスタンダードが必要であると提案している。そして矢野ら（2011）では一貫制英語教育シラバスを実際に作成し、各学年における到達目標や評価法について述べている。しかしながら、矢野ら（2011）では、各国の英語教育政策そのものについては言及がなされているが、その政策が教育現場においてどの程度遵守されているかについては調査が及んでいない。例えば、矢野ら（2011）が中国の項目で述べているように、英語教育政策については「上有政策，下有対策」（上部で政策を立て、下部でそれを骨抜きにする）の話を聞かないということが事実であると断言できない可能性がある。

また、河添（2005）では実際に中国や韓国などのアジア諸国に赴き、学校での英語教育や塾などの現場を調査し、各国の英語教育の特徴や日本の英語教育との相違点について述べている。河添（2005）は中国の英語教育の特徴として、授業内での英語の使用頻度を上げ、生徒が英語に触れる機会を増やすこと、そして従来の「読む」「書く」中心の授業から「聞く」「話す」を重視した授業に変化していることを指摘している。また、日本との相違点として、生徒が学校にいる時間が非常に長いという点を河添（2005）は挙げている。一方で韓国は、小学校における英語教育に関しては、知識偏重型ではなく、アクティビティなどを通して英語の運用能力を伸ばす教育を行っている。日本との相違点に関しては、大学受験の際にのみ入試が行われるという点である。河添（2005）では、他にもインドやカンボジアなどのアジア諸国の英語教育事情が包括的に述べられている。しかしながら、高校における英語教育などに関する記述が少なく、具体性に欠ける部分も見受けられるという問題点がある。また、河添（2005）は公立小学校や塾などを実際に取材することでアジア絵の英語教育の実情を調査していたが、実際の教育現場とは乖離している可能性も少なからずある。

II 研究課題

先行研究を踏まえ、本研究では、日本の公教育における英語教育と英語政策に対して一定の示唆を与えるために、以下を研究課題とする。

- (1) 日本・中国・韓国の3か国の英語教育政策ではどのような部分が異なるのか。
- (2) 3か国の英語教育の英語政策と英語教育の実情はどの程度一致しているのか。
- (3) 日本の英語教育を改善していくためには何が必要なのか。

これらの研究課題を検討するために、以下の手順で調査研究を行っていく。まず、研究課題(1)を検討するために、日本・中国・韓国の3か国の英語教育政策に関する先行研究の知見を概観し、3か国の相違点を洗い出す。次に、英語教育の実情について、特に、3か国の英語政策の相違点を中心に、3か国の学習者にヒアリング調査を行う。これによって、

研究課題（2）にある政策と実情がどの程度一致しているかをあぶりだしていく。その結果を踏まえ、研究課題（3）に答えるために、考察を進めていく。

Ⅲ 調査

1. 3か国の政策の相違点に関する文献調査

本節では、日本・中国・韓国の3か国の英語教育政策の相違点を明らかにするために、主たる研究成果の知見を整理する。参照した文献は、王（2015）、樋口・泉・衣笠・加賀田・田邊・掛谷・大村・箱崎・藤田（2005）、河添（2005）、木村（2006）である。

まず、王（2015）は、日本と中国の英語教育を取り巻く環境が類似していることから、それぞれの教育政策の特色を比較検討している。王（2015）によると、日中の教育政策における相違点は英語教育の目標であるという。王（2015：38）は、このことについて以下のように述べている。

日本の英語教育は英語の中の4つの技能を深めつつ、英語を媒介にして日本の文化とは異なる文化などを学び、英語力を上げることを目指している。一方、中国では、英語教育の中で、英語の知識・技能を深めることがねらいにあるが、英語を通して様々な学習の方法や感情面の豊かさを深めることが課程標準に記載されている。

また、樋口ら（2005）は諸外国の言語教育政策を調査し、日本の言語教育政策への提言を行っている。その中で、日本の英語教育政策における改善点について、樋口ら（2005）は、外国語教育の授業時間数やクラスサイズについての具体的な言及がほとんどなされていないという点を指摘している。この点は2009年に改訂された高等学校指導要領においても大きく改善されることはなく、1授業は50分で行うといった全科目に共通する基本的な基準のみの言及にとどまった。授業時間数やクラスサイズに関して、中国と韓国はともに具体的な目安を掲げており、例えば、中国の高校では50分の授業を週に4回以上設定されており、また韓国の高校では週に3もしくは4時間とされている。さらに、諸外国における言語教育政策に関して、中国の政策では生徒に対する評価が重要視されていると述べられており、生徒の学習による成果だけではなく、学習過程も合わせて多角的に評価することで生徒に自信をつけさせ、総合的な言語運用能力を身に付けさせることを目標としている。樋口ら（2005）では、日本の外国語教育への示唆として、小中高一貫のナショナルシラバスを作成し、評価法についても記載する必要があると述べている。

さらに、河添（2005）は、中国の英語教育について、文法中心の授業からコミュニケーション重視の授業へと転換が図られているとしており、小学校から大学まで英語の授業は英語のみで行うと述べている。一方、日本の高等学校指導要領（2009）では、コミュニケーション英語や英語表現に関しては言語活動を英語で行うとしているが、英語理解に関しては英語で行うとの記述がないため、中国の英語教育と比較すると、英語の使用場面が少ない可能性がある。

このほかに、木村（2006）は、韓国の第 7 次教育課程における補足資料である、教室授業改善のための高等学校英語科教育課程運営資料を日本語に翻訳し、韓国の高校における英語教育の現状を紹介している。木村（2006）によると、韓国独自の英語教育政策の特徴として、水準別カリキュラムを国家レベルで取り入れているという点が挙げられる。木村（2006）は、韓国では、小学校 1 年次から高校 1 年次までを「国民共通基本教育課程」と捉え、高校 2 年次から 3 年次の 2 年間は「選択科目型水準別」の課程としており、習熟度によって異なる授業を行うことになっていると述べている。

以上の先行研究から、日本と中国・韓国の英語教育政策における主たる相違点として、①英語学習の目標、②授業の時間数、③授業内における英語の使用頻度、④学習に対する評価、⑤授業内容、の 5 点が挙げられる。

2. 英語教育の実情に関するヒアリング調査

前節の文献調査により、日本と中国・韓国の英語教育政策における 5 つの相違点が浮き彫りになった。そこで、この相違点を中心に、英語教育政策の相違が実際の英語教育にどのように反映されているのかを明らかにするために、日本・中国・韓国で英語教育を受けた者にヒアリング調査を行った。本節では、このヒアリング調査の概要について述べる。

3. 調査対象者

調査対象者は明治大学の学部 1 年生から修士 2 年生までの 25 名である。国籍の内訳は日本 5 名、中国 10 名、韓国 10 名で、中国と韓国は留学生である。平均年齢は日本が 22 歳、中国が 24 歳 6 ヶ月、韓国が 24 歳で、性別の内訳は男性 3 名（中国 2 名、韓国 1 名）、女性 23 名である。なお、中国と韓国の実態を詳細に聞き取るために、日本人学生の 2 倍の人数に対して調査を行うこととした。

4. 調査の手続き

2016 年の 11 月下旬から 12 月上旬にかけて、明治大学中野キャンパス内で調査を行った。初めに、対象者に調査票（詳細は後述）を記入してもらい、その後、調査票をもとにインタビューを実施した。なお、インタビューに際して、対象者の承諾を得て、インタビュー内容をレコーダーで録音した。インタビュー終了後、謝礼として粗品を配布した。所要時間は全部で約 40 分であった。

5. 材料

質問項目の選定は、前節の各国の英語政策に関する先行研究の知見や、各国の英語政策を参照して、行った。日本の公教育における英語教育は高等学校学習指導要領（以下、指導要領）に基づいて行われており、中国では全日制義務教育普通高級中学英語課程標準（以下、課程標準）、韓国では第 7 次教育課程（以下、教育課程）が学習指導要領と同じ役割を

果たしている。そこで、指導要領、課程標準、教育課程を比較し、3か国の政策にどのような相違点があるかを洗い出した。その際、(1) 中国独自の政策、つまり、指導要領には記載されていないが課程標準には記載されている項目、(2) 韓国独自の政策、つまり、指導要領には記載されていないが教育課程には記載されている項目、(3) 3か国の政策に共通しているが、具体的な記述内容が異なる項目、の3項目を抽出した。また、前述の通り、先行研究において、①英語学習の目標、②授業時間数、③授業内における英語の使用頻度、④学習に対する評価、⑤授業内容の5点に、3か国の政策のズレがあることがわかった。そこで、これらの点をもとに質問項目を作成した。その後、当該3か国で英語教育を受けた者が在籍している筆者の所属ゼミにおいて質問項目を精査し、追加項目の検討を行う等した後、最終的に、以下の9項目を調査対象の質問項目として設定することとした。

質問1. どの地域の高校に通っていましたか？また、高校に入学したのはいつですか？

質問2. 高校では英語の授業は週に何コマありましたか？

質問3. 学校の授業以外で、自主的に英語を勉強していましたか？ 例) 塾など

質問4. 英語の先生はネイティブスピーカーでしたか？

質問5. 英語の授業は英語で行われていましたか？または母語で行われていましたか？

質問6. 授業はどのような流れで行われていましたか？ 例) 発音練習→教科書の読解

質問7. 英語学習に対するモチベーションはありましたか？

質問8. 教師は成績の付け方についての基準を公表していましたか？また、教師はどのように成績をつけていたと思いますか？

質問9. 英語学習の意義や目標は授業内で明確化されていましたか？

質問1は、出身地や入学年度によって政策の違いが否定できないため、冒頭でこの点を確認することとした。

質問2は、政策と実情がどの程度一致しているのか、また政策と実情が異なった場合、どの程度授業時間数に差があるかを調査するために確認することとした。

質問3は、質問2を補足するための設問で、自主的な学習の時間が政策と混同されることを避けることと、公教育における英語の限られた学習時間を自主的な学習によってどのようにカバーしているかを知るために確認することとした。

質問4は、質問5を補足するための設問であり、調査対象者に授業を受けていた当時をより鮮明に思い出させるために確認することとした。

質問5は、政策の目標と実際の言語使用の場面の差異がどの程度生じているかを知るため、確認することとした。

質問6は、授業内容を調査するための設問であるが、調査対象者が回答しやすくするために「流れ」という語を用いて授業内容についてたずね、政策と実情の相違点を調査するために確認することとした。

質問 7 は、質問 9 の補足設問であり、高校生時の英語学習に対する動機づけは内発的なものであったか、そして内発的ではなく外発的に動機づけが行われていた場合、教師もしくは英語政策はどの程度動機づけに影響を与えているかを調査するため、確認することとした。

質問 8 は、政策と実情にどの程度差異があるかを調べるために確認することとした。

質問 9 は、実際の英語学習の目標と政策における目標を比較するため、確認することとした。

IV 結果

まず、質問 1（どの地域の高校に通っていましたか？また、高校に入学したのはいつですか？）の結果について述べる。日本人対象者の入学年度は 2009 年が 1 名、2010 年が 4 名である。中国人対象者の入学年度は 2006 年が 4 名、2007 年が 2 名、2008 年が 1 名、2009 年が 2 名、2010 年が 1 名である。韓国人対象者の入学年度は 2001 年が 1 名、2007 年が 3 名、2009 年が 3 名、2011 年が 2 名、未回答が 1 名である。なお 3 か国の対象者の卒業した高校の所在地の内訳は以下のとおりである。日本人対象者に関しては、神奈川県が 3 名、埼玉県が 1 名、東京都が 1 名である。中国人対象者に関しては、広東省が 1 名、江蘇省が 1 名、湖南省が 1 名、湖北省が 1 名、上海市が 1 名、天津市が 1 名、北京市が 1 名、遼寧省が 3 名である。韓国人対象者に関しては、仁川広域市が 2 名、京畿道が 2 名、ソウル特別市が 4 名、忠清南道が 1 名、大邱広域市が 1 名である。

次に、質問 2（高校では英語の授業は週に何コマありましたか？）の結果について分析する。なお、授業時間数に関して、3 から 4 時間のような幅のある回答がなされた場合はより小さい数字を時間数として採用している。日本人対象者の授業時間数は 3 から 5 時間で、授業時間が 45 分間だった対象者が 3 名、50 分間が 1 名、65 分間が 1 名である。中国人対象者の授業時間数は 4 から 9 時間で、授業時間が 40 分間だった対象者が 2 名、45 分間が 8 名である。韓国人対象者の授業時間数は 2 から 5 時間で、授業時間が 45 分間だった対象者が 2 名、50 分間が 8 名である。中国に関しては、授業時間数については課程標準と一致していたが、授業時間は全対象者が課程標準よりも短いという結果になっている。一方で韓国に関して、授業時間数については概ね教育課程と一致しているという結果になった。

次に、質問 3（学校の授業以外で、自主的に英語を勉強していましたか？ 例）塾など）の結果について分析する。質問 3 は調査票上で、「はい」か「いいえ」を調査対象者に選択してもらい、その後のインタビューで自習の内容や時間について確認した。以下の表 1 は各国の対象者の調査票の回答をまとめた表である。

表 1 質問 3. 学校の授業以外で、自主的に英語を勉強していましたか。

	はい	いいえ	合計
日本	4	1	5
中国	9	1	10
韓国	8	2	10

各国ともに「はい」を選択した対象者が「いいえ」を上回るという結果になったが、インタビューによって自習の内容や時間について差があることが判明した。日本人対象者では、高校 3 年生になり、大学受験を意識し始めた時点で学習塾や予備校に通い始めたと言った対象者が多く、高校 1 年生から日常的に自主的な学習をしていた対象者は 1 名にとどまった。これに対し、中国人対象者は高校 1 年次から、放課後に強制的な自習の時間があり、ほとんど全ての対象者が放課後の自習に参加していた。この自習は、学校で行われるもので、頻度は週に 3 から 5 回で、時間は対象者によって差はあるが、授業終了後から 3 時間程度設けられており、自習の内容は各自で問題集を解いたり、教員から配布されたテストを解いたりなど問題演習を中心に行っていたようである。この自習の時間に加え、週末に学習塾に通っていた対象者も数名いた。韓国人対象者に関しては、「はい」と回答した対象者のうち 7 名が学習塾や家庭教師など、学校以外の場所で英語を学習していた。頻度は対象者によって異なるが、週に 1 から 5 回、時間数は 1 から 3 時間程度で、学習していた内容は、大学入試を意識した問題演習や、英会話など多岐にわたる。以上のことから、3 か国の対象者の多くが自主的に学習をしていたが、学習の形態、内容、頻度、時間は国によって大きく異なっていることが明らかになった。

次に、質問 4(英語の先生はネイティブスピーカーでしたか?)の結果について分析する。質問 4 も質問 3 と同様に、調査票上の回答をまとめた表とインタビューをもとに分析を行う。以下の表 2 は、質問 4 の調査票における回答をまとめた表である。

表 2 質問 4. 英語の先生はネイティブスピーカーでしたか。

	はい	いいえ	合計
日本	2	3	5
中国	4	6	10
韓国	2	8	10

各国ともに「いいえ」と回答した対象者が「はい」と回答した者を上回った。「はい」と回答した対象者に関して、英語母語話者教師の特徴や授業の内容、頻度についてインタビューを行ったが、授業頻度に関して大きな差異が見受けられた。数か月に 1 度レクリエーションのような活動を中心に授業を行ったり、週に 1 度スピーキングの授業を担当したりと、高校により大きく異なるという結果になった。ただし、インタビューによると、英語

母語話者教師はスピーキング中心の授業を担当することが多く、授業は半年から1年などの限られた期間のみ行われるという傾向にあるようだ。

次に質問5（英語の授業は英語で行われていましたか？または母語で行われていましたか？）の結果について分析する。質問5は調査票上で対象者に、「英語のみ」、「母語のみ」、「英語と母語両方」の選択肢の中から1つ選択してもらい、その後インタビューを行った。以下の表3は調査票の回答をまとめた表である。

表3 質問5. 英語の授業は英語で行われていましたか。

	英語のみ	母語のみ	英語と母語両方	合計
日本	0	2	3	5
中国	0	5	5	10
韓国	0	4	6	10

各国ともに英語のみで行われたと回答した対象者は0人で、日本と韓国に関しては、英語と母語両方で行われたと回答した対象者が母語のみで行われたと回答した対象者を微々たる差ではあるが上回る結果となった。インタビューによると、英語と母語両方と答えた対象者の多くが母語を使用する割合の方が高いと回答した。英語の使用場面については、教科書の音読や生徒に対する簡単な指示、英会話の授業などが挙げられた。日本と中国の政策に関しては、授業内で積極的に英語を使用するよう言及されていたが、実情は母語の使用が英語の使用を圧倒的に上まわるという結果になった。以上のことから、英語の使用頻度については、政策と実情に大きく差があるということが判明した。

次に、質問6（授業はどのような流れで行われていましたか？ 例）発音練習→教科書の読解）の結果について分析する。質問6は調査票とインタビューをもとに、対象者に最も頻度の多かった授業の形式を挙げさせ、共通している授業形式をパターン化して集計した。パターンは大きく分けて2種類あり、①教科書の本文を学習者に翻訳させ、教師が適宜説明を加える授業、および②教科書や問題集の問題演習が中心で、教師が適宜解説を行う授業、の2パターンである。上記の2パターンに当てはまらない、もしくは分類が困難であった授業形式に関しては、その他というカテゴリーを設け、分類した。以下の表4は調査票とインタビューから得られた回答をもとに筆者が授業形式を分類し、まとめた表である。

表4 質問6. 授業はどのような流れで行われていましたか。

	①	②	その他	合計
日本	4	1	0	5
中国	1	9	0	10
韓国	3	6	1	10

日本に関しては、①の翻訳中心に授業を進める、いわゆる文法訳読方式で授業が進められたと回答した対象者が4名おり、②のような問題演習中心の授業形式だと回答した対象者は1名にとどまった。一方で中国および韓国は、回答数に差はあるものの、②の問題演習中心の授業を受けてきたと回答した対象者が①と回答した対象者の数を上回る結果となった。韓国に関しては、水準別授業を実施しているため、授業内容が学年や所属学級によって変動してしかるべきだが、授業の内容が学年により変化したと回答した対象者は1名にとどまった。なお、この対象者に関してはその他の項目に分類した。

調査結果から、中国及び韓国は②の問題演習を中心に英語の授業が進められているが、日本は①の翻訳中心の授業が行われている傾向にあることが明らかになった。各国の政策の傾向として、実用的な英語能力を身に着けるとい目標が設定されており、この目標を達成するため、各国の政策では、場面や状況を設定し4技能をそれぞれ伸ばすための指導案や授業例が掲載されている。しかし、実情は、教科書や問題集の文章を読むことで、語彙や文法等の言語知識を身につけさせる、あるいは、入試や試験に出題されやすい形式に慣れさせる、といった形式の授業が主で、英語を使うことを目的としたタスク型授業や、口頭表現能力を養うようなコミュニカティブな授業はあまり行われていないという結果が窺える。

次に、質問7（英語学習に対するモチベーションはありましたか？）の結果について分析する。質問7は質問3と同様に調査票上で、「はい」、「いいえ」を対象者に選択してもらい、その後、インタビューを実施した。以下の表5は調査票の回答をまとめた表である。なお、表中の「ある」は「はい」の回答、「ない」は「いいえ」の回答に相当する。

表5 質問7. 英語学習に対するモチベーションはありましたか。

	ある	ない	合計
日本	3	2	5
中国	7	3	10
韓国	4	6	10

日本と中国に関しては、「はい」が「いいえ」を選択した対象者を上まわったが、韓国は他の2か国とは反対で、「いいえ」の方が多という結果になった。「はい」と回答した対象者にどのような動機で英語を学習していたかインタビューしたところ、日本人対象者に関しては英語が得意、もしくは好きだからという理由が最も多く、次いで将来のためという内発的動機が中心に挙げられた。中国人対象者については、得意、もしくは好きだからという内発的動機を挙げる対象者と、進学や受験といった外発的動機を挙げた対象者が同程度いるという結果になった。韓国に関しては、中国と同じく進学や受験を挙げる対象者が多く見受けられたが、「いいえ」と答えた対象者の中には進学や受験のために学習することに対して嫌悪感を抱いてしまい、英語学習に対する動機がなくなってしまったという対

象者が3名いるという結果になった。以上のことから、英語学習に対する動機として、日本は内発的動機を挙げ、中国および韓国は外発的動機を挙げるものが多いという結果になった。

次に、質問8（教師は成績の付け方についての基準を公表していましたか？また、教師はどのように成績をつけていたと思いますか？）の結果について分析する。質問8は質問3と同様に、「はい」、「いいえ」を対象者に調査票上で選択してもらい、その後インタビューを行った。以下の表6は調査票の回答をまとめた表である。

表6 質問8. 教師は成績の付け方について基準を公表していましたか。

	はい	いいえ	合計
日本	2	3	5
中国	6	4	10
韓国	6	4	10

日本は「いいえ」の回答が多く、中国および韓国は「はい」の回答が多いという結果になった。日本人対象者については、定期試験や授業態度、提出物の提出率などをもとに、総合的に判断して5段階ないし10段階で成績をつけると回答する対象者が殆どであった。一方、中国、および韓国の対象者に関しては、定期試験のみで成績をつけると回答する対象者が多く、試験の点数がそのまま学期、もしくは学年の成績になるということであった。政策と比較すると、日本の指導要領では評価に関する項目は存在しないが、複数の材料をもとに評価をしている。その一方で、中国および韓国は、政策においては多面的に評価をするように述べられているが、実際の教育現場では定期試験の結果のみが学習者の評価となっていることが判明した。以上のことから、中国、および韓国の評価に関する政策と実情は大きく異なるという結果になった。

最後に、質問9（英語学習の意義や目標は授業内で明確化されていましたか？）について分析する。質問9も質問3と同様に、はい/いいえ を対象者に選択してもらい、その後詳細についてインタビューを行った。以下の表7は調査票の回答をまとめた表である。

表7 質問9. 英語学習の意義や目標は授業内で明確化されていましたか。

	はい	いいえ	合計
日本	1	4	5
中国	9	1	10
韓国	7	3	10

日本人対象者に関して、「はい」と回答した対象者が1名のみで、残りの4名の対象者は英語学習の目標が明らかにされないまま、学校教育を受けてきたという結果になった。しか

しながら、中国および韓国に関しては、対象者の過半数が「はい」を選んでおり、対象者の多くが英語学習の目的をはっきりと認識した状態で学校教育を受けてきたことが判明した。「はい」と回答した対象者が挙げた英語学習の目標で最も多かったものが、「進学や受験のため」という目標であり、これに次いで、「将来のため」という目標が少数ではあるが挙げられた。また、「いいえ」と回答した対象者の中にも、教師が明言することはなかったが、受験のために英語を学習していたと申告する対象者も数名見受けられた。調査結果と各国の政策を比較すると、日本に関しては政策と実情が一致していないどころか、「なぜ英語を学習するのか」が学習者に説明されないまま学校教育が行われているという事態に陥っている。他方で、中国および韓国に関しては、英語学習の目標は大部分の学習者に対して伝えられてはいるが、政策とは大きく異なる目標が教育現場では掲げられてしまっている。以上のことから、英語学習の目標に関して、3か国ともに政策と実情が一致していないという結果になった。

V 考察

以上の調査結果を総合し、本研究の研究課題（(1) 日本・中国・韓国の3か国の英語教育政策ではどのような部分が異なるのか、(2) 3か国の英語教育の英語政策と英語教育の実情はどの程度一致しているのか、(3) 日本の英語教育を改善していくためには何が必要なのか）に対する回答を述べる。

(1) に関して、文献調査から、①英語学習の目標、②授業の時間数、③授業内における英語の使用頻度、④学習に対する評価、⑤授業内容、の5点が相違点として挙げられた。この5つの相違点の中で、①英語学習の目標、②授業の時間数、③授業内における英語の使用頻度、⑤授業内容、の4点に関しては、内容に差はあるが、課程標準および教育課程のみならず、日本の指導要領にも、記載されている。しかし、④学習に対する評価については、日本の指導要領には記載されていない。この点が2か国の英語教育政策と日本の指導要領とで、最も大きく異なる点だといってよいだろう。ただし、評価に関する項目が日本の指導要領には存在しないことに関して、担当部局の文部科学省は何の対策も講じていないわけではない。文部科学省は2013年にCAN-DOリストを策定し、外国語学習における到達目標を具体的に設定し、明示した。しかしながら、指導要領が2009年に改定されてから4年後のことであり、中国や韓国と比較すると、10年以上も遅れての公開で、教育における評価の重要性に対する認識が遅れていると言わざるを得ない。次回の改定時には現在の英語公教育の現状を踏まえた内容になることを期待する。

(2) については、各国ともに政策と現状では異なる部分が多いという結果になった。ただし、どのように異なっているか、については、3か国とも同じ傾向の部分もあれば、日本と中国・韓国とで傾向が異なる部分もある。そこで、3か国の言語政策における五つの相違点のそれぞれについて、どのように政策と現状にズレが生じているのかを整理する。

まず、①英語学習の目標については、質問9の結果から、日本は、目標が設定されては

いるものの、その目標を意識して学習してきた対象者はほとんどおらず、政策と実情は適合していない一方、中国・韓国は、学習者に対して目標が明示されている場合が多かったが、教育現場における目標は政策が掲げる目標とはズレが生じていることがわかった。日本は、指導要領における大きな目標は「4 技能を磨き、英語力を向上させる」というものであったが、実際には、英語学習の目標が不明確なまま英語を学習していた者が多かった。その一方で、中国及び韓国人対象者は、ほとんど全ての対象者が目標を認識していたが、その目標は、「進学や受験のため」と回答する者が多く、目標そのものが長期的な英語学習の継続という点で疑問はあるかもしれない。しかし、「受験」という目標を設定し、それを学習者に明示し、徹底することで、学習者自身は英語学習に熱心に取り組めるようになるという点では評価するべきなのかもしれない。

②授業の時間数については、質問 2 から、政策と現状は各国ともに概ね一致していることがわかった。ただし、質問 3 から、3 か国のいずれの学習者も課外での英語学習を行っており、政策で規定されている時間数以上に、英語学習が行われている実態も明らかになった。特に中国・韓国では、塾や放課後の自習などの学校以外での英語学習に時間を割いていることが分かった。

③授業内における英語の使用頻度については、質問 5 から、3 か国ともに政策が規定した英語の使用より、実際の授業における英語の使用は少ないという結果になった。また、英語と母語の両方で授業が行われたと回答した対象者のほとんどが、母語のほうが英語より使用が多かったと述べており、英語の授業は英語で行うという政策とはかけ離れた使用頻度になっていることが判明した。これは、日本、中国、韓国のいずれの国にも共通した傾向であった。

④学習に対する評価に関しては、質問 8 の結果を見ると、課程標準では具体的な評価例を掲載し、多角的な評価を推奨する中国よりも、指導要領に評価の項目が設定されていない日本の方が、成績評価は、試験の結果だけでなく、授業態度なども含めて総合的な観点から評価しているという結果となった。特に中国が顕著であったが、定期試験の結果がそのまま成績となると答えた対象者が、中国と韓国に多く、学習者にとっては非常に厳しい環境で英語学習を強いられていることが判明した。また、中国及び韓国は学歴を非常に重要視する社会であることは一般的に広く知られており、特に韓国では、大学受験が一大イベントと化しており、韓国の高校生は熾烈な受験戦争を勝ち残っていかなければならない。このような過酷な環境から、英語学習に対する動機が薄れてしまい、英語そのものに苦手意識を抱いてしまったり、英語学習を諦めて日本語の学習に切り替えたりしたと回答した対象者が複数名おり、中国および韓国の英語教育の実情が浮き彫りとなった。

⑤の授業内容については、質問 6 の結果からわかるように、3 か国ともにコミュニケーションを重視した教育が求められているにも関わらず、実際には、教科書や問題集を中心とした授業が多く、生徒主体のタスクを行ったり、コミュニケーションを通してスピーキングやリスニングの能力を育成したりする授業は多くなかった。授業内容に関しても、

政策と実情はかけ離れていると言えるであろう。

最後に、(1) (2) を踏まえ、(3) 日本の英語教育を改善させるためには何が必要なのかを考察する。(1) で挙げられた相違点 5 つのうち、(i) 政策と実情が一致している点が 1 点、(ii) 3 か国とも政策と実情が一致していない点が 2 点、(iii) 政策と実情は一致していないが、その不一致の程度が、日本と中国・韓国で傾向の異なる点が 2 点であった。この中で、(iii) が日本と中国・韓国における英語教育に差異をもたらしていると考えられることから、(iii) を考察することで、(3) 日本の英語教育を改善していくためには何が必要なのかを検討する。

(2) で述べた通り、日本と中国・韓国で傾向の異なる点は、①英語学習の目標、④学習に対する評価、の 2 点であり、中国・韓国では多くの対象者が「進学や受験のため」に英語を学習し、家族や友人など学習者の周囲の人間も共通の目標をもって学習者を叱咤激励する。そして目標が達成できるか否かは大学入試の点数によって決まるため、高校における評価も大学入試と同様に、定期試験の点数がそのまま学習者の成績として反映されるという制度をとっている。このように目標と評価法が一貫しているからこそ、中国・韓国の英語教育は優れていると見なされているのである。確かに、一貫した英語教育制度のように思えるが、本当にこのままでよいのだろうか。TOEIC などの英語試験の平均得点を鑑みると、中国・韓国のように、具体的な目標を掲げ、その目標を達成するためには何が必要で、学習者をどのように評価するかという一連の流れに一貫性を持たせることで、一定の成果が出るということが明らかになった。しかし、一方で、中国・韓国の英語教育には問題点もある。質問 9 で、目標や意義は明確化されていたと回答した中国人および韓国人対象者の中には、大学入試を突破することを目標とした授業を受けることで、英語に対して負の感情を抱いてしまった対象者が複数名おり、このような状態では大学入試を乗り越えたとしても、その後全く英語を学習しなくなってしまうという状態に陥ってしまう可能性がある。評価方法に関しても、同様のことが言えるだろう。大学入試を終えた後は、目標が完遂されてしまい、定期試験で成績をつけるという評価方法が成立しなくなってしまう。こうなると、それまでは一貫した英語教育を行っているように考えられてきた中国および韓国も、大学入試が済んでしまうと、一貫性があるように思われてきた英語教育が瓦解してしまうかもしれない。また、中国・韓国は学歴を最重要視する社会であるため、国民の多くが「進学や受験のため」という 1 つの目標を共有していることから、学習者は目標に対して邁進することができるが、日本は学習者によって英語学習の目標が異なる。今回の調査でインタビューを行った日本人対象者 5 名は、英語学習の目標について、「好きだから・得意だから」、「将来役に立つから」、「大学入試のため」などを挙げており、対象者によって英語学習に対する目標は多種多様であるということが明らかになった。つまり、中国・韓国では目標を 1 つに定めやすいが、日本は学習者が多様化しているため目標を 1 つに設定することが困難であるため、複数の目標を設定する必要があると思われる。以上のことから、学習者に合わせた目標を複数個設定し、それぞれの目標に合った評価方法を

同時に設け、目標と評価方法が一貫した英語教育モデルを作成することで、さまざまな英語学習の目標が存在する日本でも一貫した英語教育が実施できるのではないかと考える。たとえば、今回の調査で挙げられたもの目標として、「進学や受験のため」が最も多く、次いで「将来のため」、「好きだから・得意だから」という目標が中心に挙げられたことから、この3つの目標に合わせた評価方法をそれぞれ設定し、英語学習のモデルを作成する。まず、「受験や進学のため」という目標を持つ学習者に対しては、中国・韓国のように問題演習中心で大学受験に特化した授業を行い、大学受験と同様に、定期試験の点数のみで成績が決まるという評価方法で評価をすることで、一貫した教育を行うことができるだろう。次に、「将来のため」という目標を持つ学習者に対しては、スピーキングやライティングなどの4技能をバランスよく伸ばす必要があると考えられるため、従来のような読解中心の授業でなく、スピーキング能力を向上させるような活動をしたり、コミュニケーション的な活動を取り入れたりして、4技能をバランスよく伸ばすような授業を行い、4技能別にそれぞれの目標に合った評価法を構築し、実施する（例えば、スピーキングならば、筆記試験ではなく、担当教員との英語を用いたインタビューテストを行って、学習者のスピーキング能力を評価する）ことで将来、就職をする際に必要となってくると考えられる能力を総合的に磨くことのできる一貫した英語教育を行うことができるだろう。最後に、「好きだから・得意だから」という目標を持つ学習者に対しては、学習者の能力を向上させるために、難易度の高い読解問題を解かせたり、英語を使って学習者同士でディベートをさせたり、応用的な内容を多く含んだ発展的な授業を行い、高校生にとっては敷居の高い TOEFL などの4技能を評価することができる外部試験に挑戦させ、その点数を成績に反映させることで学習者の意欲を向上させることができる一貫性を持った英語教育になると考える。さらに、目標に応じたカリキュラムや評価方法をいくつか設定しておくことで、英語学習の過程で学習者の目標が変わっても、教師も学習者も対応することができる。以上のことから、日本の英語教育を改善するためには、目標と内容、および評価方法に一貫性のある教育モデルを複数個策定し、それをわかりやすい形で提示し、学習者のニーズによってどのモデルに則って英語学習を進めるかを、学習者本人、あるいは教師が選択できるようにすれば、多様な学習者の存在する日本でも一貫した英語教育を実施することができ、より効果的な英語教育を施すことができると考える。

おわりに

本研究では、日本・中国・韓国の英語教育に関する政策と実情の相違点を調査し、その相違点から日本の英語教育を改善するためには何が必要であるかを課題として設定し、検討してきた。まず、各国の政策における相違点を明らかにするため文献調査を行い、その後、文献調査から浮き彫りになった相違点について各国の対象者に対してヒアリング調査を実施し、政策と実情がどの程度一致しているかを調査した。文献調査とヒアリング調査の結果から、①英語学習の目標、②授業時間数、③授業内における英語の使用頻度、④学

習に対する評価、⑤授業内容、の 5 点が各国の政策で異なる点だということが判明し、また、②以外は政策と実情が大きく異なるということが分かった。また、政策と実情は大きく異なるが、中国・韓国の英語教育は目標と評価方法が一貫しているため、TOEFL や TOEIC で高得点が得られるというような、一定の成果を出すことができた可能性が示唆された。この結果を踏まえ、筆者なりに、日本の英語教育の改善の方策を検討したが、日本と中国・韓国では学習者の傾向が異なるため、中国・韓国と同じ英語教育を行うことは困難であり、そのまま日本に転用することは不可能である。そこで、筆者が考える日本の英語教育の改善のポイントとして、日本でも一貫した英語教育を実施するには、目標とそれに合わせた内容や評価方法を複数設定し、英語学習のモデルを複数個作成することだと結論づけた。こうしたモデルの構築ができれば、学習者が自身のニーズ合ったモデルを選択することができるようになり、結果として、日本でも一貫した英語教育ができるであろう。このことによって、現在の日本の英語教育を少しでも改善することにつながるのではないかと考える。

本研究を通して、上記のような結論を得ることができたことが本研究の成果である。しかしながら、課題も残されている。例えば、目標と評価方法が本当に一貫しているかどうかについては、本研究では検証することができなかった。よって、今後の研究で目標と評価方法の関連性について詳しく調査していきたい。また、ヒアリング調査対象者を、国際日本学部の学生もしくは留学生に限定してしまったため、対象者の英語能力に偏りが生じてしまった可能性がある。英語能力、授業方法、地域、年代などの点で、対象者の幅を増やしたり、実際に英語教育を受けている高校生に対してインタビューを行ったりすることで、3 か国の現状や問題点がより明確に浮かび上がってくるだろう。この点も次の課題だと考えている。

今後は、3 か国の英語教育の実態を調査しつつ、一貫した英語教育をするためには何が必要となってくるかを研究していきたい。

付記

調査の実施に際しては、明治大学大学院の黄叢叢さんのご協力を賜りました。さらに、研究の過程では、ゼミのメンバーから、たくさんの示唆をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 王明潔. (2015) 「日本と中国における英語教育の特色と動向」『教育科学論集』第 18 卷, 37-41.
- 河添恵子. (2005) 『アジア英語教育最前線』東京：三修社.
- 木村裕三. (2006) 「完訳 『教室授業改善のための高等学校英語科教育課程運営資料』：韓国第 7 次教育課程における高等学校英語教育の解説資料」『研究紀要：富山大学杉谷キャンパス一般教育』第 34 号, 107-164.
- 小磯かをる. (2011) 「中国・日本・韓国・台湾における成人の英語力の比較と各国/地域の若年層の英語力の規定要員—EASS 2008 のデータをもとに—」『大阪商業大学論集』第 7 卷, 19-33.
- 鳥飼玖美子 (2002) 『TOEFL・TOEIC と日本人の英語力—資格主義から実力主義へ』東京：講談社.
- 樋口忠彦・泉恵美子・衣笠知子・加賀田哲也・田邊義隆・掛谷舞・大村吉弘・箱崎雄子・藤田直也. (2005) 「諸外国の言語教育政策と日本の外国語教育への示唆」『語学教育部ジャーナル』第 1 号, 1-61.
- 矢野安剛・木村松雄・木下正義・本名信行. (2011). 「英語教育政策—世界の言語教育政策論をめぐって」『英語教育学大系』第 2 卷, 東京：大修館書店.
- 山取清. (2005) 「第二外国語教育の現状と未来」『語学教育部ジャーナル』第 1 号, 77-89.
- 文部科学省. (2009) 「高等学校学習指導要領」
- TOEIC (2014) 「TOEIC プレスリリース」 <<http://www.toEIC.or.jp/press/2014/p016.html>> (2017 年 1 月 27 日閲覧)
- TOEFL. (2015). *Test and Score Data Summary for TOEFL iBT® Tests*. Retrieved from https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf (2017 年 1 月 27 日閲覧)

付録（調査票）

調査票

このたびは調査にご協力いただき、ありがとうございます。私は、アジアの英語教育に関して調査しています。以下の質問を読んで、答えてください。どうしても答えたくない場合には、答えなくて構いません。

なお、収集した個人情報は厳重に管理いたします。また、本調査で得られたデータは研究以外の目的で使用することはありません。

明治大学国際日本学部 4年 井口博希

学年： _____年生

年齢： _____歳

性別： 男 女

出身国・地域： _____都・道・府・県・省・道・市

母語： _____

英語能力：TOEIC Test（990点満点） _____点/TOFEL iBT（120点満点） _____点

英語学習歴： _____年/学校教育 _____年生から 例) 小学校1年生から

高校卒業時の学力： _____級/ _____点

質問

- 1.どの地域の高校に通っていましたか？また、高校に入学したのはいつですか？
- 2.高校では英語の授業は週に何コマありましたか？
- 3.学校の授業以外で、自主的に英語を勉強していましたか？ 例) 塾など
↳ はい / いいえ
- 4.英語の先生はネイティブスピーカーでしたか？
↳ はい / いいえ
- 5.英語の授業は英語で行われていましたか？または母語で行われていましたか？
↳ 英語のみ / 母語のみ / 英語と母語両方
- 6.授業はどのような流れで行われていましたか？ 例) 発音練習→教科書の読解
7. 英語学習に対するモチベーションはありましたか？
- 8.教師は成績の付け方についての基準を公表していましたか？また、教師はどのように成績をつけていたと思いますか？
- 9.英語学習の意義や目標は授業内で明確化されていましたか？

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

なおこの調査票を研究目的で使用することに同意しない方は以下の□に✓してください。

調査結果を研究目的で使用することに同意しない

中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の
日本語の身体語彙を使った慣用表現の
意味推測に及ぼす母語の影響
—正の転移と負の転移の視点から—

The Influence of the First Language Knowledge on the Semantic
Inference of the Japanese Idiomatic Expressions Using
Body-nouns by Chinese and Korean Native Speakers Learning
Japanese as a Second Language: from the Viewpoints of Positive
and Negative Transfers

明治大学 国際日本学部
高 ミンソン・牟 博宸

Meiji University School of Global Japanese Studies
Minseong Go • Bochen Mu

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究
 3. 研究課題
 4. 調査の概要
 - 4.1. 調査対象者
 - 4.2. 材料
 - 4.3. 手続き
 5. 結果と分析
 - 5.1. 調査結果と総合的分析
 - 5.2. 個別分析—「正の転移」の視点から
 - 5.2.1. 韓国人学習者の場合
 - 5.2.2. 中国人学習者の場合
 - 5.3. 個別分析—「負の転移」の視点から
 - 5.4. 個別分析—日本語習熟度の観点から
 - 5.5. 個別分析—中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の違い
 6. 考察
 7. 終わりに
- 付記
- 参考文献
- <インターネット>
- <調査に用いたウェブサイト>
- 付録1 <フェースシート> (中国語版)
- 付録2 <フェースシート> (韓国語版)
- 付録3 <調査用紙> 中国語版 (一部抜粋)
- 付録4 <調査用紙> 韓国語版 (一部抜粋)
- 付録5 <同意書> (韓国語版)

1. はじめに

歴史的に関連の深い日本と中国、韓国には、似たような慣用表現が数多く存在する。その中でも、身体語彙を使った慣用表現が多くあるということは、ほかの言語と比べ、特徴的なところである。その慣用表現の中には、日中韓三か国の言語で同じ形で同じ意味を表す表現、同じ形で異なる意味、またはどちらかの二つの国の言語だけが意味が共通している表現、さらには、三か国の言語がそれぞれ違う意味で使われる表現などが複雑に存在しているため、それぞれの言語の学習においては、混乱が予想される。森田（1966）によると、日本語の慣用句における理解度調査では、日本人学生の誤解率は14.15%であったのに対し、外国人の誤解率は79.26%で、日本語学習者の慣用句の理解度が日本人より顕著に低いことが指摘されている。また、ダニーミン・佐野（2001）では、24か国の留学生に対し、20の日本語の慣用句をどの程度理解しているかを調査した結果、その平均理解度は52%にとどまったという結果が得られている。この結果からも、日本語学習者にとって日本語の慣用句の習得がいかに困難であるかがわかる。

そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人日本語学習者）と韓国語を母語とする日本語学習者（以下、韓国人日本語学習者）が未知の日本語の身体慣用表現に出会った場合、どのようにその表現の意味を推測するのか、その推測の過程で母語の影響（言語転移）は存在するのか、母語の影響は日本語習熟度により違いはあるのか、について、検討する。

この研究によって、未知の表現の意味推測に学習者の母語の影響があるかどうか、また、母語の影響はどのような場合に顕著に起こるかが明らかになり、日本語教育現場の中で、各学習者の母語に沿った効率的な教え方に示唆を与えることができると考える。

2. 先行研究

大塚（1994）は、日本の大学で日本語を学ぶ中級レベルの英語母語話者30名を対象に、日本語の身体語彙の理解度調査を行った。その結果、学習者は第一言語やその文化的背景を基に、日本語の身体語彙を解釈する傾向が強いこと、また、身体語彙を用いた身振りの表現においては、その身振りの機能や言外の意味は言語により異なること、さらに、抽象化された身体語彙はその文化の影響を受ける、ということが示された。例えば、日本語の「頭を搔く」と英語の「scratch one's head」は、どのような身振りであるかは、字義通りで、その解釈は同じだが、その身振りがどのような時に行われる動作であるか、つまり、その動作の背景にある心理状態や言外の意味はそれぞれ異なる。日本人にとって頭を搔く場合とは、恥ずかしく思うときであり、英語圏の人にとっては、何かを考えるとときである。そのため、「頭を搔く」は日本語では「照れている」という心理状態を表すのに対して、英語では「困惑している」という心理描写に使われるようになったのである。また、王（2013）では、中国在住の中国人初級日本語学習者240名を対象に、24の未知の日本語の身体慣用句について、その理解度調査を行った結果、中国語に類似表現がある場合、その類似表現

の意味で日本語の慣用句の意味を推測したり、述語の形容詞に引かれ、間違っただニュアンスで理解したりする傾向があることを明らかにした。例えば、「目が高い」の場合、中国人日本語学習者は中国語での類似表現の「眼光高（目線が高い、意味はく要求する条件が高い）」から意味推測をし、誤答の「要求水準が高い」を選んだが、「鼻が高い」の場合は、中国語でも類似表現（「鼻孔朝天（鼻穴は天に向かう、意味はく傲慢な態度）」）があるが、中国語での「高い」が持つポジティブなイメージに導かれ、正答の「誇りに思う」を選んだという。また、石田（2006）では、日本語母語話者の20名の大学生を対象に、未知の英語慣用表現の意味推測調査を行った。その結果、日本語と英語の間には言語類型論的な系統関係がないにも関わらず、日本語にある慣用表現を手掛かりにし、未知の英語慣用表現を解釈する場合があること、また、その場合、英語と形式的類似性が高い日本語の表現から意味推測する場合もあれば、形式的類似性とは無関係に推測を行う場合があることがわかった。さらに、文脈の有無を比較した結果、文脈が提示される場合の意味推測の方がそうでない場合より、母語で意味解釈する傾向は弱いという結果となった。

慣用表現の意味推測の知見以外に本研究に示唆を与える研究成果として、動詞習得における言語転移について、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者を比較した研究もある。梁（2003）では、韓国人日本語学習者を対象に、日本語の基本動詞「行く」、「する」、「なる」、「上がる」、「食べる」の習得において母語の影響が生じるのか否かを、中国人日本語学習者と比較しながら調査を行った。その結果、動詞の意味・用法が学習者の母語と目標言語とで類似しているか否かで、有意な差は見られなかったが、負の転移が起こっている場合には、目標言語の知識を十分習得している上級者より中級者の方が比較的多く誤りを犯すということが示された。

以上のような意味推測や習得に及ぼす母語の影響を検討した研究以外にも、本研究に示唆を与える成果として、日・英・韓の身体名称に関する慣用表現を比較した基礎研究もある。吉川（2007）は、「顔」、「頭」、「足」、「鼻」の四つの身体名詞を用いた表現を、日本語、韓国語、英語の間で比較対照した結果、日本語と韓国語間の類似性が高い表現は、それに比例して英語とも相対的に類似性が高くなる傾向があり、反対に、日本語と韓国語間の類似性が低い表現は、英語とも相対的に類似性が低くなるということがわかった。例えば、日本語と韓国語の間で類似性が高い身体表現が多い身体名詞は「頭(76.5%)」と「顔(69.8%)」で、少ない身体名詞は「足(31%)」と「鼻(28.6%)」であるが、これは、日本語と英語の間で類似性が高い身体表現が多い身体名詞（「頭(25.6%)」、「顔(33.3%)」）と少ない身体名詞（「足(14.6%)」、「鼻(10.7%)」）と一致する。つまり、三言語の身体名称の慣用表現には、類似性の相関関係があるということである。

このように、先行研究は慣用表現の習得に及ぼす母語の影響について示唆的であるが、韓国人日本語学習者を対象とした慣用表現の意味推測の調査研究や、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の両者に同じ慣用表現を用いた調査を行った研究は、管見の限り、見当たらない。そのため、同じ慣用表現でも、どのような慣用表現が韓国人日本語学習者、

あるいは、中国人日本語学習者の、いずれか一方にのみ母語の転移が影響するのか、また、どのような慣用表現が日本語の言語個別的表現で、いずれの学習者にも母語の知識が活用できないのかなど、解決すべき課題は残されている。

3. 研究課題

先行研究の成果と、残された課題を踏まえ、本研究では、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者が、どのように未知の日本語の慣用表現を推測するのかを検討するために、以下を研究課題とする。

課題 1：中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者が、日本語の身体語彙を使った慣用表現の意味を推測する際、それぞれの母語は影響（言語転移）するのか。

課題 2：中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者とは、未知の日本語の慣用表現の推測においてどのような違いがあるのか。

課題 3：日本語習熟度により、意味推測における母語の影響、特に、言語転移（正の転移と負の転移）は異なるのか。

4. 調査の概要

4.1. 調査対象者

調査対象者は、中国の安徽省、江蘇省の大学の日本語専攻の学部 2 年生から 4 年生までの中国人日本語学習者 30 名（男性 5 名、女性 22 名、無記入 3 名）と、ソウル市内の大学の日本語専攻の学部 2 年生から 4 年生までの韓国人日本語学習者 30 名（男性 11 名、女性 19 名）である。調査時における日本語学習歴は、中国人日本語学習者が平均 1 年 7 か月で、最も短い者で 1 年、最も長い者で 4 年であり、韓国人日本語学習者が平均 4 年 2 か月で、最も短い者で 2 年、最も長い者で 10 年であった。日本語能力試験の合格者は、中国人日本語学習者 30 名のうち、N1 合格者が 1 名、N2 が 8 名、それ以外の 21 名は未受験であった。一方、韓国人日本語学習者 30 名のうち、N1 合格者が 10 名、N2 が 10 名、N3 が 2 名、それ以外の 8 名は未受験であった。

4.2. 材料

調査対象の慣用表現は、辞書やコーパスなどを活用して行った。具体的には、インターネット辞書サイト「Weblio 辞書」の「身体慣用句一覧」に掲載のある慣用表現について、実際の使用頻度を、国立国語研究所の「日本語書き言葉均衡コーパス」で確認しながら、抽出した。抽出の際には、コーパスでの使用頻度が 10 以上になっている表現だけをリストアップして、最終的に 30 の表現を選定した（表 1）。

なお、調査対象表現を決定する際には、日本語の当該表現を中国語や韓国語に翻訳すると、①日中韓でそれぞれ意味が異なるもの（日≠中≠韓）、②日韓両言語では意味が同じだが、中国語でだけ異なるもの（日≒韓≠中）、③日中両言語では意味が同じだが、韓国語でだけ異なるもの（日≒中≠韓）、を、それぞれ 10 ずつ選ぶようにした。さらに、調査対象表現が日本語で言えるかどうかの判断は、コーパスの頻度調査だけでなく、最終的には、複数の日本語母語話者にも最終判断を依頼した上で、行った。また、中国語と韓国語で当該表現が言えるか否かの判断については、母語話者である筆者らが最初に判断を行った上で、各言語の辞書で最終的な確認を行った。

表 1 本研究の調査対象表現

目が肥える	目を剥く	手を焼く	手が塞がる	手が切れる
手を打つ	腹を据える	腹を下す	腑に落ちる	腹を割る
顔が売れる	目が行く	目を逸らす	耳に障る	鼻を折る
鼻を突く	口が重い	口に上る	口を尖らす	首が飛ぶ
頭が高い	目が近い	首を縮める	口が悪い	舌を出す
手を染める	耳を澄ます	腰を折る	尻を拭う	目を凝らす

4.3. 手続き

調査方法としては、インターネットを利用した質問調査を行った。韓国人学習者の場合はグーグルのアンケート機能を、中国人学習者の場合は「腾讯问卷」を使って、対象者個々がウェブに接続して解答する形式で調査を行った。調査では、対象表現の認知度、理解度を尋ねた。認知度は「その表現の意味を知っているか、聞いた・見たことがあるか、知らないか」、理解度は「その表現の意味はどれだと思うか」とした。

なお、認知度については、「知っている」、「聞いた・見たことがある」、「知らない」の三肢選択式とした。また、理解度は推測の際に母語の影響があるかどうかを判断する指標となるため、対象表現の、身体表現以外の述語部分を空所にし、そこに当てはまる語（動詞、あるいは形容詞）を四つの中から一つ選ぶ多肢選択式で作成した。例えば、「目が肥える」であれば、「目が（ ）」とし、（ ）に入る語を多肢選択式で選ばせるという方法である。

ただし、理解度の選択肢は、対象表現に応じて、作成方法を変えた。前述したように、対象表現は、①日中韓でそれぞれ意味が異なるもの（日≠中≠韓）、②日韓両言語では意味が同じだが、中国語でだけ異なるもの（日≒韓≠中）、③日中両言語では意味が同じだが、韓国語でだけ異なるもの（日≒中≠韓）、の三つのタイプがあるため、選択肢の構成もそれぞれの対象表現のタイプに応じて、異なるようにする必要がある。具体的には、①各言語でそれぞれ異なる表現の場合の選択肢の構成は、(A) 韓国人日本語学習者を錯乱させるもの、(B) 中国人日本語学習者を錯乱させるもの、(C) 正答、(D) ダミーである。また、②

日韓で共通する表現の場合は、韓国人学習者を錯乱させる選択肢は作成せず、(A) 中国人日本語学習者を錯乱させるもの、(B) 正答、(C) と (D) 二つのダミー、となるようにした。さらに、③日中で共通する表現の場合は、中国人学習者を錯乱させる選択肢は作成せず、(A) 韓国人日本語学習者を錯乱させるもの、(B) 正答、(C) と (D) 二つのダミーとした。

なお、一つの慣用表現が複数の意味を持っている場合もあるため、筆者らが意図する意味の各言語の訳を日本語の表現の下に提示した。例えば、「目が肥える」の場合は、「目が()」の下に、中国語の場合は、「有眼力。有鉴赏力。眼力高」と表示した。また、韓国語の場合は「안식이 높아지다」と表示した。なお、これらの中国語訳と韓国語訳は、辞書などを参照しながら、筆者らが作成した。さらに、ウェブ調査の特性上、調査監督ができないため、調査用紙には、辞書を見ないように注意喚起の教示を行った。

5. 結果と分析

5.1. 調査結果と総合的分析

まず、各問題の認知度の結果は表 2 の通りである。なお、表中の「見たことがある」は、調査時に「見たことがある・聞いたことがある」とした選択肢の略称である。

次に、各問題の理解度の結果は表 3 の通りである。表 3 の「正解者数」が正しい意味を選んだ人数である。また、「見・知者数」は、比較のために掲載した数で、認知度で「見たことがある・聞いたことがある」、および「知らない」を合算した値である。これは、「見たことがある・聞いたことがある」を選んだ対象者も、その表現を見た・聞いただけであって、意味までは把握していないと見なして、「知らない」と答えた人と合算するのが妥当だと考えたためである。

表 2 認知度の結果

	正答	KNS	KNS	KNS	CNS	CNS	CNS
		知っている (%)	見たことがある (%)	知らない (%)	知っている (%)	見たことがある (%)	知らない (%)
1	目が肥える	4(13.3)	10(33.3)	16(53.3)	2(6.7)	9(30.0)	19(63.3)
2	目を剥く	4(13.3)	11(36.7)	15(50.0)	1(3.3)	6(20.0)	23(76.7)
3	手を焼く	4(13.3)	8(26.7)	18(60.0)	0(0.0)	11(36.7)	19(63.3)
4	手が塞がる	3(10.0)	6(20.0)	21(70.0)	0(0.0)	9(30.0)	21(70.0)
5	手が切れる	3(10.0)	10(33.3)	17(56.7)	1(3.3)	5(16.7)	24(80.0)
6	手を打つ	7(23.3)	9(30.0)	14(46.7)	0(0.0)	8(26.7)	22(73.3)
7	腹を据える	1(3.3)	4(13.3)	25(83.3)	0(0.0)	7(23.3)	23(76.7)
8	腹を下す	5(16.7)	4(13.3)	21(70.0)	1(3.3)	7(23.3)	22(73.3)

9	腑に落ちる	1(3.3)	3(10.0)	26(86.7)	0(0.0)	6(20.0)	24(80.0)
10	腹を割る	3(10.0)	6(20.0)	21(70.0)	1(3.3)	7(23.3)	22(73.3)
11	顔が売れる	8(26.7)	11(36.7)	11(36.7)	0(0.0)	7(23.3)	23(76.7)
12	目が行く	10(33.3)	7(23.3)	13(43.3)	0(0.0)	9(30.0)	21(70.0)
13	目を逸らす	13(43.3)	5(16.7)	12(40.0)	0(0.0)	7(23.3)	23(76.7)
14	耳に障る	11(36.7)	8(26.7)	11(36.7)	0(0.0)	9(30.0)	21(70.0)
15	鼻を折る	6(20.0)	8(26.7)	16(53.3)	1(3.3)	4(13.3)	25(83.3)
16	鼻を突く	3(10.0)	9(30.0)	18(60.0)	0(0.0)	9(30.0)	21(70.0)
17	口が重い	18(60.0)	10(33.3)	2(6.7)	2(6.7)	9(30.0)	19(63.3)
18	口に上る	4(13.3)	9(30.0)	17(56.7)	0(0.0)	4(13.3)	26(86.7)
19	口を尖らす	2(6.7)	3(10.0)	25(83.3)	1(3.3)	7(23.3)	22(73.3)
20	首が飛ぶ	6(20.0)	10(33.3)	14(46.7)	1(3.3)	7(23.3)	22(73.3)
21	頭が高い	2(6.7)	4(13.3)	24(80.0)	3(10.0)	10(33.3)	17(56.7)
22	目が近い	4(13.3)	9(30.0)	17(56.7)	4(13.3)	9(30.0)	17(56.7)
23	首を縮める	0(0.0)	4(13.3)	26(86.7)	1(3.3)	6(20.0)	23(76.7)
24	口が悪い	18(60.0)	5(26.7)	7(23.3)	3(10.0)	6(20.0)	21(70.0)
25	舌を出す	1(3.3)	4(13.3)	25(83.3)	1(3.3)	6(20.0)	23(76.7)
26	手を染める	9(30.0)	9(30.0)	12(40.0)	1(3.3)	3(10.0)	26(86.7)
27	耳を澄ます	1(3.3)	1(3.3)	28(93.3)	1(3.3)	10(33.3)	19(63.3)
28	腰を折る	1(3.3)	1(3.3)	28(93.3)	0(0.0)	5(16.7)	25(83.3)
29	尻を拭う	1(3.3)	6(20.0)	23(76.7)	0(0.0)	6(20.0)	24(80.0)
30	目を凝らす	6(20.0)	10(33.3)	14(46.7)	1(3.3)	10(33.3)	19(63.3)

注1：KNS＝韓国人日本語学習者、CNS＝中国人日本語学習者。

注2：1～10：(日≠中≠韓)、11～20：(日≠韓≠中)、21～30：(日≠中≠韓)。

表3 調査の総合結果

	正答	KNS 正答者数(%)	KNS 見・知者数(%)	CNS 正答者数(%)	CNS 見・知者数(%)
1	目が肥える	5(16.7)	26(86.7)	3(10.0)	28(93.3)
2	目を剥く	6(20.0)	26(86.7)	2(6.7)	29(96.7)
3	手を焼く	10(33.3)	26(86.7)	1(3.3)	30(100.0)
4	手が塞がる	8(26.7)	27(90.0)	7(23.3)	30(100.0)
5	手が切れる	22(73.3)	27(90.0)	13(43.3)	29(96.7)
6	手を打つ	11(36.7)	23(76.7)	4(13.3)	30(100.0)

7	腹を据える	3(10.0)	29(96.7)	1(3.3)	30(100.0)
8	腹を下す	12(40.0)	25(83.3)	11(36.7)	29(96.7)
9	腑に落ちる	5(16.7)	29(96.7)	2(6.7)	30(100.0)
10	腹を割る	9(30.0)	27(90.0)	1(3.3)	29(96.7)
11	顔が売れる	24(80.0)	22(73.3)	2(6.7)	30(100.0)
12	目が行く	21(70.0)	23(76.7)	2(6.7)	30(100.0)
13	目を逸らす	22(73.3)	17(56.7)	3(10.0)	30(100.0)
14	耳に障る	26(86.7)	19(63.3)	7(23.0)	30(100.0)
15	鼻を折る	21(70.0)	24(80.0)	10(33.3)	29(96.7)
16	鼻を突く	23(76.7)	27(90.0)	6(20.0)	30(100.0)
17	口が重い	30(100.0)	12(40.0)	3(10.0)	28(93.3)
18	口に上る	22(73.3)	26(86.7)	6(20.0)	30(100.0)
19	口を尖らす	17(56.7)	28(93.3)	4(13.3)	29(96.7)
20	首が飛ぶ	12(40.0)	24(80.0)	0(0.0)	29(96.7)
21	頭が高い	13(43.3)	28(93.3)	26(86.7)	27(90.0)
22	目が近い	11(36.7)	26(86.7)	7(23.3)	26(86.7)
23	首を縮める	14(46.7)	30(100.0)	21(70.0)	29(96.7)
24	口が悪い	26(86.7)	12(40.0)	24(80.0)	27(90.0)
25	舌を出す	4(13.3)	29(96.7)	13(43.3)	29(96.7)
26	手を染める	3(10.0)	21(70.0)	21(70.0)	29(96.7)
27	耳を澄ます	11(36.7)	29(96.7)	23(76.7)	29(96.7)
28	腰を折る	6(20.0)	29(96.7)	19(63.3)	30(100.0)
29	尻を拭う	13(43.3)	29(96.7)	22(73.3)	30(100.0)
30	目を凝らす	11(36.7)	24(80.0)	20(66.7)	29(96.7)

注1：KNS＝韓国人日本語学習者、CNS＝中国人日本語学習者

注2：1～10：(日≠中≠韓)、11～20：(日≠韓≠中)、21～30：(日≠中≠韓)。

表3を見てみると、韓国人学習者の場合は11～20番が、中国人学習者の場合は21～30番の問題の正答率が、それぞれほかの問題と比べ、非常に高いことがわかる。これは、日本語と学習者の母語で表現が同じ場合、学習者の母語から日本語への正の転移が起こって、母語と同じ形式の日本語の表現を選ぶことで正答に正しく導かれたからだと考えられる。中には、韓国人学習者の場合、19と20番のように比較的に正答率が低い問題もあるが、いずれも4つの選択肢の中では、正答が最も多く選ばれた選択肢であるため、母語の影響があったといえる。中国人学習者の場合は、22と25番のように、正答率が相対的に低い問題も存在するが、25番は、正答が4つの選択肢の中では最も多く選択されたため、母語の影

響が存在すると言えるであろう。22 番の場合は、最も多く選択された選択肢は正答ではなく、「弱々しい」であった。しかし、これも、中国語の中に「視力弱」という「目が近い」と同じ意味の表現も存在するため、母語の影響による解答だと考える。

一方で、学習者の母語と日本語で表現が異なる場合（日本語と中国語で表現が異なる：1～10、および 11～20、日本語と韓国語で表現が異なる：1～10、および 21～30）は、いずれにおいても正答率が 50%をはるかに下回る結果となった。これは、それぞれの学習者が、母語と異なる表現（正解）は選ばずに、母語と同じ、または似たような表現を選んでしまう、つまり母語からの負の転移が起こったためであると推測できる。

なお、本研究は未知の表現の意味推測を検討するため、既に知っていると考えられる表現（韓国人学習者の 24 番）や、問題の下に書いてある母語での説明に正答の動詞、または形容詞が含まれており、推測に影響を与えた可能性がある表現（韓国人学習者、および中国人学習者の双方で 5 番）については、次節以降の個別分析において、対象外として分析から外すこととする。

5.2. 個別分析—「正の転移」の視点から

母語からの正の転移で意味推測に成功したか否かを検討するため、学習者の母語と日本語と双方で意味が同じ問題について具体的に分析することにする。

以下は、それぞれの学習者の母語と日本語とで意味が同じ問題項目について、正答者の中で、認知度において未知（「見た・聞いたことがある」、および「知らない」の合算）であった者の数とその割合を表したものである。つまり、当該表現は日本語では未知であったが、母語の知識を使って意味推測に成功したと考えられる者の割合である。

表 4 同一表現問題において意味推測に正解した者

	正答	KNS 正答者数	KNS 正答者中 未知者数(%)		正答	CNS 正答者数	CNS 正答者中 未知者数(%)
11	顔が売れる	24	18(75.0)	21	頭が高い	26	25(96.2)
12	目が行く	21	15(71.4)	22	目が近い	7	5(71.4)
13	目を逸らす	22	10(45.5)	23	首を縮める	21	20(95.2)
14	耳に障る	26	15(57.7)	24	口が悪い	24	21(87.5)
15	鼻を折る	21	17(81.0)	25	舌を出す	13	13(100.0)
16	鼻を突く	23	20(87.0)	26	手を染める	21	21(100.0)
17	口が重い	30	12(40.0)	27	耳を澄ます	23	22(95.7)
18	口に上る	22	18(81.8)	28	腰を折る	19	19(100.0)
19	口を尖らす	17	15(88.2)	29	尻を拭う	22	22(100.0)
20	首が飛ぶ	12	8(66.7)	30	目を凝らす	20	19(95.0)

注1：KNS＝韓国人日本語学習者、CNS＝中国人日本語学習者

注2：11～20：(日⇌韓≠中)、21～30：(日⇌中≠韓)。

5.2.1. 韓国人学習者の場合

まず、韓国人学習者の場合から見てみる。各問題の日本語の表現は、韓国語の表現と全く同一の表現である。「顔が売れる」は「얼굴이 팔리다」、「目が行く」は「눈이 가다」、「目を逸らす」は「눈을 돌리다」、「耳に触る」は「귀에 거슬리다」、「鼻を折る」は「콧대를 꺾다」、「鼻を突く」は「코를 찌르다」、「口が重い」は「입이 무겁다」、「口に上る」は「입에 오르다」、「口を尖らす」は「입을 삐죽 내밀다」、「首が飛ぶ」は「목이 날아가다」で、それぞれ日本語の表現から直訳して同じ意味の韓国語の表現になる。以下では、このうち、「目が行く」、「鼻を折る」、「首が飛ぶ」、の三つの問題項目を取り上げ、具体的に説明する。

表5 問題12の「目が行く」

問12.目が（ ）	
選択肢	選択人数（％）
A 吸 <small>す</small> われる	0 (0.0)
B 転 <small>ま</small> わる	5 (16.7)
C 行 <small>い</small> く (正答)	21 (70.0)
D 動 <small>うご</small> かせる	4 (13.3)

問題12番の「目が（）」で、正答の「行く」を選んだ者は70%で、全体の約3分の2以上の者が正しく正答を選んだ。「目が行く」は、韓国語でも「눈이 가다(目が行く)」と言うため、韓国人学習者は「目が行く」という表現の意味を知らなかったとしても、母語と同じ表現を選ぶことで、正解にたどり着くことができたと考えられる。これは母語からの正の転移だと言えよう。また、正答の次に多く選ばれた「動かせる」と「転わる」を見てみると、両方とも運動や移動を表す動詞である。そのため、10%強の者が選択したのだろう。しかし、「目が行く」の意味である<あるものに心がひかれて視線が向かう>ためには、主語の「目」が、ある方向に向けて動かなければならないため、動きにかかわらないもう一つの選択肢の「吸われる」は誰も選ぶ者がいなかったのだと考えられる。

表6 問題15の「鼻を折る」

問15.鼻を（ ）	
-----------	--

選択肢	選択人数 (%)
A 押さえる	9 (30.0)
B 挑む	0 (0.0)
C 登る	0 (0.0)
D 折る (正答)	21 (70.0)

問題 15 番の「鼻を ()」も 12 番の結果と同様に、正答の「折る」を選んだ者は 70% で、全体の 3 分の 2 以上の者が正しく正解を選んだ。「鼻を折る」は、韓国語でも「코대를 꺾다 (鼻を折る)」であるため、韓国人学習者は「鼻を折る」の意味を知らなかったとしても、母語と同じ表現を選ぶことで、未知の日本語の意味推測に成功することができたのだろう。ただし、問題 12 番と異なるところは、「折る」以外に選ばれた選択肢が「押さえる」一つしかないということである。ほかの選択肢を見てみると、「挑む」は「挑戦する」という意味で、名詞の「鼻」と関連性がなく、「鼻を挑む」という表現は意味不明である。また、「登る」という動詞は、主に山や木などと共起する動詞で、「코를 오르다 (鼻を登る)」と使う場合、やや不自然で、こちらは何を意味するのかが不明であるため、結果的に「挑む」と「登る」は選ばれなかったと推測できる。一方、「抑える」は、「力を加える」という点が「折る」と共通しているため、30%の者が「抑える」を選択したと考えられる。

表 7 問題 20 の「首が飛ぶ」

問 20.首が ()	
選択肢	選択人数 (%)
A 飛ぶ (正答)	12 (40.0)
B 解ける	4 (13.3)
C 無くなる	11 (36.7)
D 離れる	3 (10.0)

問題 20 番は、日韓共通表現の中で最も正答者が少なかった問題である。「首が飛ぶ」の正答を選んだ者は 40% (30 人中 12 人) に過ぎない。母語の知識をそのまま使えば、正答できる問題であったにも関わらず、どうしてこのように正答率が低かったのだろうか。

考えられる理由としては、「首が飛ぶ」から連想される「首が無くなる」が選択肢の一つとなっていることがある。日本語でも、「首が飛ぶ」は「首になる」とも言い換えられるように、韓国語でも「목이 날아가다 (首が飛ぶ)」は「목이 잘리다 (首が切れる)」とも言える。どちらでも、主語の首が飛べば (または、切れれば)、「無くなる」ことになるため、

結果を表した「首が無くなる」も選ばれやすかったと考えられる。選択率がそれほど高くはないものの、「首が解ける」と「首が離れる」も同じように説明ができるであろう。しかし、「解ける」と「離れる」は、動作が行われてから完結するまで、ある程度の時間が必要とする動詞であるため、この二つの選択肢はあまり選ばれなかったと推測できる。

5.2.2. 中国人学習者の場合

次に、中国人学習者の場合を見てみる。日本語と中国語と双方で同一の意味を持つ表現は 21～30 である。「頭が高い」は「头颅高昂」、「目が近い」は「近视」、「首を縮める」は「缩头」、「口が悪い」は、「恶语相向」、「舌を出す」は「吐（出）舌头」、「手を染める」は「染指」、「耳を澄ます」は「洗耳恭听」、「腰を折る」は「折腰」、「尻を拭う」は「擦屁股」、「目を凝らす」は「凝视」で、それぞれ日本語の表現から直訳して、同じ意味の中国語の表現になる。このうち、「図が高い」、「口が悪い」、「尻を拭う」、の三つの問題項目を取り上げ、具体的に考察してみる。

表 8 問題 21 の「頭が高い」

問 21.頭が（ ）	
選択肢	選択人数 (%)
A おお 大きい	1 (3.3)
B ちい 小さい	2 (6.7)
C たか 高い (正答)	26 (86.7)
D ひく 低い	1 (3.3)

問題 21 番の「頭が（）」で、正答の「高い」を選んだ者は 86.7%である。つまり、全体の約 3 分の 2 以上の者が正しく正答を選んだということである。「頭が高い」を中国語では「头颅高昂」と言うため、中国人日本語学習者は「頭が高い」という表現の意味を知らなかったとしても、母語の知識を活用し、母語と最も類似する表現を選ぶことで、正解にたどり着くことができたと考えられる。つまり、母語からの正の転移だと言えよう。また、中国語の中には「高」以外、「頭が高い」という意味を表す形容詞がないため、ほぼ全員が正答を正しく選ぶことができたと考えられる。

表 9 問題 24 の「口が悪い」

問 24.口が（ ）	
------------	--

選択肢	選択人数 (%)
A 悪い (正答)	24 (80.0)
B 勇ましい	2 (6.7)
C 卑しい	0 (0.0)
D 強い	4 (13.3)

問題 24 番の「口が ()」も、21 番の結果とほぼ同様に、正答の「悪い」を選んだ者の割合は 80%であった。これもまた、およそ全体の 3 分の 2 以上の者が正しく正解を選んだという結果となった。「口が悪い」は、中国語では「恶语相向/恶语相加」であるため、中国人学習者は「口が悪い」という慣用表現の意味を知らなかったとしても、母語と同じ表現を選ぶことで、未知の日本語の意味推測に成功することができたのだろう。しかし、問題 21 番と異なるところは、選択肢の一つである「卑しい」が全く選択されなかったということである。この背景として、他の選択肢の「強い」は<強勢>という意味で、主語の「口」と関連性があるため選択され、「勇ましい」は中国語で「口舌之勇」のように使う場合もあるため選択されたと推測できる一方で、「卑しい」は、中国語の中で<卑怯>や<地位が低い>の意味しか持たないため、「口」と共起するにはやや不自然である。そのため、四つの選択肢の中で、「卑しい」は、全く選ばれなかったのだろう。

表 10 問題 29 の「尻を拭う」

問 29.尻を ()	
選択肢	選択人数 (%)
A 舐める	7 (23.3)
B 蹴る	1 (3.3)
C 拭う (正答)	22 (73.3)
D 知る	0 (0.0)

問題 29 番で正答の「尻を拭う」を選んだ者は全体の 73%であり、上記の二つの問題と類似した結果となった。この問題もまた、問題 24 番と同様に、選択肢の一つである「知る」が全く選択されなかった。しかし、この問題の場合、24 番と違って、「舐める」に解答が集中した。その理由として、「尻を舐める」という表現が中国語の中に存在するということがあげられる。「尻を舐める」とは、中国語の中では<媚び諂う>という意味である。一方、「蹴る」と「知る」の場合、「尻を拭う」の意味の<後片付けをする>とは意味的につなが

らないため、それぞれ 1 人と 0 人の学習者にしか選択されなかったと考えられる。要するに、学習者は学習したことのない表現に対して、自分の母語と日本語を比較し、母語と日本語とで同じ表現、あるいは類似する表現が最初に思い浮かぶ傾向があると考えられる。

5.3. 個別分析—「負の転移」の視点から

次に、学習者の母語から負の転移で意味推測に失敗したか否かを検討するため、学習者の母語と日本語とで形式が異なる表現について見てみる。なお、日中、日韓で表現が共通であるところを除いて、中国人学習者の場合、問題 1～20 までを、韓国学習者の場合、問題 1～10 と 21～30 までを、この分析の対象範囲にする。なお、以下の表における「錯乱肢」とは、学習者の母語の影響で選ばれやすい選択肢のことである。

表 11 韓国人学習者の母語からの負の転移

	正答	錯乱肢	最多選択肢	錯乱肢選択者数	錯乱肢選択者率	結果
1	目が肥える	高まる	高まる	22	73.3	○
2	目を剥く	燃やす	睨む	6	20.0	△
3	手を焼く	捨てる	縛る	6	20.0	△
4	手が塞がる	困る	困る	15	50.0	○
5	手が切れる	死ぬ	切れる	6	20.0	外
6	手を打つ	使う	使う	15	50.0	○
7	腹を据える	抑える	抑える	13	43.3	○
8	腹を下す	出す	下す	8	26.7	X
9	腑に落ちる	納める	納める	15	50.0	○
10	腹を割る	見せる	割る＝明かす	7	23.3	△
21	頭が高い	大きい	大きい	17	56.7	○
22	目が近い	遠い	遠い	15	50.0	○
23	首を縮める	無くす	縮める	9	30.0	X
24	口が悪い	卑しい	悪い	3	10.0	外
25	舌を出す	見せる	見せる	12	40.0	○
26	手を染める	付ける	付ける	26	86.7	○
27	耳を澄ます	塞ぐ	澄ます	6	20.0	X
28	腰を折る	切る	切る	13	43.3	○
29	尻を拭う	舐める	拭う＝舐める	13	43.3	△
30	目を凝らす	留める	留める	12	40.0	○

注：○：予想通りの「負の転移」、△：予想と異なった「負の転移」、×：「負の転移」なし、外：対象外

まず、韓国人日本語学習者の母語からの負の転移を見てみる（表 11）。結果からいうと、予想通りに、錯乱肢が選ばれやすかった問題が 11 個、錯乱肢以外の選択肢を選んで起こった負の転移が 4 個、錯乱されたとは言い難い問題が 3 個であった。このことから、韓国人学習者の場合、日本語の未知の表現に出会った場合、母語からの負の転移が起こりやすいことが示唆される。

まず、負の転移が確かに起こったと言えるものからみると、そのタイプは大きく三つに分けられる。まず、「目が肥える」は「目が高まる (눈이 높아지다)」、「手を打つ」は「手を使う (손을 쓰다)」、「手を染める」は「手を付ける (손을 대다)」のように日本語の表現がそのまま韓国語で言えるものである。また、「腰を折る」は「말을 끊다 (話を切る)」から「腰を切る」、「頭が高い」は「머리가 크다 (頭が大きい、意味は<大人になる>)」から「頭が大きい」、「目を凝らす」は「시선을 멈추다 (視線を留める)」から「目を留める」、のように、意味は同じではないが、韓国語の中で前の名詞と共起しやすい動詞や形容詞で日本語の表現と意味的に近いものである。さらに、「目が近い」は<遠くのものがかき見えぬ>から「目が遠い」、「手が塞がる」は<何かをしていてほかのことはできない状態>から「手が困る」など、当該表現の韓国語の説明から連想されるものである。

次に、予想と異なった負の転移が起こったものを見てみる。「目を剥く」と「手を焼く」の場合、日本語の表現の韓国語の説明から作った「目を燃やす」と「手を捨てる」より、「目を睨む」と「手を縛る」がそれぞれ多く選ばれた。その理由として、「目」は「燃やす」より「睨む」という動詞と相性がよく、「手」は「捨てる」より「縛る」の方と一緒に使われやすいためであると考えられる。すなわち、韓国人学習者にとって、未知の表現を意味推測する際、その表現の意味から適当な述語を選ぶより、名詞と動詞の関係が優先されるということである。

しかし、選択肢のすべてが負の転移が起こりやすい三つのタイプのいずれかに属する「耳を澄ます」と「首を縮める」では、すべての選択肢が均等に選ばれる結果となった。例えば、「耳を澄ます」の場合、四つの選択肢「澄ます」、「治す」、「整える」、「塞ぐ」は、いずれも「耳」との共起性はある程度存在するが、そのまま直訳しても何の意味も成さず、また、いずれも、表現の意味である<注意を集中して聞こうとする>から連想される語ではないため、四つの選択肢がランダムに選ばれたと推測できる。「首を縮める」の場合も同様の結果であったが、「耳を澄ます」と違うところは、選択肢の一つの「首を垂らす」はだれも選ばなかったという点である。これは、韓国語で「首を垂らす」が、<他人に承服したり、媚びへつらったり、謙譲の意で首を下げる>の意味で、「首を縮める」の韓国語の説明とは明らかに異なる意味であるため、最初から正答の候補から外されたと考えられる。

表 12 中国人学習者の母語からの負の転移

	正答	錯乱肢	最多選択肢	錯乱肢選択者数	錯乱肢選択者率	結果
1	目が肥える	尖る	尖る	16	53.3	○

2	目を剥く	睨む	睨む＝燃やす	14	46.7	△
3	手を焼く	縛る	縛る	24	80.0	○
4	手が塞がる	満ちる	満ちる	17	56.7	○
5	手が切れる	絶える	切れる	10	33.3	外
6	手を打つ	取る	取る	13	43.3	○
7	腹を据える	定める	定める	23	76.7	○
8	腹を下す	漏らす	下す	8	26.7	×
9	腑に落ちる	溶け込む	収める	7	23.3	△
10	腹を割る	曝す	明かす	6	20.0	△
11	顔が売れる	認められる	認められる	17	56.7	○
12	目が行く	吸われる	吸われる	17	56.7	○
13	目を逸らす	移す	移す	23	76.7	○
14	耳に障る	刺さる	刺さる	18	60.0	○
15	鼻を折る	押さえる	押さえる	11	36.7	△
16	鼻を突く	襲う	襲う	20	66.7	○
17	口が重い	少ない	薄い	12	40.0	△
18	口に上る	掛ける	掛ける	17	56.7	○
19	口を尖らす	怒らせる	怒らせる	18	60.0	○
20	首が飛ぶ	解ける	解ける	14	46.7	○

注：○：予想通りの「負の転移」、△：予想と異なった「負の転移」、×：「負の転移」なし、外：対象外

次に、中国人日本語学習者の母語からの負の転移を見てみる（表 12）。結果からいうと、予想通りに錯乱肢が選ばれやすかった問題が 13 個、母語がある程度影響したと考えられる問題が 5 個、錯乱されたとは言い難い問題が 1 個であった。このことから、中国人学習者の場合、日本語の未知表現に出会った場合、母語からの負の転移が起りやすいことが示唆される。

まず、負の転移が確かに起こったと言える場合からみると、韓国語と同様に、そのタイプは大きく三つに分けられる。まず、「手を焼く」は「手を縛る（束手无策）」、「目を逸らす」は「目を移す（转移目光）」、「耳に障る」は「耳に刺さる（刺耳）」のように、日本語の表現がそのまま中国語で言える場合である。また、「手头事情满了（やることが一杯）」から「手を満ちる」、「被人认识的臉（認識される顔）」から「顔が認められる」のように、中国語の中では主語である名詞と高頻度で共起するものである。さらに、「腹を据える」は「下定決心，決定（決心する）」から「腹を定める」、「首を飛ぶ」は「解雇（解雇）」から「首が解ける」のように、主語である名詞（「首」と「腹」）が述語である動詞、形容詞と中国語では一緒に使われにくいもの（この場合、学習者は、主語（または、目的語）である名詞をある程度無視し、その名詞の述語である動詞、形容詞に使われている漢字で意味

推測を行う。これを本稿では、主語に対する「鈍感性」と呼ぶことにする)である。

次に、予想と異なった負の転移が起こったのを見てみると、「口が重い」の場合、中国人が錯乱されやすいと予想して作った「口が少ない」より、「口が薄い」の方がより多く選ばれた。それは恐らく、「薄」という漢字は中国語の中で、物の厚さを表す「薄い」という意味だけではなく、「寡薄（少ない、性格が冷たい）」というような抽象的な意味も表すからであると考えられる。一方、「少」という漢字は中国語の中で、人間の性格を表す意味を持たないことが「薄い」より選択率が低くなった要因の一つとして挙げることができる。さらに、「薄」のような二つ以上の発音を持つ単漢字は中国語の中では「多音字」と呼ばれ、それぞれの音に対し、異なる意味を持つ。例えば、「薄」の場合、三つの音（báo、bó、およびbò）で発音され、「bò」は〈薄荷（ミント）〉という意味でしか使用されず、「báo」は〈（物理上の厚さの）薄い〉、〈人情の冷たさ〉、〈（味の）薄い〉、〈土地が肥沃でない〉という意味を、「bó」は〈見地が浅い〉、〈大したもの（こと）ではない〉、〈軽視〉、〈弱々しい〉、〈（時間上の）間もなく〉という意味を持っている。そのため、どの音の中国語を想起したかによって、意味推測は多様になるため、解答も予想と一致しない結果になったのだと考えられる。すなわち、中国人学習者の場合、漢字の表面的な意味だけを見るのではなく、「多音字」の場合は、複数の音が表す複数の意味から意味推測を行う可能性があると考えられる。

また、問題2番の「目を剥く」の場合、「睨む」と「燃やす」が同数で選択された。しかし、この理由を、上述の三つのタイプから説明することは困難である。なぜなら、まず、「燃」という漢字は、中国語の中で「目」と共起しにくい漢字であるからである。また、「燃」という漢字は、通常〈絶体絶命〉の状況で使われることからわかるように、〈急迫〉の意味を持つ場合が多い(例:「燃眉之急(焦眉の急、事態が差し迫っている)」)。そのため、「燃」は「目を剥く」の意味と全く関連がないと考えられる。それにもかかわらず、なぜ46.7%の中国人日本語学習者が「燃やす」を選択したのだろうか。まず、理由の一つとして、中国語の中に高頻度（頻度については、CCL語料庫を参照した）で使われる「火冒三丈(烈火ごとく立腹する)」という四字熟語があるということが挙げられる。中国語が母語の者なら、「目を剥く」の中国語の説明を見て、日常生活で頻繁に見られる「火冒三丈」を最初に思い浮かべ、そこから「燃やす」を選んだと推測できる。また、インターネットが急速に普及して、日本の様々な文化が中国に流入したのも、もう一つの理由として挙げられる。日本のアニメーションでは、登場人物の憤怒を描写するときに、「目から火が出る」場面が非常に多く見られる。今回の調査対象者が主に15~25歳の大学生であり、日本のアニメーション文化に非常に影響されやすい世代であることと、日本語専攻の者なら基本的に日本文化に興味を持っていること、などの理由で、漢字で意味推測をするより、日本文化の一つであるアニメーションからの影響を受けて「燃やす」を選択したのではないかと考えられる。

5.4. 個別分析—日本語習熟度の観点から

以上の分析から、日本語学習者は日本語の未知の表現に出会った場合、母語の知識に基づいて、初見の日本語の表現を意味推測する可能性が明らかになった。Taylor (1975) では、言語転移とは学習の初級段階でみられ、学習が進むにつれて、母語の影響を受けなくなると述べられているが、それは未知の慣用表現の意味推測の場合にも同じく当てはまるのだろうか。この疑問を検討するべく、本節では、日本語習熟度が高い者と低い者との間には、どのような違いがあるのかについて、分析する。

今回は、調査に際して、日本語習熟度を測定するテストを実施していない。そのため、日本語レベルは、学習者の学年に基づき、学年が2年生の者を初級者、3・4年生の者を中・上級者にして、それぞれ15人ずつ、二つのグループに分けることとした。この二つのグループについて、得点を求めた結果、韓国人学習者の場合、初級者の平均点数は12.8点（最高点：18点、最低点：6点）、中・上級者の平均点数15.4点（最高点：26点、最低点：8点）と、グループの間に大きな得点差があることがわかった。中国人学習者の場合も同様に、初級者の平均点数は8.5点（最高点：12点、最低点：5点）、中・上級者の平均点数は10.5点（最高点：16点、最低点：9点）と、グループ間の得点差は非常に大きい。

表13 正の転移の項目における正答者数（日本語習熟度別）

	正答	KNS 初級	KNS 中・上級		正答	CNS 初級	CNS 中・上級
11	顔が売れる	12	12	21	頭が高い	13	13
12	目が行く	10	11	22	目が近い	4	3
13	目を逸らす	10	12	23	首を縮める	10	11
14	耳に障る	12	14	24	口が悪い	11	13
15	鼻を折る	10	11	25	舌を出す	6	7
16	鼻を突く	12	11	26	手を染める	13	8
17	口が重い	15	15	27	耳を澄ます	11	12
18	口に上る	10	12	28	腰を折る	8	11
19	口を尖らす	9	8	29	尻を拭う	11	11
20	首が飛ぶ	6	6	30	目を凝らす	9	11

まず、学習者の母語と日本語とで同じ表現、すなわち、正の転移で正答できる問題項目から見ると、初級者と中・上級者の間では、正答者数はほぼ差がないことがわかる。すなわち、初級と中・上級の間で差が得られなかったということは、学習者の母語からの正の転移は、日本語習熟度に影響されず起こるということである。

表 14 負の転移の項目における誤答者数（日本語習熟度別）とその差

	正答	KNS 初級	KNS 結果	KNS 中・上級		正答	CNS 初級	CNS 結果	CNS 中・上級
1	目が肥える	12	>	10	1	目が肥える	0	<	3
2	目を剥く	4	>	2	2	目を剥く	1	≒	1
3	手を焼く	4	>	2	3	手を焼く	1	≒	0
4	手が塞がる	7	≒	8	4	手が塞がる	2	<	5
5	手が切れる	4	外	2	5	手が切れる	3	外	9
6	手を打つ	10	>	5	6	手を打つ	1	<	3
7	腹を据える	8	>	5	7	腹を据える	1	≒	0
8	腹を下す	5	>	3	8	腹を下す	5	≒	6
9	腑に落ちる	10	>	5	9	腑に落ちる	1	≒	1
10	腹を割る	3	≒	4	10	腹を割る	0	≒	1
21	頭が高い	10	>	7	11	顔が売れる	0	<	2
22	目が近い	7	≒	8	12	目が行く	1	≒	1
23	首を縮める	5	≒	4	13	目を逸らす	1	≒	2
24	口が悪い	1	外	2	14	耳に触る	2	<	5
25	舌を出す	7	>	5	15	鼻を折る	5	≒	5
26	手を染める	14	>	12	16	鼻を突く	3	≒	3
27	耳を澄ます	3	≒	3	17	口が重い	0	<	3
28	腰を折る	5	<	8	18	口に上る	1	<	4
29	尻を拭う	9	>	4	19	口を尖らす	2	≒	3
30	目を凝らす	6	≒	6	20	首が飛ぶ	0	≒	0

注：>:初級者>中・上級者、<:初級者<中・上級者、≒:ほぼ差異なし（誤差範囲±1人）外:対象外

次に、学習者の母語と日本語とで異なる表現、すなわち、負の転移で誤答しやすい問題項目を見てみる。表 7 の左側は、日韓共通の表現を除いた 1～10、21～30 の問題で、学習者が母語の影響で選んだと考えられる選択肢を、初級者と中・上級者で、選んだ者の数を比較したもので、右側は日中共通の表現を除いた 1～20 の問題で、学習者が母語からの影響で選んだと考えられる選択肢を、初級者と中・上級者で、選んだ者の数を比較したものである。結果から述べると、韓国人学習者の場合、中・上級者が初級者より誤答者数が多い問題は 1 個にすぎないのに対し、初級者の方が多く問題が 11 個もあった。このことから、初級者の方が中・上級者より、母語からの影響を強く受けるということが明らかになった。一方、中国人学習者の場合、中・上級者が初級者より数が多い問題が 6 個、初級者と中・上級者とであまり差がない問題が 12 個、初級者が中・上級者より数が多い問題が 0 個で、

日本語習熟度による差は見られなかった。

5.5. 個別分析—中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の違い

ここでは、未知の日本語の慣用表現の意味推測において、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の間には、どのような違いがあるのか、を分析する。

上述の分析からわかるように、母語からの正の転移の場合、各母語の中から日本語と同じ表現を選ぶということでは、両者の差は見られない。しかし、負の転移の場合は、中・韓で意味推測の方法が多少異なる。

上述したように、負の転移が起こりやすい条件として、中・韓それぞれ三つのタイプを挙げた。一つ目は、日本語の表現がそのまま母語でも言える場合であって、これは中国人・韓国人学習者ともに一致した。正の転移の場合と同様に、母語と目標言語での表現が全く同じ場合に正の転移が起こりやすいことは、どちらの母語の学習者でも起こるということが証明された。一方、二つ目の条件の場合、主語と述語との共起性が高い場合に起こりやすいという点は、両学習者に共通しているが、その中で、韓国人学習者の場合は主語と述語を組み合わせ、意味的に日本語の表現と最も近いものを、中国人学習者の場合は中国語の説明のところに含まれている漢字を最大限に活用し、意味推測をするという点で、相違が見られた。三つ目の条件ではその違いがさらに明らかになり、韓国人学習者はひたすら韓国語の説明に頼って推測をし、中国人学習者は前置の身体語彙をあまり考慮せず、空欄に入る選択肢の漢字だけを見て意味推測を行うという違いが明らかになった。つまり、負の転移が起こる理由として、母語でもそのまま言えるか、主語と述語（中国語の場合は、語、または句を成す複数の漢字）との共起性は高いか、という点では、両者が共通しているが、いずれにも当てはまらない場合、韓国人は主語と述語の関係で意味推測を、中国人は漢字を優先して意味推測をするという点で違いが見られるということである。これは、それぞれの学習者の母語と日本語が持つ共通部分が、日中だと「漢字」、日韓だと「語順（文法）」で、相互に異なるため起こる傾向であると考えられる。

同じことが予想と異なった「負の転移」の結果からも言える。韓国人学習者の「目を剥く」の解答を見てみると、日本語の表現の意味から韓国語の表現の中で似ている意味の表現を選ぶことを想定して作った「燃やす」より、「睨む」の方がより多く選ばれたが、その理由として、韓国人学習者は日本語の未知表現の意味推測する際、意味からではなく主語と述語との関係が正しいか否かという文法構造を優先する傾向が強いということがあげられる。また、中国人学習者の「口が重い」の場合も、当初錯乱されると想定した「少ない」より「薄い」の方が多く選ばれたが、これも、「薄」という漢字が持つ多音・多義の影響が中国語母語話者に強く働きかけた結果生じた「漢字の影響」であると見ることができる。

次に、日本語習熟度による中国人学習者と韓国人学習者の違いを見てみる。正の転移の場合、いずれの母語話者も日本語レベルに関わらず起こりやすいという結果となった一方、負の転移については、中・韓で日本語習熟度による差が現れた。韓国人学習者の場合は、

日本語が上達するにつれて負の転移が減衰しており、Taylor (1975) が主張した通りの結果となった。しかし、中国人学習者の場合は、初級者と中・上級者の間であまり差がないという結果となった。無論、初級者より中・上級者の方が負の転移が起こりにくくなっているとは言えるが、韓国学習者ほどにはその現象は顕著ではない。以上のことから、韓国学習者は日本語習熟度が高くなるにつれて、意味推測において母語の過剰な転用が回避されるようになるのに対して、中国人学習者は日本語習熟度が高くなっても、母語からの過剰な転用が回避されず、習熟度に関わらず、負の転移が強く起こる可能性が示唆される。ただし、本調査の対象者である中・上級の中国人学習者の日本語習熟度が、Taylor (1975) で設けられた中・上級者の基準と一致するか否かは不明である。また、今回の調査対象者は、全般的に韓国学習者の方が日本語の学習歴も長く（韓：4年2か月、中：1年7か月）、日本語能力も高いと考えられることから、習熟度による母語の負の転移については、結論を留保せざるを得ないであろう。これは今後の課題である。

6. 考察

今回の研究では、中国人日本語学習者も韓国語日本語学習者も日本語の未知の身体慣用表現に出会った場合、母語（中国語、韓国語）と一致、および類似している対象表現の正答率は、そうでない対象表現の正答率よりはるかに上回っていたこと（例：韓国語学習者の場合は、問14番「耳に障る」正答率86.7%と問17番「口が重い」正答率100%、中国人学習者の場合は、問21番「頭が高い」正答率86.7%と問24番「口が悪い」正答率80.0%）、また、母語（中国語、韓国語）と一致、あるいは類似していない対象表現の場合、中・韓それぞれの学習者が母語の影響を受けて選びやすい錯乱肢が他の選択肢より、選択率が非常に高かった（例：韓国語学習者の場合、問1番「目が肥える」→「高まる」に錯乱された割合73.3%、問26番「手を染める」→「付ける」に錯乱された割合86.7%、中国人学習者の場合、問3番「手を焼く」→「縛る」に錯乱された割合80.0%、問7番「腹を据える」→「定める」に錯乱された割合76.7%）という二つの結果から、中国人日本語学習者と韓国語日本語学習者が日本語の身体に関する慣用表現の意味を推測する際、各母語の影響（言語転移）が存在することと、その中に正の転移と負の転移が存在することが明らかになった。

次に、表5と表13に示したように、中・韓のいずれも、母語と日本語とで全く同一の表現の場合、正の転移が起こるといった結果となった。しかし、負の転移の場合は、それぞれの母語話者の間に、共通点とともに相違点も見られた。韓国語学習者の場合、日本語の表現がそのまま韓国語で言えるものと、意味は同じではないが、韓国語の中で前の名詞と共に起しやすい動詞で日本語の表現と意味的に近いもの、表現の韓国語の説明から連想される最も適当なもの、三つのタイプに分かれた。一方、中国人学習者の場合、日本語の表現がそのまま中国語で言えるものと、中国語の中で主語の名詞と高頻度で共起されるもの、主語である身体名詞が述語である動詞、形容詞と中国語では一緒に使われにくいものの、

三つのタイプに分かれた。日本語の未知表現の意味推測において、両者の特徴的な相違点としては、韓国人学習者は主述関係（文法事項）を重視する点、中国人学習者は漢字に焦点を当てる点、があげられる。

最後に日本語習熟度の違いによる、言語転移（正の転移と負の転移）の有無については、正の転移が起こった場合、中・韓両方とも初級者と中上級者の間に差はなく、正答率は高いのに対して、負の転移が起こった場合、韓国人学習者の初級者の方が中・上級者より、母語からの影響を受けやすいということが明らかになった。しかし、前述したように、日本語習熟度と母語の違いによる言語転移の有無については、今回の調査では、日本語習熟度の統制が行われていないため、結論を導き出すことはできない。

7. 終わりに

本研究では、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者が未知の日本語の身体慣用表現に出会った場合、どのようにその表現の意味を推測するのか、その推測の過程で母語の影響は存在するのか、母語の影響は日本語習熟度により違いがあるのか、を検討するために、インターネットを用いた調査によって、検討した。その結果、中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者が未知の日本語の身体慣用表現に出会った場合、各自の母語の知識を生かし、意味推測すること、すなわち、母語からの影響（言語転移）が存在することが明らかになった。また、母語からの影響の中には、母語と日本語とで表現が同一の場合は正の転移が、そうでない場合には負の転移が、それぞれ存在することも明らかになった。さらに、負の転移が起こる場合、中・韓両国の学習者の間では、それぞれ異なるプロセスと思考法で意味推測を行うという違いが存在するという事も考察できた。このような、学習者の母語からの言語転移の有無やそれぞれの学習者の未知の日本語の接し方の相違があるという結果から、日本語教育現場の中で、各学習者の母語に沿った効率的な教え方の検討に一定の示唆を提供できると考える。

しかし、今回の研究には残された課題もある。まず、今回の調査はインターネットで行われたため、対象者の解答時間を制限することができなかった。時間を制限していたら、調査対象者は思考を巡らすことが困難になり、瞬時の自然な意味推測過程、すなわち、調査対象者の心内に内在している知識に基づいた解答が引き出せたのではないかと考えられる。そのような内在化された知識にアクセスして解答した場合、母語の影響がより強く働き、より実際の処理に近い結果を得ることができたかもしれない。よって、今後は、調査時間を厳密にコントロールし、調査対象者の瞬時の意味推測過程を観察したい。

また、中・韓の学習者の間で、日本語学習歴、日本語習熟度の差が大きかった点（韓国人学習者で最も長い者は10年であるに対し、中国人学習者はたかが4年）も今回の研究の限界である。今後は、事前に日本語習熟度を測定するテストを実施し、同一の基準で両学習者を統制した上で、日本語習熟度による学習者間の言語転移の差を考察していきたい。さらに、昨今は、中国語を学ぶ韓国人学習者、韓国語を学ぶ中国人学習者も増えているこ

とから、母語の影響だけでなく、第三言語の学習経験による影響についても検討を試みたが、今回の調査対象者の中で、韓国語の学習経験がある中国人日本語学習者と中国語の学習経験がある韓国人日本語学習者の数が非常に少なかったため、実現することができなかった。この点も今後の課題である。また、いずれの国でも義務教育として英語科目が設けられていることから、英語からの影響もある程度あるのではないかと考える。この点についても、今後の課題として取り組んでいきたい。

付記

調査の実施に際しては、中国の阜陽師範学院信息工程学院の于博先生、韓国の崇實大学日本語日文学科の金多恵さん、および韓国の中央大学大学院国語国文学科韓国語教育学専攻の成祥玄さんのご協力を賜りました。また、研究の過程では、ゼミのメンバー（井口博希さん、中村華子さん、本田愛香さん、金ヘジさん）および大学院生の黄叢叢さんから、たくさんのお言葉をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 石田プリシラ (2006) 「英語慣用句の意味解釈について—日本語の母語話者の解釈方法を中心に—」『筑波応用言語学研究』第 13 号, 13-27.
- 大塚容子 (1994) 「身振りと身体ことば—日本語教育の立場から」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第 27 号, 51-65.
- ダニーミン・佐野洋 (2001) 「日本語学習者のための慣用句データベースの作成—統計処理を用いた一手法の提案—」『情報処理学会研究報告コンピュータと教育』55-62.
- 森田良行 (1966) 「慣用的な言い方」『講座日本語教育』第 2 号, 61-78.
- 吉川寛 (2007) 「身体名称に関する慣用表現の類似性と相違性—日・英・韓の比較に見る—」『国際英語学部紀要』第 10 号, 33-42.
- 梁賢俊 (2003) 「韓国人日本語学習者の動詞習得における言語転移に関する研究—中国人日本語学習者との比較において—」『言語化学論集』第 7 号, 119-130.
- 王天予 (2013) 「中国人学習者による日本語慣用表現の理解に関する一考察—類似表現のある慣用表現を中心に—」『日本語教育法王研究会誌』第 20 号, 108-109.
- Taylor, P. Barry. (1975) The use of overgeneralization and transfer learning strategies by elementary and intermediate students of ESL. *Language Learning*, 25, 73-107.

<インターネット>

CCL 語料庫 <http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp>

Naver 日本語辞書 <<http://jpdic.naver.com/>> (2016 年 12 月 21 日)

NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) <<http://nlb.ninjal.ac.jp/>> (2016 年 12 月 21 日)

Weblio 辞書「身体の慣用句一覧」 <

http://www.weblio.jp/phrase/%E8%BA%AB%E4%BD%93_1> (2016年12月21日)
在线新华字典<<http://xh.5156edu.com/>> (2016年12月21日)

<調査に用いたウェブサイト>

韓国語 : Google<https://docs.google.com/forms/d/1kJCAEn0IEIwLo7Ap9cdSCHOyTKg_RDqLQySHfgouvbk/edit?usp=forms_home>

中国語 : 腾讯问卷<<https://wj.qq.com/edit.html?sid=831594>>

付録1 <フェースシート> (中国語版)

1、姓名 (氏名) :

2、年齢 (年齢) :

3、性別 (性別) :

4、母语 (母語) :

5、籍贯 (记入到省份即可) (出身地「省まで記入してください」) :

6、就读学校 (所属大学) :

7、学年 (学年) :

8、日语学习时间 (日本語学習年数) : _____ 年 _____ (个)月

9、是否参加过相关日语能力试验 (日本語能力試験の受験有無)

日语能力测试 (JLPT) _____ 级 (級) _____ 分 (点)

实用日本語鉴定考试 (J.TEST) _____ 级 (級) _____ 分 (点)

日语专业考试 (四、八级) (中国日本語專業試験四、八級) _____ 级 (級) _____ 分 (点)

11、是否有留学经历 (留学経験の有無) :

否 (いいえ) 是 (はい)

日本留学时间合计 (留学期間) : _____ 年 (年) _____ (个)月 (月)

13、是否有韩语学习经验 (韓国語の学習者の有無) :

是 (はい) _____ 年 _____ (个)月 (月) 否 (いいえ)

付録 2 <フェイスシート> (韓国語版)

1. 이름 (氏名) :
2. 성별 (性別) :
3. 연령 (年齡) :
4. 국적 (國籍) :
5. 모국어 (母語) :
6. 소속 (所屬) : _____ 대학 (大學) _____ 학부 (學部)
학과 (學科) _____ 학년 (學年)
7. 일본어 학습기간 (日本語學習期間) : 약 총 (約) _____ (년 (年) / 개월 (か月))
8. 일본어 능력시험 수험여부 (日本語能力試驗の受験有無) : 있음 (あり) JLPT (N____) _____ 점 (點) 없음 (なし)
9. 일본 유학 경험(교환유학 포함) (日本留學經驗 (交換留學も含む)) : 있음 (あり) (대략 총 (約) _____ (년 (年) / 개월 (か月))) 없음 (なし)
10. 중국어 학습경험(독학, 학원 포함) (中國語學習經驗 (自習、塾も含む)) : 있음 (あり) (약 (約) _____ (년 (年) / 개월 (か月))) 없음 (なし)

付録3 <調査用紙>中国語版（一部抜粋）

根据说明文，从下列A、B、C、D四个选项中选出唯一正确的答案，并在选项前面的方框中打√；在选项后请选择您对这句日语的掌握程度，并在选项前面的方框中打√。

（例を参考し、下のA、B、C、Dの4つの選択肢の中から、唯一の正答を選んで、☑のように記入してください。なお、各問題の下に、それぞれの表現を知っているかを問う項目があります。該当するところに、☑のように記入してください。）

注：请在不适用字典查询的情况下，完成本次调查

（*辞書の使用など、単語の意味を調べる行為は控えてください。）

例

足を（ ）

解释：洗手不干，改邪归正

- A、^{あら}洗う
 B、^{みが}磨く
 C、^{まど}惑う
 D、^{はし}走る

对于这句日语 理解并掌握 隐约见过 不知道

（この日本語の表現を 知っている 見たことがある 知らない）

问题（問題）1、目が（ ）

解释（中国語の説明）：有眼力。有鉴赏力。眼力高

- A、^こ肥える
B、^{たか}高まる
C、^{ふと}太る
D、^{とが}尖る

对于这句日语 理解并掌握 隐约见过 不知道

（この日本語の表現を 知っている 見たことがある 知らない）

问题（問題）2、目を（ ）

解释（中国語の説明）：因发怒而瞪眼睛

- A、^も燃やす
B、^む剥く
C、^{にら}睨む
D、^と閉じる

对于这句日语 理解并掌握 隐约见过 不知道

（この日本語の表現を 知っている 見たことがある 知らない）

付録 4 <調査用紙> 韓国語版 (一部抜粋)

- Instruction -

각 문제 아래의 의미를 읽고, 4 개의 선택지 중 괄호 안에 들어갈 가장 알맞은 동사나 형용사를 하나 골라주십시오.

또한, 각 문제 아래, 각 표현을 알고 있는지를 묻는 항목이 있습니다. 해당하는 곳에 와 같이 기입해 주십시오.

(各問題の下の意味を読んで、4つの選択肢の中から、()内に入る最も適切な動詞や形容詞を一つ選んでください。

なお、各問題の下に、それぞれの表現を知っているかを問う項目があります。該当するところに、のように記入してください。)

*사전 사용 등, 단어의 의미를 찾는 행동은 삼가해주세요.

(*辞書の使用など、単語の意味を調べる行為は控えてください。)

문제 (問題) 1, 目が ()

의미 (韓国語の意味) : 안식이 높아지다

A、^{ふと}太る

B、^{とが}尖る

C、^こ肥える

D、^{たか}高まる

이 일본어 표현을 알고 있다 본 적이 있다 모른다

(この日本語の表現を 知っている 見たことがある 知らない)

문제 (問題) 2, 目を ()

의미 (韓国語の意味) : 눈을 부릅뜨다(부라리다)

A、^も燃やす

B、^{にら}睨む

C、^む剥く

D、^と閉じる

이 일본어 표현을 알고 있다 본 적이 있다 모른다

(この日本語の表現을 知っている 見たことがある 知らない)

<조사협력에 관한 동의서>

나는, 메이지대학 국제일본학부, 고민성·모박신이 실시하는 “중국인일본어학습자와 한국인일본어학습자의 일본어의 신체어휘를 사용한 관용표현의 습득에 미치는 모국어의 영향에 대해서”에 대해서, 그 목적이나 방법을 이해했습니다. 또한, 개인이 특정될 만한 정보는 일절 공개되지 않는다는 것을 이해했습니다..

따라서,

오늘 기입한 질문지, 조사표를 고민성·모박신의 연구에 사용 되는 것에, 동의합니다.

(동의 하지 않는 분은 [□동의하지 않습니다] 이곳에 체크 해주십시오.)

- ① 데이터의 수집은 졸업연구를 위한 것이며, 다른 목적으로는 일절 사용하지 않는다.
- ② 조사협력자의 데이터나 개인정보가 졸업논문에 게재될 경우, 익명으로 하며, 개인이 특정될 정보를 전부 삭제한다.
- ③ 조사협력자는, 본동의서에서 동의를 하였더라도, 언제라도 이 동의를 철회할 수 있다. 동의를 철회할 경우에는, 이하의 연락처에 연락한다.

메이지대학 국제일본학부 고민성

gms930401@naver.com

〒184-0014 東京都小金井市貫井南町 5-8-14

메이지대학 국제일본학부 모박신

mammon0204@gmail.com

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 2-50-2

년 월 일

조사협력자 :

<同意書> (中国語版)

(中国語の場合、形式は韓国語版と若干異なっているが、内容はほぼ同一)

研究同意书

【研究目的】

本研究,旨在对于母语为中文的日语学习者对日语中与“身体”相关的语言掌握情况进行调查。并根据此次调查结果,探讨适合中国人日语学习者的指导方法。

【保密制度】

我们承诺,本次调查研究所收集到得数据和个人信息,我们将对其全程保密,且仅用于研究。发表研究成果时,也不会公开姓名等相关信息。

【研究成员】

研究代表:牟博宸(明治大学・国际日本学部)

高 旻成(明治大学・国际日本学部)

【联系方式】

明治大学 国际日本学部 牟博宸

邮编:164-8524

地址:东京都中野区 4-21-4

邮箱:mammon0204@gmail.com (中文、日语对应)

gms930401@naver.com (韩语、日语对应)

明治大学 国际日本学部 牟博宸 高旻成

参与同意书

请仔细阅读下述说明,如果您不同意对本次问卷进行研究,请在方框内打勾

本人已接受以上事项的说明。在理解研究目的以及研究方法等前提下,不同意参与此次研究

日期: _____ 年 _____ 月 _____ 日

<同意書>（日本語訳）

<調査協力についての同意書>

私は、明治大学国際日本学部、高ミンソン、ムハクシンの実施する「中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の日本語の身体語彙を使った慣用表現の習得に及ぼす母語の影響について」について、その目的や方法を理解しました。また、個人が特定されるような情報は一切公開されないということを、理解しました。

よって、

本日記入した質問紙、調査票を高ミンソン・ムハクシンの研究に使用されることに、同意します。（同意しない方は「同意しません」ここにチェックを入れてください。）

- ① データの収集は卒業研究のためであり、他の目的には一切使用しない。
- ② 調査協力者のデータや個人に関する情報が卒業論文に掲載される場合、匿名とし、個人が特定される情報を全て削除する。
- ③ 調査協力者は、本同意書で同意しても、いつでもこの同意を撤回できる。同意を撤回する際は、以下の連絡先へ連絡する。

明治大学 国際日本学部 高ミンソン

gms930401@naver.com

〒184-0014 東京都小金井市貫井南町 5-8-14

明治大学 国際日本学部 ムハクシン

mammon0204@gmail.com

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 2-50-2

年 月 日

調査協力者：

日本語学習者の語彙的複合動詞の
意味推測に関わる要因

—日本語習熟度、母語、および語彙の難易度から—

Factors Affecting Semantic Inferences of the Lexical Compound
Verbs by the Learners of Japanese Language

—Focusing on the Japanese Proficiency, First Language, and
Lexical Difficulty—

明治大学 国際日本学部

中村 華子

Meiji University School of Global Japanese Studies

NAKAMURA, Hanako

目 次

- I はじめに
- II 先行研究
 - 1. 複合動詞に関する研究
 - 2. 複合動詞の意味推測に関する研究
- III 研究課題
- IV 調査の概要
 - 1. 調査対象者
 - 2. 手続き
 - 3. 材料
 - 3. 1. 調査対象語
 - 3. 2. 調査用紙
- V 結果
 - 1. 日本語習熟度別の結果
 - 2. 学習者の母語別の結果
 - 3. 語彙的複合動詞の難易度別の結果
- VI 考察
- VII おわりに
- 参考文献
- 付録

I はじめに

本研究では、未知語の意味推測に及ぼす日本語習熟度、日本語学習者の母語、語彙の難易度の影響を、日本語の語彙的複合動詞を対象に検討する。

日本語の動詞の中には「食べ始める」、「走り出す」のように2つの動詞が結合した複合動詞が数多く存在する。森田（1978）が『例解国語辞典』の収録語における動詞と複合動詞の占める割合を調査した結果、動詞の割合は11.4%強で、複合動詞の割合はそのうちの39.29%であった。つまり、日常的に使用する動詞の約4割が複合動詞であるということである。このことから、日本語学習者がより自然な日本語の習得を目指す中で複合動詞の学習は無視できないものであると言える。一般に、複合動詞は統語的複合動詞と語彙的複合動詞に大別されるが、この違いが意味推測や習得の難易に関わる。「食べ始める」のように、前項動詞が後項動詞の補語となる統語的複合動詞は字義通りの意味を持つため、学習者にとって未知語であっても意味推測がしやすい。しかし、「走り出す」のような意味の透明性が低い語彙的複合動詞は、字義通りでは意味が成立しない。この場合は「走ることを出す」ではなく、「走ることを始める」という動作を意味し、学習者にとって意味推測が困難であると言われている。（小森, 2015）

そこで、本研究では日本語学習者を対象に、語彙的複合動詞の意味推測について検討する。日本語学習者がその意味を推測できるかどうか、また、意味推測が正確でない場合に見られる誤用にはどのような原因があるのか、それは日本語習熟度と関連があるのか、調査してみたい。

この研究によって、日本語学習者にとって語彙的複合動詞の意味推測の正確さを高めるための条件が明らかになり、教育現場に示唆を与えることができると考える。

II 先行研究

1. 複合動詞に関する研究

一般に、複合動詞は「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に大別される（影山, 1993; 影山・由本, 1997）。統語的複合動詞は、後項動詞は前項動詞に直接つかず、前項動詞を主要部とする補文を取る複合動詞である。例えば、「食べ始める」という統語的複合動詞は、「食べることを始める」と言い換えることができ、前項動詞が後項動詞の補語となっている。また、小森（2015: 78）は「統語的複合動詞は意味の透明性が高いため、未知語であっても意味の推測が可能」と述べている。

一方、語彙的複合動詞は後項動詞が前項動詞の連用形に直接結合し、補文関係を取らない複合動詞である。例えば「走り出す」という語彙的複合動詞は、統語的複合動詞のように「走ることを出す」とすると本来の「走り始める」という意味が成立しない。意味推測がしやすい統語的複合動詞に対し、語彙的複合動詞は「単体の動詞の意味を掛け合わせても、全体の意味が導きにくい（小森, 2015: 78）」ため、学習者にとって正確な意味推測が

困難である。

2. 複合動詞の意味推測に関する研究

複合動詞の意味推測という点から本研究に関わる先行研究として、谷内・小森（2009）、谷内（2012）の知見が参考になる。

まず、谷内・小森（2009）では、モンゴル語を母語とする中上級レベルの日本語学習者 35 名を対象に、語彙的複合動詞の意味推測に対する文脈量と日本語習熟度の影響について検討した。その結果、文脈量が多いほど正しい意味推測が行われた。また、日本語習熟度については、文脈が少しでもあれば習熟度が高いほど意味推測に成功しやすくなるが、まったく文脈のない状況では意味推測は習熟度の高低による影響が認められないことが明らかになった。

さらに、谷内（2012）では、モンゴル語を母語とする中上級レベルの日本語学習者 54 名を対象に、統語的複合動詞の意味推測において、文脈量と日本語習熟度が与える影響について検討した。その結果、統語的複合動詞は単文程度で意味推測が十分可能であった。また、正確な意味を推測するには一定以上の日本語習熟度が必要であること、後項動詞の意味が単独動詞として使われる時の意味と同じだと意味推測しやすくなることが判明した。

以上の 2 つの複合動詞の意味推測に関する研究から、学習者が意味推測を行う際、統語的複合動詞も語彙的複合動詞も文脈量や日本語習熟度の影響を受けるが、その程度はそれぞれ異なることがわかった。しかしながら、複合動詞の意味推測に及ぼす影響として考えられるのは文脈量と日本語習熟度だけではない。谷内・小森（2009）や谷内（2012）では学習者の母語は統一されていたが、異なる母語を話す日本語学習者を対象に意味推測への母語の影響の有無やその程度を検討することもできる。他にも、対象となる複合動詞そのものの難易度も、意味推測に影響を与える要因の 1 つとして考えられる。

Ⅲ 研究課題

本研究では、日本語学習者が未知の語彙的複合動詞に遭遇した場合、どのような要因が意味推測に関わるのかを検討するために、以下を研究課題とする。

- (1) 日本語習熟度によって語彙的複合動詞の意味推測の正確さに違いがあるのか。
- (2) 日本語学習者の母語によって、語彙的複合動詞の意味推測の正確さに違いがあるのか。
- (3) 日本語習熟度に関わらず、語彙的複合動詞の難易度が易しくなれば、意味推測は正確になるのか。

以上の課題に答えるため、調査対象者の要因としては、日本語習熟度要因（高い者、中

間の者、低い者)、および日本語学習者の母語を統制する必要がある。なお、今回は日本語の複合動詞の漢字表記が意味推測に何らかの影響を及ぼすと考えられるため、母語でも漢字表記を使うか否か、すなわち、母語が中国語か否かを統制することとする。また、語彙要因としては、語彙的複合動詞の語彙難易度（高いものと低いもの）を統制する必要がある。

日本語習熟度要因については、調査対象者が履修している、明治大学国際日本学部の日本語コースのクラスを参考に、3つのレベルに分けた。明治大学国際日本学部では、学期開始前に独自の日本語プレースメントテストを実施し、その結果に基づいて、7つのレベルに学習者を配置している（小森・柳澤・安高，2017）。そこで、今回は、N3程度からN2程度までの、中級、中上級、上級入門の3つのレベルを、本研究における習熟度のレベルとして設定することとした。日本語学習者の母語については、調査対象者に自己申告してもらった。語彙的複合動詞の難易度は、日本語学習辞書支援グループ（2015）『日本語教育語彙表 Ver 1.0』（<http://jisho.jpn.org/>）（以下、日本語教育語彙表）のレベルに基づいた。日本語教育語彙表は、コーパスと専門家による主観判定により、日本語教育における語彙の難易度を、初級前半、初級後半、中級前半、中級後半、上級前半、上級後半の6レベルで評定している。本研究では、調査対象者にとっては未習だと考えられる、上級前半と上級後半の語彙的複合動詞を調査対象語とすることとした。

IV 調査の概要

1. 調査対象者

調査対象者は、明治大学国際日本学部で日本語を学習している留学生で、中級、中上級、上級入門のいずれかのクラスに所属する学部1年生から4年生までの23名（男性9名、女性14名）である。

日本語を母語としない人の日本語能力を測定する日本語能力試験（以下、JLPT）の問題集『語彙スピードマスター』において、複合動詞が学習項目として取り上げられるレベルはN3以降であった。前述の通り、国際日本学部に設置されている7つの日本語コース（入門、初級、中級入門、中級、中上級、上級入門、上級）のうち、N3に相当するのが中級入門から中級にかけてのクラスであるため、上級入門、中上級、中級クラスの日本語学習者を調査対象者とした。調査用紙にJLPTの合格級の記入欄を設けたが、受験経験があるのは24名のうち10名（N2：7名、N3：3名）であった。JLPTのレベルで24名全員の日本語習熟度を測定することができなかつたため、上級入門、中上級、中級クラスそれぞれを日本語習熟度の高い者、中間の者、低い者のグループとした。

調査対象者の母語は、中国語（5名、韓国語（5名）、英語（2名）、ベトナム語（2名）、フランス語（2名）、ドイツ語（2名）、オランダ語（1名）、ロシア語（1名）、インドネシア語（1名）、中国語＋英語（1名）、英語＋スペイン語（1名）である。

調査時における日本語学習歴は平均 2 年 9 カ月で、最も短い者で 10 カ月、最も長い者で 5 年 11 カ月であった。23 名のうち、8 名は中級、6 名は中上級、9 名は上級入門に所属している。

2. 手続き

中上級の調査は 2016 年 11 月 29 日の 1 時限目終了後、中級は 2 時限目終了後、上級入門は 12 月 1 日の 2 時限目終了後、の 3 回に分けて、明治大学中野キャンパスで実施した。授業終了後の各教室で調査同意書と調査用紙を配布し、調査内容と同意書の記入について説明をした後、調査用紙へ解答してもらった。調査用紙は、3 つの選択肢のうちから調査対象語の意味を表す答えを選ぶ、多肢選択の筆記式で、所要時間は約 15 分であった。解答に当たっては、教科書や辞書で調べないように、口頭で指示した。また、わからない語でも、調査対象語が含む 2 つの動詞について知っている知識を利用して考えるように伝えた。謝礼として粗品を用意し、調査終了後に同意書、および調査用紙と引き換えに、粗品を渡した。

3. 材料

3. 1. 調査対象語

調査対象語は、日本語の語彙的複合動詞である。また、本研究は意味推測に関する調査であるため、調査対象語は調査対象者にとって未知語でなければならない。調査対象語の難易度が高く、かつ使用頻度が低ければ、調査対象者にとって未知語である可能性が高いと判断した。①難易度が高い語、②使用頻度が低い語、という 2 点を選定の基準とし、以下のような手続きで進めた。

まず、難易度の基準は『日本語教育語彙表』を参考にした。『日本語教育語彙表』には、約 1 万 8000 語の日本語教育用の語彙が収録されているが、前述の通り、全ての語彙について、6 段階の難易度（初級前半、初級後半、中級前半、中級後半、上級前半、上級後半）が設定されているため、日本語教育上重要な語彙の中から難易度の高い語を抽出できると考えた。本研究の調査対象者は、上級レベルにはまだ到達していないため、調査対象語の難易度としては、この 6 段階のうち、上から 2 つの上級前半と上級後半に分類される複合動詞は未知語であると考え、対象となり得る複合動詞を抜き出すこととした。

次に、それらの複合動詞が統語的複合動詞と、語彙的複合動詞のどちらであるかを確認するのに、国立国語研究所の『複合動詞レキシコン』を参照した。『複合動詞レキシコン』は、現在の日本語で使用される約 2700 語以上の語彙的複合動詞を掲載するオンラインデータベースである。現在ではあまり使用されていない古い語を除外しつつ、語彙的複合動詞であることを確認するのに有効だと考えた。

そして、超級レベルの複数の日本語学習者にヒアリングし、語彙的複合動詞であっても

意味が字義通りで、容易に意味推測しやすいと考えられるものは排除した。

さらに、約 1 億語の日本語の書き言葉のサンプルを収録する、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) を用いてそれぞれの語彙的複合動詞の使用頻度を調べた。使用頻度を調べる際、サーチウィンドウに対象語の終止形を 4 種類の表記で入力した。この表記とは、①前項動詞と後項動詞のどちらも漢字、②前項動詞はひらがなで後項動詞は漢字、③前項動詞は漢字で後項動詞はひらがな、④前項動詞と後項動詞のどちらもひらがな、の 4 つである。BCCWJ で検索した結果、使用頻度の低い語から上級前半と上級後半の語を 11 語ずつ、計 22 語抽出した。このような手順を経て、最終的に抽出した調査対象語は以下の通りである。

表 1 本研究の調査対象語 11 語 (上級後半)

編み出す	行き届く	入れ込む	売りさばく
買いかぶる	食いつぶす	黙りこくる	詰めかける
取り計らう	成り上がる	ぶち込む	

表 2 本研究の調査対象語 11 語 (上級前半)

見越す	吹っ切れる	蒸し返す	打ち解ける
差し支える	責め立てる	突き合わせる	待ち焦がれる
上がり込む	思い立つ	はね付ける	

3. 2. 調査用紙

調査用紙はフェースシートと意味推測テストから成る。

フェースシートでは、性別、国籍、母語、日本語能力、日本語学習歴について質問した。

意味推測テストは、調査対象の複合動詞がどのような意味だと考えられるかを、3 つの選択肢の中から 1 つ選ぶ多肢選択式とした。文脈が意味推測に影響を及ぼさないよう、調査対象語は文中に入れずに単体で提示した。調査対象語は漢字を用いて表記したが、漢字の読めない学習者を考慮し、調査用紙で使用する漢字には全てルビを振った。また、選択肢 (正答選択肢と誤答選択肢) を作成する際は、①調査対象者の未知語を含まないこと、②複合動詞を用いないこと、③調査対象の複合動詞の前項動詞と後項動詞に用いられるいずれの漢字も含まないこと、の 3 点に留意した。選択肢に使用する語彙が調査対象者の未知語かどうか、学習者の習熟度を踏まえて、『日本語教育語彙表』で初級前半から中級後半に分類される語彙は既知語であるとして判断した。ただし③について、選択肢に前項動詞か後項動詞の語を入れずに選択肢を作成するのが困難な場合もあったため、そのような場合は 3 つの選択肢全てに同じ語を用いるようにした。また、誤答選択肢を作成するときは、

前項動詞または後項動詞の持つ複数の意味のうち正答とは異なるものや、その意味から派生するイメージを利用するようにした。問題の作成例として、以下の2語を取り上げる。

<吹っ切れる>

- a. 迷いや悩みがさっぱりとなくなる (正答)
- b. 強い風でものが飛ばされる
- c. 熱い食べ物や飲み物をすっかり冷ます

<黙りこくる>

- a. 人見知りをする
- b. いつまでも話さないままにいる (正答)
- c. 激しく怒る

例えば、「吹っ切れる」の場合、前項動詞「吹く」からは、「風が吹く」と「息を吹きかけて冷ます」の2つの意味が連想され得る。後項動詞「切れる」には「限界に達する」や「完全に～する」のような複数の意味がある。そこで、誤答選択肢のbは「風が吹く」と「限界に達する」の意味を足し、「風が吹いて限界(=遠く)までもものが行く」、そして「強い風でもものが飛ばされる」という選択肢を作成した。また、誤答選択肢cは「息を吹きかけて冷ます」と「完全に～する」の意味を合わせ、「息を吹きかけて熱いものを完全に冷ます」とし、少し言い換えて「熱い食べ物や飲み物をすっかり冷ます」という選択肢を作成した。また、「黙りこくる」の場合、後項動詞「こくる」は単体ではあまり使用されない語であるため、前項動詞「黙る」の持つイメージを用いて、誤答選択肢2つを作成した。人間が「黙る」場面を想像し、ひとつは、「緊張して何を話したらいいかわからないときや、上手く話せないとき」もうひとつは「怒ったとき」だと考えた。そして、これらの場面を動詞化して誤答選択肢をaとcのように作成した。

V 結果

1. 日本語習熟度別の結果

調査用紙は1問1点で採点し、23名の得点を求めたところ、平均が9.61点(最低4点、最高18点)、標準偏差が3.60となった。日本語習熟度別の平均点、標準偏差、最低点、最高点、人数は表3に示した通りである。

表3 日本語習熟度別の結果

M	SD	Min	Max	N
---	----	-----	-----	---

中級	6.17	2.41	4	10	6
中上級	10.63	4.03	5	18	8
上級入門	11.00	2.00	9	16	9
全体	9.61	3.60	4	18	23

注1: 満点は22点(上級前半問題11問、上級後半問題22問)。

注2: Mは平均、SDは標準偏差、Nは人数を示す。

全体の傾向として、中級から中上級、中上級から上級入門と日本語習熟度が高くなるにつれて、平均点は上昇している。ただし、中級と中上級の平均点の差が4.46点であるのに対し、中上級と上級入門の平均点の差はわずか0.37点であった。平均点はわずかに上級入門が中上級を上回ったが、これは、中上級の学習者23名の中に、全体の最高点の18点を得点した者がいたことが影響したと考えられる。しかしながら、標準偏差を見ると、中級と上級入門の学習者は得点にばらつきが少ないのに対して、中上級の学習者は各個人の得点に偏りがあることが見て取れる。つまり、中上級と上級入門の平均点は近い数値であるが、それぞれの学習者の得点分布に違いがあるということを示している。

次に、それぞれの問題ごとの正答率から分析する。表4は問題ごとの全体および日本語習熟度別の正答率である。表3では日本語習熟度が高くなるほど平均点も高くなっているが、表4において日本語習熟度の上昇に伴って正答率が高くなっている問題は、22語のうち8語で全体の半分以下である。この8語は、上級入門の正答率の高い語から順に以下の通りである。

① 日本語習熟度と正答率が比例関係にある語(8語)

入れ込む、吹っ切れる、見越す、待ち焦がれる、上がり込む、編み出す、差し支える、突き合わせる

次に、残りの14語は、②日本語習熟度の低いグループの正答率が日本語習熟度の高いグループの正答率を上回る語、③日本語習熟度の上昇と共に正答率も高くなるが、習熟度間で変化のない箇所がある語、④日本語習熟度の低いグループの正答率が日本語習熟度の低いグループの正答率を上回るが、習熟度間で変化のない箇所がある語、の3つに分類された。それぞれは、以下の通りである。

② 習熟度の低いグループの正答率が習熟度の高いグループの正答率を上回る箇所がある語(8語)

売りさばく、取り計らう、思い立つ、蒸し返す、はね付ける、責め立てる、ぶち込む、行き届く

③ 日本語習熟度の上昇と共に正答率も高くなるが、習熟度間で正答率の変化がない箇所がある語(5語)

成り上がる、黙りこくる、打ち解ける、食いつぶす、詰めかける

- ④ 習熟度の低いグループの正答率が習熟度の高いグループを上回るが、習熟度間に正答率の変化がない箇所がある語（1語）

買いかぶる

表4 全体および日本語習熟度別の正答率

	中級	中上級	上級入門	全体
編み出す	8.70%	13.04%	17.39%	39.13%
行き届く	4.35%	13.04%	4.35%	21.74%
入れ込む	4.35%	26.09%	34.78%	65.22%
売りさばく	17.39%	13.04%	26.09%	56.52%
買いかぶる	17.39%	13.04%	13.04%	43.48%
食いつぶす	4.35%	17.39%	17.39%	39.13%
黙りこくる	13.04%	26.09%	26.09%	65.22%
詰めかける	4.35%	13.04%	13.04%	30.43%
取り計らう	4.35%	0.00%	21.74%	26.09%
成り上がる	8.70%	8.70%	26.09%	43.48%
ぶち込む	8.70%	17.39%	8.70%	34.78%
見越す	8.70%	17.39%	30.43%	56.52%
吹っ切れる	4.35%	30.43%	34.78%	69.57%
蒸し返す	4.35%	21.74%	17.39%	43.48%
打ち解ける	0.00%	17.39%	17.39%	34.78%
差し支える	0.00%	8.70%	13.04%	21.74%
責め立てる	8.70%	17.39%	13.04%	39.13%
突き合わせる	0.00%	4.35%	8.70%	13.04%
待ち焦がれる	13.04%	26.09%	30.43%	69.57%
上がり込む	8.70%	13.04%	26.09%	47.83%
思い立つ	13.04%	26.09%	17.39%	56.52%
はね付ける	4.35%	26.09%	13.04%	43.48%

2. 学習者の母語別の結果

次に、調査対象者の母語によって意味推測の正確さに影響が出るのかについて検討する。調査用紙において対象語の複合動詞を漢字で表記したため、漢字を日常的に使用する中国語母語話者は、他の学習者と比較して、母語の知識が意味推測に何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられる。今回の調査対象者23名のうち、中国語母語話者は6名だった。

中国語母語話者とその他の言語の母語話者のそれぞれで平均点を求めた結果は表5に示した通りである。中国語母語話者の平均点は12.00点で、全体の平均点の9.61点を大きく差をつけたうえに、日本語主熟度の高いグループである上級入門の平均点11点をも上回る結果となった。それに対し、中国語以外の言語を母語とする学習者の平均点は8.76点で全体の平均を下回った。

表5 母語別の平均点と標準偏差

中国語母語話者	その他の言語の母語話者	全体
12.00(3.79)	8.76(3.12)	9.61(3.60)

注：() は標準偏差。

さらに、中国語母語話者とその他の言語の母語話者のそれぞれで問題ごとの正答率を求めた結果は表6に示した通りである。中国語母語話者の正答率がその他の言語の母語話者の正答率を上回ったのは、全22語のうち15語あった。その15語の中でも中国語母語話者が全員正答を選択した語は「吹っ切れる」と「待ち焦がれる」の2語あり、どちらも、その他の言語の母語話者の正答率と約40%の差が生じた。また、100.00%ではないものの、8割以上の中国語母語話者が正解した語が5語あり、その他の言語の母語話者の正答率との差が大きい順に、「食いつぶす」、「黙りこくる」、「見越す」、「思い立つ」、「入れ込む」となった。

表6 母語別の正答率

	中国語母語話者	その他の言語の母語話者
編み出す	33.33%	41.18%
行き届く	50.00%	11.76%
入れ込む	83.33%	58.82%
売りさばく	50.00%	58.82%
買いかぶる	33.33%	47.06%
食いつぶす	83.33%	23.53%
黙りこくる	83.33%	47.06%
詰めかける	50.00%	23.53%
取り計らう	0.00%	35.29%
成り上がる	50.00%	41.18%
ぶち込む	16.67%	41.18%
見越す	83.33%	47.06%
吹っ切れる	100.00%	58.82%

蒸し返す	50.00%	41.18%
打ち解ける	33.33%	35.29%
差し支える	50.00%	11.76%
責め立てる	50.00%	35.29%
突き合わせる	16.67%	11.76%
待ち焦がれる	100.00%	58.82%
上がり込む	33.33%	52.94%
思い立つ	83.33%	47.06%
はね付ける	66.67%	35.29%

3. 語彙的複合動詞の難易度別の結果

続いて、語彙的複合動詞の難易度によって正答率に差が生じるのかについて検討する。難易度別の平均正答率は表7に示した通りである。全体としては、難易度の高い上級後半の語彙よりも、難易度の低い上級前半の語彙のほうが高い正答率を示しており、語彙の難易度と意味推測の成否には相関関係があることわかる。しかしながら、この傾向は、中上級と上級入門に認められた傾向である。つまり、中級では、難易度の高い上級後半の語彙に正解した人数が難易度の低い上級前半の語彙に正解した人数を上回るという現象が起きているということである。ただし、今回の調査では選択肢が3つであり、無作為に選択しても33.33%の正答率となるはずであることを考えると、中級において、10~20%程度で正答率の高低が認められたということは、いずれかの方が意味推測しやすかったというより、いずれのレベルも意味推測が困難であったと考えるのが妥当であろう。

表7 語彙的複合動詞の難易度別の平均正答率

	中級	中上級	上級入門	全体
上級後半	20.61%	34.88%	44.50%	42.29%
上級前半	11.26%	42.11%	46.63%	45.06%

また、中上級と上級入門では、語彙の難易度と意味推測の成否に相関関係があると述べたが、この2つの習熟度の間には異なった傾向が認められる。中上級において、語彙的複合動詞の難易度が上級後半から上級前半に下がると、正答率は7.23%上昇している。一方、上級入門においては語彙的複合動詞の難易度が低くなっても、正答率の上昇は2.13%に留まっている。つまり、日本語習熟度が高くなると、語彙的複合動詞の難易度が低くなった場合に生じる差が小さくなると考えられる。

VI 考察

以上の結果をもとに、研究課題ごとに考察を行う。まず、研究課題（1）「日本語習熟度によって語彙的複合動詞の意味推測の正確さに違いがあるのか」について考える。これは、全体の傾向としては日本語習熟度が高いほど語彙的複合動詞の意味推測が正確になることが示された。日本語習熟度の高さは、日本語の知識の豊富さや運用能力の高さを意味する。つまり、習熟度が上がるほど、理解でき、使用できる文法や語彙の数が増加していく。したがって、学習者の日本語習熟度の上昇に伴って、正確な意味推測が可能になるのは自然な結果だと考えられる。

しかし、本研究の結果では中上級と上級入門の差が著しく小さく、最高点 18 点を取ったのは上級入門ではなく中上級の学習者であった。表 8 は上位 3 名の得点と日本語習熟度をまとめたものである。上位 3 名の中には、最高点を得点した者を含めて 2 名の中上級の学習者がいる。要するに、中上級の学習者の中に全体の最高点、またそれに準ずる点を得点した者がいるため、上級入門と中上級の差が小さくなったと考えられる。

表 8 上位 3 名の得点

順位	得点	日本語習熟度
1	18	中上級
2	16	上級入門
3	15	中上級

上級入門よりも習熟度が低い中上級の学習者が上位 3 名のうちの 2 名を占めた理由については、次のような理由が考えられる。議論にあたり、便宜的に、全体の 1 位で 18 点を得点した中上級の学習者を A、全体の 3 位で 15 点を得点した同じく中上級の学習者を B とする。第 3 章の研究課題で述べたように、学習者の日本語習熟度は、明治大学国際日本学部独自の日本語プレイスメントテストの結果に基づいて分類されている。このプレイスメントテストは、語彙・漢字、文法、読解能力を測定する筆記試験と、会話能力を測定する面接試験で構成されている。一方、本研究の調査は選択式の筆記試験のみで、インタビューは含んでいない。よって、プレイスメントテストの際、A と B の 2 名は筆記試験の結果だけに基づいた場合は上級入門レベルの習熟度と判定できるが、面接試験の結果を合わせて上級入門の 1 つ下のレベルの中上級と判定されたのではないかという推測が立てられる。そこで、中上級の授業の担当教員にプレイスメントテストの筆記試験の結果を確認したが、A は中上級において上位ではあるがそれよりも点数が高い学習者が数人おり、B は中上級の平均点より少し低いとのことだった。すなわち、2 名とも群を抜いて筆記試験の点数が高かった訳ではなく、この推測では中上級の学習者が高得点だったことが説明されない。

そこで、中上級の A と B が高得点だった理由について、担当教員に対して A と B へのヒアリングを依頼したところ、以下のような回答が得られた。

<A へのヒアリング>

国にいた頃から語彙を増やすために単語帳を使って勉強している。特に複合動詞は苦手という自覚があったため、意識して勉強してきた。また、練習が厳しい演劇サークルに所属していて、日々、かなりの量の日本語を聞く機会がたくさんあることも語彙が増えた要因かもしれない。

<B へのヒアリング>

普段からテレビやネットなどで日本のドラマやアニメをよく見ているので、そこでいろいろな複合動詞を聞く機会があり、意味も理解できるようになったのではないかと思う。

以上のヒアリング結果からわかるのは、A も B も大学の授業以外に日本語に接触し、学習する機会が習慣的にあったということだ。A の場合、日本に来る前から意識的に複合動詞を勉強しており、授業や教科書で学習する以外にも多様な複合動詞に接していた可能性がある。さらに、演劇サークルの活動で日本語母語話者の学生と交流したり、練習の中で日本語を聞き、話したりすることで、語彙力や意味推測の力を高めてきたと考えられる。特に、母語話者との交流では、学習者にとっては同じような意味に思われる語の微妙な言い回しの違いや間違いなどを、会話の中で語を使用しながら指摘されたり気付いたりして修正することができる。また、B の場合、A のようなアウトプットの機会は少ないものの、日本のドラマやアニメを見て、日本語を頻繁にインプットしていたようだ。ドラマやアニメの鑑賞において未知の語彙に遭遇したとき、番組内で意味の説明がされることはほとんどない。ストーリーを理解するために前後の話や文脈から未知語の意味を考えることで、語彙力が鍛えられ、また文脈がなくても未知語の意味推測をする力も高まったのではないかと考える。

続いて、日本語習熟度とそれぞれの問題ごとの正答率の関係によって分類した 4 つのグループについて考える。これらのグループは第 5 章の結果で述べたように、①日本語習熟度と正答率が比例関係にある語、②習熟度の低いグループの正答率が習熟度の高いグループの正答率を上回る箇所がある語、③日本語習熟度の上昇と共に正答率も高くなるが、習熟度間で正答率の変化がない箇所がある語 ④習熟度の低いグループの正答率が習熟度の高いグループを上回るが、習熟度間に正答率の変化がない箇所がある語、の 4 つに分類された。つまり、①の 8 語は習熟度によって語彙的複合動詞の意味推測の正確さに差が生じていることを示している。また、先述した、中上級学習者の A と B の出した高得点が習熟

度別の正答率にも影響を及ぼしている。③の 5 語のうち、「黙りこくる」、「打ち解ける」、「食いつぶす」、「詰めかける」の 4 語は習熟度が中級から中上級に上がると、その正答率も上昇していたが、中上級から上級入門になっても、正答率が同じ値を指していた。これは、学習者 A と B が中上級の正答率を引き上げているために生じた現象で、③も①と同様に習熟度の上昇に伴って正答率も上昇していると判断することができる。

しかしながら、残りの②と④の 9 語は習熟度と正答率の間に比例関係のような規則性は見られなかった。ただし、②の「思い立つ」、「蒸し返す」、「はね付ける」、「責め立てる」、「ぶち込む」、「行き届く」の 6 語は中級から中上級になると正答率が高くなるが、中上級から上級入門になると正答率が下がり、図 1 のように山型となった。ここでは例として「思い立つ」をグラフにした。図 1 からわかるように、中上級の正答率が 3 つの習熟度の中で最も高くなっているが、この場合も学習者 A と B による中上級の正答率の引き上げが原因の 1 つと考えられる。

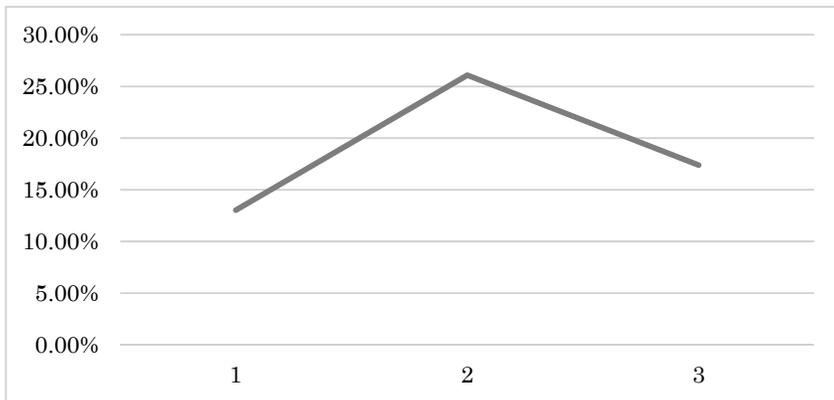


図 1 「思い立つ」の習熟度別の正答率

注 1 : 1 は中級、2 は中上級、3 は上級入門を示す

一方、他の②の「売りさばく」と「取り計らう」の 2 語は中級から中上級にかけて正答率が下がり、中上級から上級入門になると正答率が上がり、図 2 のような谷型となった。ここでは例として「売りさばく」をグラフにした。そして、④の「買いかぶる」は谷型のグラフにはならないが、中級から中上級にかけて正答率は低下し、その後中上級から上級入門にかけて同じ正答率を示している（中級：17.39%、中上級＝上級入門：13.04%）。つまり、②の 2 語と④では、中級学習者の正答率が中上級学習者の正答率を上回るという現象が起こっているということである。この現象が起きた原因については以下のように考えられる。第 4 章の調査の概要で述べたように、調査用紙の選択肢を作成する際、調査対象者の未知語を含まないことに留意した。ところが、実際には中級学習者にとって未知語が多く含まれていた可能性があり、彼らは意味を推測して調査用紙から選択肢を選んだと

いうよりも、無作為に答えを選択したのではないかと考えられる。無作為に選択したとしても、3つの選択肢から1つの答えを選ぶ形式の本調査では正答率は33.33%となるはずであるから、中級の正答率が中上級の正答率を上回ることも有り得ると考えた。

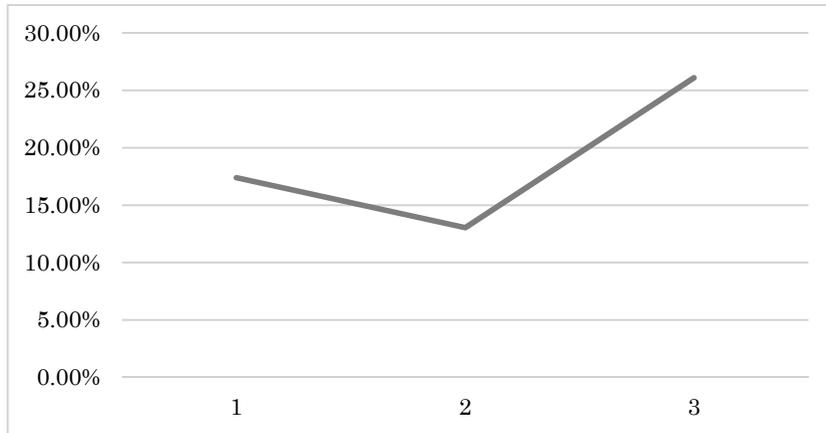


図2 「売りさばく」の習熟度別の正答率

注1：1は中級、2は中上級、3は上級入門を示す

次に、研究課題(2)「日本語学習者の母語によって、語彙的複合動詞の意味推測の正確さに違いがあるのか」については、中国語母語話者はその他の言語の母語話者よりも、語彙的複合動詞の正確な意味推測が可能だということが明らかになった。中国語は漢字を使用する言語であり、日本語の語彙的複合動詞も前項動詞と後項動詞の両方、もしくはそのどちらかに漢字を含むものがほとんどであることから、漢字の知識が意味推測において大きく関わってくると考えられる。また、中国から日本へ流入した熟語や故事成語は使用される国や地域、時代が変わっても、その意味は同じ、または近似していることが多く、漢字1字1字の意味だけでなく、中国語母語話者が持つ固有の文化や慣習も意味推測に反映されたのではないかと考える。

そこで、ここでは、中国人母語話者が全員正解した「吹っ切れる」と「待ち焦がれる」の2語について検討する。日本語学や日本語教育を研究している複数の中国人母語話者に、この2語についてヒアリングしたところ、彼らは「吹っ切れる」の特に後項動詞「切れる」という語から「快刀斬乱麻」という中国語を連想するようである。これは日本語の「快刀乱麻を断つ」という慣用表現のもとになった言葉で、『新選国語辞典第八版』(2006)によると、「やっかいな事件・論争などを、てきぱきとしまつをつける」という意味だと記されている。「吹っ切れる」の正答は「迷いや悩みがさっぱりとなくなる」という意味だが、難解な事件や論争を解決することで迷いのない状態が生まれるため、中国語母語話者にとって正答を選びやすかったと考えられる。また、「待ち焦がれる」という語からは、中国人母

語話者は「焦急等待」という中国語が即座に浮かび上がるようだ。この中国語は「待ち焦がれる」と全く同じ、「相手への気持ちを強くして時間を過ごす」という意味があり、中国人母語話者にとってとりわけ容易に意味推測が可能な語であったようである。

さらに、研究課題（3）「日本語習熟度に関わらず、語彙的複合動詞の難易度が易しくなれば、意味推測は正確になるのか」について検討する、これは、日本語習熟度によってみられる傾向が異なっていた。全体としては難易度の低い上級前半の語彙のほうが、難易度の高い上級後半の語彙よりも正答率が高かった。同様に、中上級と上級入門でも語彙の難易度と意味の成否に相関関係が認められた。難易度の低い語彙は難易度の高い語彙よりも、学習する時期が早かったり、使用頻度が高かったりすることで意味推測が容易になりやすくなる。したがって、難易度が易しくなるにつれて意味推測の正確さが上昇するのは自然な結果だと考えられる。ところが、中級においてはその傾向が逆転し、難易度の高い上級後半の語彙の正答率が難易度の低い上級前半の語彙の正答率を上回る結果となった。この結果は、研究課題（1）で起きた、中級学習者の問題ごとの正答率が中上級学習者の正答率よりも高くなる、という現象と似ていると考えられる。この現象は、選択肢への使用語彙が中級学習者にとって難しく、調査対象語だけでなく選択肢にも未知語が含まれ、学習者は意味推測をしたのではなく無作為に答えを選んでいたために生じたのではないかと考える。要するに、研究課題（3）の場合でも、中級学習者は無作為に答えを選んだが故に、上級後半と上級前半の平均正答率が逆転したのではないかと考えられる。

また、中上級と上級入門では、語彙の難易度と意味の成否に相関関係があるものの、2つの習熟度間では正答率の上昇の度合いに差が生じた。習熟度の低いグループにおける語彙の難易度が下がったときの正答率の上昇の程度と比較して、習熟度の高いグループでの正答率の上昇度は小さくなることがわかった。つまり、習熟度が低い学習者ほど、意味推測の正確さは対象語彙の難易度に左右され、習熟度が高い学習者ほど、意味推測の正確さは対象語彙の難易度に左右されにくいということである。これは、習熟度が低い学習者ほど、簡単な語彙から学習していくため難しい語彙はわからないが、習熟度が高い学習者は、簡単な語彙も難しい語彙も既に学習済みであるため語彙の難易度による正答率の差は小さくなるのではないかと考えられる。

Ⅶ おわりに

本研究では、日本語の語彙的複合動詞の未知語の意味推測において、日本語習熟度、日本語学習者の母語、語彙の難易度のそれぞれが及ぼす影響を検討した。これらの3つの要因が意味推測の正確さにどのように関係するのかを調べるために、日本語習熟度を3段階、母語を中国語とその他の言語の2種類、語彙の難易度を2種類設定した上で、多肢選択式の調査を実施した。その結果、日本語習熟度が意味推測の正確さに与える影響については、日本語習熟度が上がるにつれて、全般的には意味推測も正確になることが示された。ただ

し、習熟度が下がるほど、意味推測の正確さは個人差の要因、すなわち、個人の語彙力、授業以外で日本語を使用する機会の有無、複合動詞に対する学習意欲や学習動機が影響していると考えられる。

また、日本語学習者の母語が意味推測の正確さに与える影響については、学習者の母語、すなわち、母語が中国語か、それ以外の言語か、によるということが明らかになった。このことから、日本語の語彙的複合動詞の意味推測の正確さを高めるためには、漢字学習が1つの有効な手段だと考えられる。中国語母語話者による語彙的複合動詞の意味推測が正確だった要因には、漢字知識以外にも中国語母語話者ならではの文化的・習慣的知識も含まれているはずである。しかし、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者であっても、漢字学習によって、豊かな漢字知識が獲得できれば、それが語彙的複合動詞の意味推測の一助になる可能性があると考えられる。よって、中国語以外の言語を母語とする学習者については、漢字の知識が豊富な者とそうでない者とで調査し、その結果を比較してみると良いであろう。

さらに、語彙的複合動詞の難易度が意味推測の正確さに与える影響については、全体的な傾向として、語彙の難易度が下がるほど意味推測も正確になることが示された。ただし、日本語習熟度が高い学習者は、意味推測の際に語彙の難易度から受ける影響は小さくなり、習熟度が低い学習者ほど語彙の難易度によって意味推測の正確さが左右される傾向にあることが明らかとなった。つまり、日本語習熟度の高い学習者は、様々な言語知識を使って意味推測ができるため、難易度の高い語であっても、意味推測に成功する確率が高くなるのに対して、日本語習熟度の低い学習者は、活用できる言語知識が限られているため、少しでも難易度が上がると、意味推測に窮してしまうのだと考えられる。

このように、筆者が設定した研究課題に対しては、回答を導くことできたと考えられる。しかしながら、本研究はいくつかの点で今後課題が残されている。第一に、調査用紙を再考する必要がある。まず、今回の調査用紙の選択肢は、中級学習者を中心に未知語を含んでいた可能性が高い。調査対象語だけでなく選択肢にも未知語が含まれていたことで、純粋な意味推測の結果が得られなかった可能性もある。明治大学のプレイメントテストによる習熟度を参考にした上で、既知語と思われる語を選択肢に使用したが、学習者の受容語彙の程度を詳細に把握して既知語か未知語かを判断し、調査対象語を決定する手続きが必要である。そのためには、どの程度の語彙であれば理解できるのか、できないのかを測定する語彙テストを独自に作成し、調査前に実施することも考えられる。あるいは、選択肢に未知語が含まれる場合を想定し、選択肢に英訳や中国語訳をつけることも考えられる。また、調査対象の語彙的複合動詞は、独自の選定方法を経て、学習者にとって未知語であると思われる語を選んだが、本当に調査対象語が未知語であるのかを確認するチェックボックス (☑) を設けることで、確認することもできた可能性もある。さらに、一般的なテストの解答戦略を理解した上で、選択肢の品詞、自発・可能・受け身・尊敬、選択肢の意

味の具象度などのそれぞれを統一させるべきである。

第二に、結果を数値化したほうが分析しやすいと考え、調査は多肢選択の筆記式で実施したが、筆記式調査に加えてフォローアップインタビューも行う必要がある。正答か誤答か誰が見ても一目でわかる選択式の調査は、平均点や正答率を計算したり、表やグラフを作成したり、結果を客観的に把握したりするのに非常に効率的である。しかし、学習者はどのような思考を経て解答したのか、個人個人に具体的にヒアリングした方が、より詳細な分析が可能になったと考える。今回の調査では、時間の都合上、授業担当教員による 2 名の学習者のみへのヒアリングとなったが、次回は執筆者自身による、調査対象者全員に調査後のインタビューを実施したい。

第三に、本研究の調査対象者は 23 名と少なかった上に、日本語習熟度、母語のバランスが取れていなかった。次回は各習熟度の学習者を同じ人数で、さらに比較したい言語の母語話者を同じくらい的人数で確保して調査をしてみたい。

今後は、以上に列挙した課題を踏まえ、語彙的複合動詞の意味推測の過程や習得について考えていきたい。

付記

調査の実施に際しては、明治大学の柳澤絵美先生、菊池富美子先生にご協力を賜りました。また、研究の過程では、明治大学大学院の黄叢叢さんとゼミのメンバー（井口博希さん、金へじさん、高ミンソンさん、本田愛香さん、牟ハクシンさん）から、たくさんの示唆をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭（編）（2006）『新選国語辞典 第八版』小学館.
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系 —その理論的・応用的意味合い—」影山太郎・陳劫憐・長谷部郁子・由本陽子・岸本秀樹・山口昌也・阿部裕・栗林裕・塚本秀樹・全敏杞・沈力・玉岡賀津雄・初相娟・神崎享子『複合動詞研究の最先端 —謎の解明に向けて』, pp. 3-46, ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社出版.
- 何志明(2010)『現代日本語における複合動詞の組み合わせ —日本語教育の観点から—』笠間書院.
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス<<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>> (2016年10月19日閲覧).
- 小森和子 (2015)「第2部 語彙」姫野伴子・小森和子・柳澤絵美『日本語教育学入門』, pp. 71-133, 研究社.
- 小森和子・柳澤絵美・安高紀子 (2017 印刷中)「日本語プレイスメント・テストの開発と問題項目の分析—国際日本学部の ET 日本語科目における試み—」『明治大学国際日本学研究』9.
- 阪田雪子・遠藤織枝・にほんごの会企業組合（編）(2011)『新訂 日本語を学ぶ人の辞典 英語・中国語訳つき』新潮社.
- 日本語教育語彙表 Ver. 1.0<<http://jhlee.sakura.ne.jp/JEV.html>> (2016年10月5日閲覧).
- 日本語能力試験 JLPT「旧試験との比較」<<http://www.jlpt.jp/about/comparison.html>> (2016年10月5日閲覧).
- 中島智子・松田佳子・高橋尚子(2010)『日本語能力試験問題集 N3 語彙スピードマスター』Jリサーチ出版.
- 複合動詞レキシコン<<http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>> (2016年10月6日閲覧).
- 松田文子(2002)「複合動詞研究の概観とその展望 —日本語教育の観点からの考察—」『言語文化と日本語教育』, 5月特集号, pp. 170-184.
- 森田良行(1978)「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』第14分冊, pp. 69-86.
- 森本智子・高橋尚子・松本知恵・黒岩しづ(2016)『日本語能力試験問題集 N4 語彙スピードマスター』Jリサーチ出版.
- 谷内美智子(2012)「後項動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴 —文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—」『言語文化と日本語教育』44, pp. 1-10.

谷内美智子・小森和子(2009)「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果 ―語彙的複合動詞を対象に―」『日本語教育』142号, pp. 113-173.

由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語 ―モジュール形態論から見た日英語の動詞形成―』ひつじ書房.

付録①

ちょうさひょう
調査票

このたびは調査にご協力いただき、ありがとうございます。私は、留学生の語彙の意味推測に関して調査をしています。以下の質問を読んで、答えてください。どうしても答えたくない場合には、答えなくて構いません。

なお、収集した個人情報に厳重に管理いたします。また、本調査で得られたデータは、研究以外の目的で使用することはありません。

めいじ だいがく こくさい にほんがくぶ ねん なかむら はなこ
明治大学国際日本学部 4年 中村華子

せいべつ おとこ おんな むかいとう
性別： 男 女 無回答

しゅつしんこく ちいき
出身国・地域： _____

ぼご
母語： _____

にほんごのうりよく にほんごのうりよくしけん てん
日本語能力： 日本語能力試験JLPT (N _____) _____ 点
にほんりゅうがくしけん てん
日本留学試験EJU _____ 点

にほんごがくしゅうれき ごうけい やく ねん かげつ
日本語学習歴： 合計 約 _____ 年 _____ 月

しつもん
質問

以下の日本語の動詞の意味は何ですか。もっとも適切なものを3つの選択肢の中から1つ選び、そのアルファベットに○をつけてください。

1. あだ
編み出す
 - a. 本を作って出版する
 - b. セーターを作ってプレゼントする
 - c. 新しい考えを作る

2. いとど
行き届く
 - a. 目的地に到着する
 - b. 手紙やはがきが届く

- c. すみずみまで^{ちゅうい およ}注意が及ぶ
3. 入れ込む^{い こ}
- a. ひとつのことに^{むちゅう}夢中になる
 - b. 入れ物^{い もの}いっぱい^{みず}に水などを^{そそ}注ぐ
 - c. 長い^{なが}時間、部屋^{へや}の中^{なか}にいる
4. 売りさばく^う
- a. 肉^{にく}や魚^{さかな}を切^きってから^う売る
 - b. 商品^{しょうひん}をたくさん^う売って、お金^{かね}を^え得る
 - c. 品物^{しなもの}が^{のこ}残らないように^う売る
5. 買いかぶる^か
- a. 購入^{こうにゅう}した衣類^{いるい}をその^ば場^きで^き着る
 - b. 実際^{じっさい}以上^{いじょう}に高く^{たか}評価^{ひやうか}する
 - c. 人^{ひと}にお金^{かね}を出^だして^{しよくじ}食事^{しょくじ}を^ささせる
6. 食いつぶす^く
- a. 働^{はたら}かないで^{ざいさん}財産^{ざいさん}を^{つか}すべて^{つか}使う
 - b. 時間^{じかん}を^{むだ}無駄^{むだ}に^{つかう}使う
 - c. 固^{かた}いものを^か噛^かんで^{こま}細^{こま}かく^{する}する
7. 黙りこくる^{だま}
- a. 人見^{ひとみし}知^しり^{をする}をする
 - b. いつまでも^{はな}話^{はな}さない^{まま}まま^{でいる}でいる
 - c. 激^{げき}しく^{おこ}怒^{おこ}る
8. 詰めかける^つ
- a. かばん^にに^{にもつ}荷物^{にもつ}を^いたくさん^い入れる
 - b. 間^{あいだ}を^あ空^あけず^{なが}に^{なが}長い^{なが}す^{すわ}に^{すわ}座^{すわ}る
 - c. たくさん^{ひと}の^{ひと}人^{ひと}が^{どうじ}同時^{どうじ}に^{せまる}せまる
9. 取り計らう^と
- a. 事前^{じぜん}に^{じゆんび}準備^{じゆんび}して^{おこなう}から^{おこなう}行^{おこなう}う
 - b. 数学^{すうがく}の^{もんたい}問題^{もんたい}を^と解^といて^{こた}答^{こた}え^だを^だ出^だす

c. うまくいくように処理する

10. 成り上がる

- a. 将来の夢をかなえる
- b. 急に高い地位や財産を得る
- c. 物事がうまく進んで喜ぶ

11. ぶち込む

- a. 力強く体当たりする
- b. 勢いよくいれる
- c. 殴り合いのけんかをする

12. 見越す

- a. じっと目を離さないでいる
- b. 人の心の中がわかる
- c. 将来のことを予測する

13. 吹っ切れる

- a. 迷いや悩みがさっぱりとなくなる
- b. 強い風でもものが飛ばされる
- c. 熱い食べ物や飲み物をすっかり冷ます

14. 蒸し返す

- a. 炊けたご飯にふたをして熱する
- b. 秋の初めに、夏のような暑い日に戻る
- c. 一度決まっていたことを再び問題にする

15. 打ち解ける

- a. よく調べて事実を明らかにする
- b. 心の距離がなくなり、仲良くなる
- c. 相手の軍やチームを攻撃してばらばらにする

16. 差し支える

- a. 別の意見が出て、グループが分かれる

- b. バランスを保つ
- c. 都合の悪いことが起きる

17. 責め立てる

- a. 急いで決断する
- b. 自分の仕事をしっかり終わらせる
- c. 厳しく、何度もしかる

18. 突き合わせる

- a. 近くに置いて比べる
- b. 急に、人と会う予定ができる
- c. 頭と頭がぶつかる

19. 待ち焦がれる

- a. 料理で食べ物を焼きすぎて黒くする
- b. 失礼な対応にいらいらする
- c. 相手への気持ちを強くして時間を過ごす

20. 上がり込む

- a. 先生や先輩に憧れ、尊敬する
- b. 山や建物で、一番高いところに行く
- c. 他人の家に遠慮せず入る

21. 思い立つ

- a. あることをしようと決める
- b. 心配したり悩みすぎて、何もできない
- c. 願いを実現させる

22. はね付ける

- a. 人に強くぶつかる
- b. 相手の要求をきっぱりと断る
- c. 泥などが勢いよく飛んで汚れが残る

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

付録②

ちょうさきょうりょく とういしょ
調査協力についての同意書

わたし めいじだいがくこくさいにほんがくぶ なかむらはなこ じっし にほんごがくしゅうしゃ どうし いみ
私は、明治大学国際日本学部、中村華子の実施する「日本語学習者の動詞の意味
すいそく かん けんきゅう ほうほう せつめい う こじん とくてい
推測に関する研究」について、その方法や説明を受けました。また、個人が特定され
るような情報は一切公開されない事についての説明も受けました。

よって、

ほんじつきにゆう ちょうさひょう なかむらはなこ けんきゅう しよう
本日記入した調査票を中村華子の研究に使用されることに、

- とうい
同意します。
 とうい
同意しません。

- ① しゅうしゅう そつぎょうけんきゅう ほかに もくてき いっさいしやう
データの収集は卒業研究のためであり、他の目的には一切使用しない。
② ちょうさきょうりょくしゃ こじん かん じょうほう そつぎょうろんぶん けいさい ばあい とくめい
調査協力者のデータや個人に関する情報が卒業論文に掲載される場合、匿名
とし、個人が特定される情報をすべて削除する。
③ ちょうさきょうりょくしゃ ほんとういしょ どうい どうい てつかい どうい
調査協力者は、本同意書で同意しても、いつでもこの同意を撤回できる。同意を
てつかい ばあい い か れんらくさき れんらく
撤回する場合は、以下の連絡先へ連絡する。

めいじだいがく こくさいにほんがくぶ なかむらはなこ
明治大学 国際日本学部 中村華子
〒164-8525 とうきょうとなかのくなかの
東京都中野区中野4-21-1
03-5343-8000

ねん がつ にち
年 月 日

ちょうさきょうりょくしゃ
調査協力者 _____

ねん がつ にち
2016年12月1日

ちょうさきょうりょくしゃ みなさま
調査協力者の皆様へ

めいじ だいがくこくさいに ほんがくぶ なかむらはな こ
明治大学国際日本学部 中村華子

ほんじつ わたし めいじだいがくこくさいにほんがくぶ ねん なかむらはなこ そつぎょうけんきゅう ちょうさ きょうりょく
本日は、私、明治大学国際日本学部4年、中村華子の卒業研究の調査にご協力
いただき、ありがとうございます。

ほんちょうさ もくてき ほんじつ てじゆん い か せつめい よ
本調査の目的と本日の手順について以下に説明がありますので、お読みくださいま
すようお願いいたします。なお、何かご不明な点があれば、お申し出ください。

1 ちょうさ もくてき
1 調査の目的

にほんご ひょうげん か ふくごうどうし がくしゅうしゅ い み すいそく じつたい けいこう
日本語の表現に欠かせない複合動詞について、学習者の意味推測の実態と傾向につ
いて、分析する。

2 ちょうさ てじゆん しょうじかん けい ふん
2 調査の手順と所要時間 (計20分)

- ① けんきゅう もくてき と 手順の 説明 (本紙をお読みください) 5分
- ② どういしよ きにゆう 3分
- ③ ちょうさようし きにゆう 10分程度

* ちょうさ でえられた じょうほう けんきゅう もくてき以外では 利用しません。ろんぶんちゆう げんきゆう ぼあい
には、匿名にします。また、得られた情報は調査者と責任者によって 嚴重に管理い
たします。

3 しゃれい
3 謝礼

はくしや しんてい ちょうさようし きにゆう お ちょうさしや と
薄謝を進呈いたしますので、調査用紙に記入が終わったら、調査者のところへ取り
に来てください。

いじょう どうぞよろしくお願いいいたします。

ちょうさじつしや めいじだいがく こくさいにほんがくぶ ねん なかむらはなこ
調査実施者：明治大学 国際日本学部 4年 中村華子

しどうきょうりん せきにんしゃ めいじだいがく こくさいにほんがくぶ じゅんきょうじゆ こもりかずこ
指導教員・責任者：明治大学 国際日本学部 准教授 小森和子

前置詞「at」のイメージスキーマに関する研究

—英語母語話者と日本人英語学習者に焦点を当てて—

A research of Image Scheme about English Preposition *At*

—Focusing on Native English Speaker and Japanese Learners—

明治大学 国際日本学部

本田 愛香

Meiji University School of Global Japanese Studies

HONDA, Manaka

目次

I はじめに

II 先行研究

III 研究課題

IV 調査の概要

1 調査対象者

2 手続き

V 結果と考察

1 各グループのイメージスキーマ

1.1 英語教員グループ

1.2 留学生グループ

1.3 帰国子女グループ

1.4 国内学習者グループ

2 留学生、帰国子女、国内学習者グループの「at」を用いた英文

2.1 留学生グループの書いた英文

2.2 帰国子女グループの書いた英文

2.3 国内学習者グループの書いた英文

VI まとめと今後の課題

参考文献

付録

付録:1 日本人英語学習者用の調査同意書

付録:2 英語母語話者用の調査同意書

付録:3 イメージスキーマの調査用紙

I はじめに

日本人英語学習者にとって、英語の前置詞の習得は困難であるとされており、日本人の大学生を対象に行われた調査によると、前置詞の習得は困難であると答えた学習者は95%と高い(佐野, 2009)。この理由として、英語の前置詞は日本語の助詞に相当するものであると考えられており、前置詞そのものが日本語には存在しないことや、英語の前置詞の「at」だけで26の意味があるとされているように(斎藤・豊田, 1933)、英語の前置詞自体の持つ意味が多いことなどが、習得を妨げる要因として考えられる。また、日本の学校における英語教育の現場では、前置詞に重点を置いた指導は少なく、「at」=「～で」、「～に」というように、機械的に英語の前置詞と日本語の助詞を対応させ、学習者に前置詞の意味をただ暗記させる指導が多く見受けられる。

これらの要因から、日本人英語学習者にとって、英語の前置詞の習得は非常に難しいことが分かる。長年英語を勉強している学習者でも完璧に使い分けることができない。しかし、英語習得において前置詞の習得は、非常に重要であると考えられる。なぜなら、前置詞は機能語の中でも、使用される頻度が高く(高木, 2005)、機能語である前置詞の意味を正しく理解することは、文の内容を正しく理解する上で重要であると考えられているからである(横山・弓場, 2004)。

では、日本人英語学習者が英語の前置詞を正しく習得するためには、どのような学習方法、指導方法が適切なのだろうか。筆者は従来の英語の前置詞と日本語の助詞を対応させる方法ではなく、前置詞のイメージスキーマを用いた指導、学習を行うことが有効だと考えた。イメージスキーマとは、私たちの行動、知覚、概念の中にくり返し現れるパターンや形、規則性のことを指し(Johnson, 1987)、それは我々の具体的な経験を基に、意味のある構造として立ち現れるものである(深田・鍋島・野澤, 2002; 辻, 2013)。例えば、コップ、グラス、カップは、その形や用途はそれぞれ微妙に異なるが、共通する形態的な特徴から、我々は中が空洞の円柱形という抽象的な概念を思い浮かべることができる。こうした抽象的な概念は、人間の身体的経験を通して形成されるイメージであるが、認知言語学や認知科学の分野では、それをイメージスキーマと呼んでいる。

こうしたイメージスキーマを利用することが、前置詞の指導に有効だと筆者が考える背景には、実際の単語学習方法に関わる。英語教育の現場では、単語の指導や学習の際に、ピクチャーカードなどの視覚情報が、用いられている。このことから、英語の前置詞も、視覚情報と位置付けられるイメージスキーマを用いて表すことで、学習者は簡単に理解することができるのではないかと考えられるのである。しかしながら、どのようなイメージスキーマを示すべきか、すなわち、英語母語話者が前置詞のそれぞれについてどのようなイメージスキーマを有しているか、このことを明らかにしなければ、指導において、適切なイメージスキーマを学習者に提示することはできないであろう。ところが、どのようなイメージスキーマが妥当であるのかについては、これまであまり実証されてこなかった。

そこで、本研究では、英語母語話者がどのような前置詞のイメージスキーマを有しているのか、そして、それは日本人英語学習者の有するイメージスキーマと類似しているのか、それとも異なるのか、異なるのであれば、それは学齢期における英語圏への滞在歴と関わるのか、について検討する。

この研究によって、日本人英語学習者の前置詞の学習、また、英語教育の現場における前置詞の指導法について、示唆を与えることができると考える。

II 先行研究

本研究に関わる先行研究としては、英語母語話者と日本人英語学習者とで、前置詞のプロトタイプの意味がどのように類似している、あるいは異なるのかを検討した研究や、前置詞という概念を持たない日本人英語学習者にとっての前置詞と助詞の関係を比較検討した研究、さらには、コア・イメージやイメージスキーマを用いた学習が、前置詞の習得にどのような影響を及ぼすのかを検討した研究などである。杉本(2006)、田中(2008)、後藤(2007)、Okugiri(1997)、安原(2010)の知見が参考になる。

まず、杉本(2006)は、日本語の格助詞ヲ格、ニ格、デ格、ヘ格を取り上げ、これらの格助詞の意味的役割を示し、それが対応する英語の前置詞とどこまでが意味的に共有され、どこから異なるのかを比較検討した。また、その比較検討の結果から、日本語の助詞と英語の前置詞には意味と用法の重なる部分と、そうではない部分があるため、意味や用法が異なる部分を明確にするためには、文法範疇を超えた考察が必要になると指摘した。さらに、杉本(2006: 126)は、「日英語の文法処理上の違いが、実は日英両言語話者による外的状況の把握の仕方の『ずれ』に起因しており、その『ずれ』がこのような両者の言語表現の違いに反映されているともいえる」と指摘している。ただし、杉本(2006)では、その外的状況の把握の仕方の『ずれ』が明確に言及されていない。この外的状況の把握の仕方の『ずれ』というのは、両母語話者の外的状況の認知の仕方の相違を表したものであろうが、『ずれ』について検討するためには、両母語話者の認知の仕方、すなわち、両母語話者に内在する事象の捉え方を確認する必要がある。よって、こうした、母語話者の事象の捉え方を確認するために、両母語話者のイメージスキーマを調べていく必要がある。

次に、田中(2008)は、英語教育において、コアとコア図式を示すことの有効性と応用可能性について述べている。コアとは、文脈に依存しない意味のことで、コア図式とは、図式的にコアを表したものである(田中, 2008)。田中(2008)は、基本動詞のような多義語の場合、複数の意味の関連性や連続性を読み取り、本来の意味を捉えるためにも、コアやコア図式を用いることが有用であると述べている。ほとんどの基本動詞は、容易にその動詞のコアを図式化することができるので、学習者にとっても理解しやすい。しかし、基本動詞の中でも、動詞は前置詞を伴って連語形式で使用されることが多く、その前置詞がどのような前置詞であるかによって、連語の意味も変わり、その結果、多義である動詞のどの意味を

表象しているのかも変わってくると考える。つまり、基本動詞のコアを図式化するだけではなく、前置詞のコアも図式化する必要がある。田中(2008)は、「over」のコア図式を示していたが、「over」のような前置詞は比較的図式化しやすいと考えられる。しかし、「at」に関しては、他の前置詞「in」や「on」などと比べても、明確なコア図式がない(田中・武田・川出, 2003)。前置詞「at」の本来の意味や概念を捉えるためにも、「at」のコア図式を、再度検討する必要がある。

次いで、後藤(2007)は、コアのビジュアル指導が発表語彙力、すなわち、単語を適切に使うことのできる力、を身につける上で、有効か否かについての調査を行った。テストは、類義語の多肢選択式の使い分けテストで、動詞の「見る I (look, see, watch)」、 「見る II (gaze, stare, glimpse, glare)」、 「話す(speak, talk, say, tell)」、 形容詞(wise, clever)、前置詞(at, by, with)の使い分けを被験者に行わせた。被験者は、私立女子大学の英文学専攻の2年生95名で、英語の類義語の意味の違いを示す際に、実験群(44名)にはコア・イメージを視覚化したイラストと訳語を用いて指導を行い、統制群(51名)には、コア・イメージを視覚化したイラストを除き、訳語のみで指導を行った。統制群の事前解説用のプリントにも、その類義語のコア・ミーニングの説明を記述しておくことで、コア・イメージの視覚化の効果測定した。調査結果から、コア・イメージの指導による語彙習得は全体として有効であるということが分かった。中でも、前置詞の実験群の正答率が、27.10%も統制群を上回り、他の品詞(動詞・形容詞)の中でも最も数値が高いという結果が出たことから、前置詞の指導において、コア・イメージを用いた指導がかなり有効であるということが示された。さらに、実験群と統制群の各上位群下位群の平均得点を見ると、有意差が見られないことから、どの学習者のレベルにおいてもコア・イメージを用いた指導は有効であると言及した(後藤, 2007)。しかし、後藤(2007)の調査は、安原(2010: 48)によって、「各単語につき1問と設問数がそもそも少ないため、1つの間違いによって、その前置詞は理解できていないということになる」と指摘されている。さらに、後藤(2007)が指導する際に用いた事前解説プリントには、コアの説明が日本語で記述されており、その記述を理解してしまえばコア・イメージに頼らずとも解答できる可能性がある。また、その指導の際に用いられたコア・イメージが適切であったかどうかの調査がなされていないことから、再度コア・イメージを検討する必要がある。

Okugiri(1997)は、英語の前置詞「on」の習得に関する調査を行った。Okugiri(1997)は、日本人の持つ「on」のプロトタイプ的意味が、英語母語話者の持つものと異なることが、英語の前置詞「on」の習得を妨げる一つの要因であるという仮説を基に調査を行った。この調査は、アメリカで行われ、実験群の日本人母語話者は、学生、主婦、会社員など経歴は多様であった。実験群の日本人16名と、統制群の英語母語話者16名の計32名を対象に調査は行われた。実験群の日本人には、grammatical judgement test、transferability test from *no-ue-ni* into *on*、frequency test of *no-ue-ni*の3つのテストに加え、統制群と実験群

の両者を対象にした、**frequency test of on**を実施した。その結果、日本語の「～の上に」と英語の前置詞「on」の意味は完全に一致するということはないこと、また、「～の上に」と異なる意味の「on」の意味が習得される以前に、「～の上に」と同様の意味の「on」が習得されるために、日本人学習者は、「～の上に」と訳すことができる英語の文も間違えてしまうことが明らかになった。そして、英語母語話者の持つ「on」のプロトタイプと、日本人の持つプロトタイプは異なることが指摘された。しかし、Okugiri(1997)では、その両話者の持つそれぞれのプロトタイプが、どのように異なっているのかについて明確には、調査が行われておらず、その違いについては、明らかになっていない。

最後に、安原(2010)では、広島市内の私立大学の大学1年生、55名を対象に、「at」、「on」、「in」のそれぞれに、イメージスキーマを用いた前置詞指導を行い、指導を行う前の事前テストと、指導を行った後の事後テストを比較することで、前置詞の習得において、イメージスキーマが有効であるか否かについて検討した。事前テストの結果から、日本人英語学習者の前置詞の習得状況が6割と低いこと、学習者によって習熟度に差があることが明らかになった。また、テストと同時に行われたアンケートから、イメージスキーマを用いて指導される方が少しは理解しやすいという結果が出たものの、イメージスキーマを用いた指導の有無は、前置詞の習得を促すことにあまり影響しないことが示された。加えて、このように、イメージスキーマを活用した指導の有効性が示されなかった背景には、安原(2010)の使用した前置詞「at」のイメージスキーマ自体が、正しいものではなかった可能性がある。さらに、安原(2010)自身も指摘しているように、被験者にとって理解しづらいイメージスキーマであった可能性も考えられる。

後藤(2007)、Okugiri(1997)、安原(2010)は、イメージスキーマを応用し、それが英語習得にどのような影響を及ぼすのかということについて調査を行ったが、そもそも英語母語話者がどのようなイメージスキーマを持っているのかということについては、事前の説明や研究が行われていない。同様に、田中・武田・川出(2003)や安藤(2012)でも、前置詞のイメージスキーマは描かれているものの、そのイメージスキーマがどのような経緯を経て作られたのか、また、それが正しいものなのかということについては説明されていない。さらには、この両者に描かれている前置詞のイメージスキーマが一致していないことから、実際の英語母語話者の持つイメージスキーマを、調査していないのではないかと推測される。このような理由から、英語の前置詞のイメージスキーマ自体を調査することで、正しいイメージスキーマを理解し、さらには、学習者にとって正しく理解し易いイメージスキーマを用いて、前置詞の指導を行えば、英語能力の向上を促すことができる可能性も考えられる。

Ⅲ 研究課題

先行研究を踏まえ、本研究においては、日本人英語学習者にとって有効的な前置詞の習得方法、指導方法を知るために、以下を研究課題とする。

- (1) 英語母語話者と日本人英語学習者のそれぞれが有する前置詞のイメージスキーマはどのようなものか、また、それは互いに異なるのか。
- (2) 学齢期に英語圏に滞在したか否かによって、日本人英語学習者の持つイメージスキーマは、英語母語話者の持つイメージスキーマと類似しているのか否か。

なお、本研究では、調査対象の前置詞を「at」に限定することとした。その理由は以下の通りである。

- ① 「at」のイメージスキーマが「in」や「on」と比べて、抽象的に表現することが難しいため、それぞれの被験者が持つイメージスキーマが異なる可能性があること。
- ② 「at」は日本語で、「～で」や「～に」と訳されることが多く、日本人英語学習者の持つイメージスキーマが英語母語話者、また日本人英語学習者同士で異なる可能性があること。

以上の2つの理由から、選定した。

母語話者と非母語話者の間で異なる可能性を有し、かつ、イメージスキーマが描きづらい前置詞を調査対象語に挙げることで、母語話者と非母語話者間にある外的状況把握の『ずれ』を見出すことができると考える。

Ⅳ 調査の概要

1 調査対象者

調査対象者は、英語母語話者と日本人英語学習者で、前者は、明治大学国際日本学部にも所属する、英語教育を専門とする教員(4名)、および英語圏からの留学生(5名)である。一方、後者は、同学部に所属する日本人学部生9名(内帰国子女5名)の計18名である。英語母語話者の出身国は、アメリカ4名、アイルランド1名、アフリカ1名、イギリス1名、オーストラリア1名、メキシコ1名、であった。英語母語話者のうち、留学生の1人は、両親との会話はスペイン語であるが、学齢期前にアメリカに移住し、教育は全て英語で受けたため、学術言語としての第一言語は英語であり、英語能力は母語話者と認定され得る。また、今回英語母語話者でも、英語教員と留学生を調査の対象にした理由としては、英語母語話者でも、指導する立場にあり、メタ認知的な知識や経験を有する教員と、前置詞について意識化したことのない留学生とでは、「at」のイメージスキーマが異なる可能性があるということが考えられるからである。一方、日本人英語学習者の内、帰国子女5名とそれ以外の国内で学んだ学習者(以下、国内学習者)4名である。帰国子女の5名は全員がアメリカでの滞在経験があり、平均滞在年数は、5.3年で、最短で2年、最長で9年であった。な

お、国際日本学部では、入学時に実施される TOEIC の点数で、英語のクラスのレベル分け (G→J→S)を行うが、今回は G(上位)クラスから 9 名(帰国子女 5 名を含める)に調査を依頼した。また、その他の英語能力に関する情報としては、国内学習者の 4 名の TOEIC の平均点は、866 点であった。一方、帰国子女に関しては、5 名中 2 名が TOEIC 未受験であったが、この 5 名の TOEFL iBT の平均点は 85 点であった。

2 手続き

調査は、2016 年の 10 月から 11 月中頃まで、明治大学中野キャンパス内で実施した。調査は、英語母語話者の教員には、個別で行い、英語母語話者の留学生や日本人英語学習者には、グループで行った。

まず、調査の目的と概要について説明し、その後、「at」のイメージスキーマを描いてもらった。ただし、グループで行う調査の際には、お互いの描くイメージスキーマを見ないように注意をした。

次に、教員については、描画が終了した後、イメージスキーマについて説明を求めた。また、インタビューの中で、教員の経験年数、どの校種でどの学年の生徒を対象に英語を教えていたのか、前置詞を教える際にはどのように指導を行うのかについて質問をした。一方、英語母語話者の留学生と日本人英語学習者のグループでは、それぞれが描画したイメージスキーマについて、1 人ずつに説明させた後、グループで各々の描いたイメージスキーマについてディスカッションを行わせた。また、両グループには、ディスカッションの後に、「at」を用いた 3 つの英文を書かせた。日本人英語学習者には、英文を書かせる前に、英語能力の度合いをみるために、TOEIC、TOEFL(iBT 含む)、実用英語技能検定などの点数と、どのように学校で英語の前置詞を教えてもらったのかということについて質問を行った。1 回のインタビューの所要時間は約 20~30 分であった。なお、インタビューの際には、インタビュー内容を記録するために、IC レコーダーを用いた。

英語母語話者である留学生と日本人英語学習者である国際日本学部の学生には、謝礼を与えた。

V 結果と考察

英語教員グループ(4 名)、留学生グループ(5 名)、帰国子女グループ(5 名)、国内学習者グループ(4 名)のように、調査対象者それぞれをグループ分けする。

1 各グループのイメージスキーマ

まずは、各グループのイメージスキーマについて考察をする。

1.1 英語教員グループ

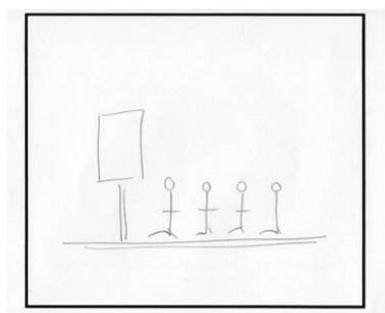


図1. 教員①

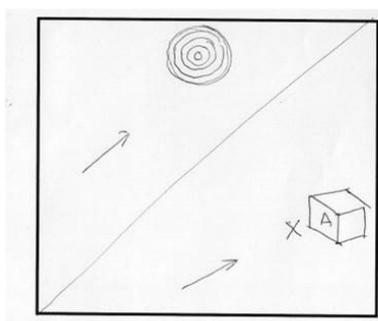


図2. 教員②

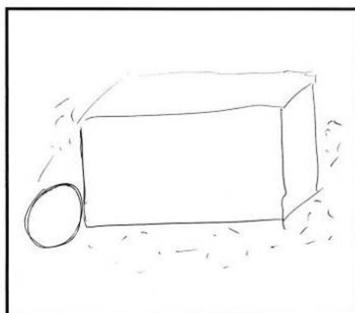


図3. 教員③

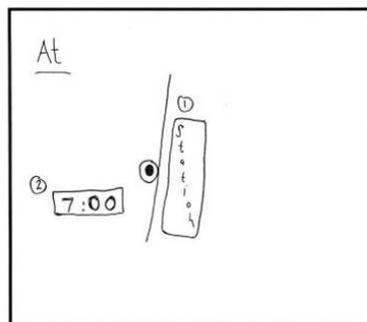


図4. 教員④

英語教員グループでは、箱や的を用いた抽象的なイメージスキーマを描く者が多かった。英語母語話者で、かつ英語教員という同じ職業をしていても、調査対象者それぞれの持つイメージスキーマは異なっていた。この調査を実施する前に、英語を普段教えている教員という条件から、前置詞「at」のイメージスキーマを描く際には、時間についてのイメージなのか、場所についてのイメージなのか尋ねてくる可能性が高いと推測していたが、そのように尋ねてきた教師は1名であった。4名の教師全員が、前置詞「at」が持つ、場所に関するイメージを描いていることから、やはり「at」のプロトタイプ的意味は場所であることが分かる。次に、個々のイメージスキーマについて、インタビューの内容を踏まえながら、検討していく。まず、図1は、バス停の前に居る人々の絵が描かれている。インタビューでは、「They are standing at the bus stop.」という例文を用いて、調査対象者の描いたイメージスキーマについて説明をした。彼らはバス停の前に立っていると意識することができるが、教員①は「in front of」を用いるのではなく、「at」を用いてバス停にいることを表現した。このことから、教員①にとっての「at」の持つ指示範囲というのは、バス停の前や付近も含めた、広い範囲であるということがわかる。次に、図2では、的の様な絵と箱の絵を指すような矢印が描かれているが、このイメージスキーマを描いた調査対象者とのインタビューの中で、「He throws a ball at a target.」という英文を例に挙げ、自身の持つ「at」のイメージの中には、「movement」の意味が含まれていると述べていたことから、ある特定の部分や場所までの空間も「at」の指示範囲に含めるということが明らかになった。

次に、図3をみると、箱の傍に白い球体が描かれており、点線で描かれた球体も箱の周りに描かれている。教員③は、インタビューの中で、ある場所を箱とすると箱の周りすべてが「at」の指示範囲であると説明をした。最後に、図4では、場所と時間についてのイメージスキーマを描いているが、駅の図には①、7:00と書かれた図には②と番号が振ってある。教員④は、インタビューの中で、丸数字は頭に浮かんできた順番を指しているとし、場所に関するイメージが先行するということを述べた。また①の駅の図に関して、駅の構内ではなく、駅の外や駅の前に円形の物体を描いていることから、教員①同様に、駅を中心とし、駅の前、駅の外というように駅を中心としたその周辺までを、「at」の持つ指示範囲とすることが明らかになった。

それぞれのイメージスキーマとインタビューの結果から、英語母語話者の英語教員グループにとっての前置詞「at」のイメージは、その特定の場所だけを指すのではなく、その場所全体、またその周辺も「at」の指示範囲であるということが明らかになった。

1.2 留学生グループ

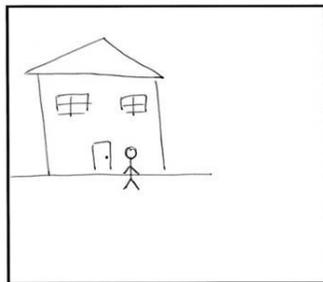


図5.留学生①

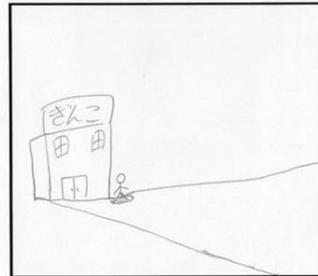


図6.留学生②

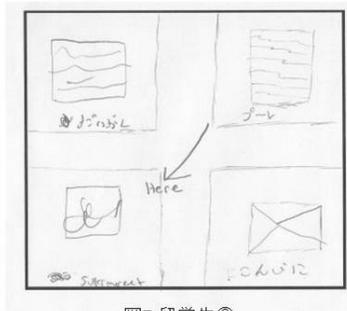


図7.留学生③

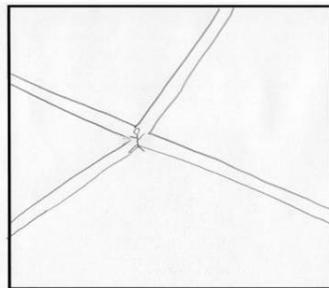


図8.留学生④

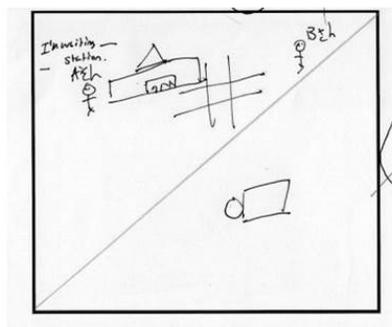


図9.留学生⑤

次に、留学生グループは、英語教員グループのイメージスキーマと比較すると、家、銀行、交差点、駅前などの特定の場所やその場所との位置関係を示しながら描いたイメージが多く、イメージスキーマがより具体的であるということがわかった。それぞれの持つイメージは、図 5、6、9 が建物の前に人間の絵を描いており、また、図 7、8 は交差点や道路を描いている点で類似している。次に、それぞれの描いたイメージスキーマについてみていくと、まず、図 5 を描いた留学生①は、「at home」という文を用いて、自身の描いたイメージスキーマについて説明をしており、図 5 と例文から、前述した英語教員①や④のように、留学生①にとっての「at」の指示範囲とは、家の外や周辺を含むということがわかった。次に、図 6 をみると、留学生①の図と非常に類似しており、同様にインタビューの中で、銀行の前に人を描いているという点で、「at」ではなく、「in front of」を用いるのではないかと尋ねた所、「in front of」、「close to」、「next to」は、「at」の指示範囲に含まれると説明をしていた。つまり、「at」の指示する範囲は「in front of」、「close to」、「next to」よりも広いということである。しかし、留学生②は、インタビューの中で、人間が銀行の中にいる場合は「in」で、外にいる場合は「at」と明瞭に「in」と「at」は異なるということを説明した。次に、図 7 のイメージスキーマをみていくが、図 7 を描いた留学生③は、インタビューの中で、「at」について場所に関するイメージだと説明した。しかし、図 7 をみると路地のある一角を指示した部分に「here」と書いてあることから、その地点周辺を含めるというよりは、その地点のみを示しているようにみえる。次に、図 8 をみると、交差点のような場所に人が立つイメージが描かれており、「I'm at the intersection.」という例文を用いて自身のイメージスキーマについて説明をした。交差点の真ん中、「at」はある地点を示すというイメージを留学生④は抱いていることがわかる。最後に、図 9 をみると、駅の前に A さんが立っており、B さんに「I'm waiting at the station.」と伝えていること様子が描かれている。先ほどの英語教員①や④同様に、駅の前、駅の外も含めた駅周辺が「at」の指示範囲であるというイメージを留学生⑤が抱いていることがわかる。

留学生グループのイメージスキーマとインタビューの結果から、英語教員グループ同様に、ある一つの特定の場所というよりは、その周辺も含めるということが明らかになった。さらに、英語母語話者の持つイメージスキーマは、類似しているものも多かったが、中には異なるイメージスキーマもあった。しかし、英語母語話者にとっての「at」の指示範囲や感覚は、ある特定の場所や地点だけではなく、その周辺をも含めるという点で非常に類似していた。

1.3 帰国子女グループ

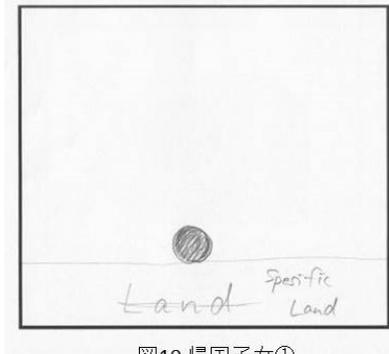


図10.帰国子女①

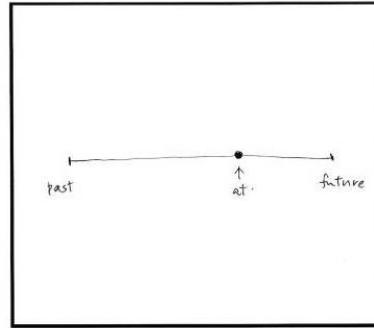


図11.帰国子女②

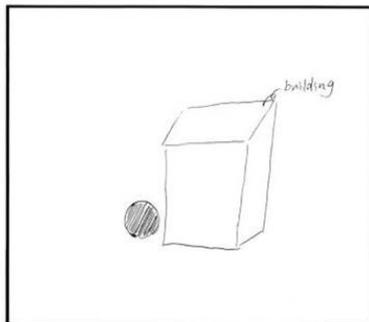


図12.帰国子女③

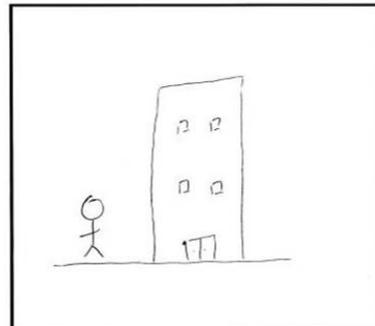


図13.帰国子女④

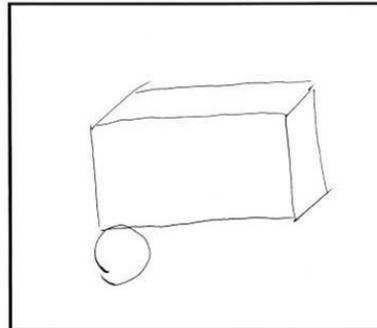


図14.帰国子女⑤

次に、帰国子女グループのイメージスキーマについて、インタビューを踏まえて検討する。まず、図10は、特定の場所、または、特定の地帯に物体が存在しているのが「at」であるとし、その場所や地帯は点的ではなく、やや広範囲な場所を示すとし、このイメージスキーマを描いた。また、図12、13、14をみると、ビルの横に人を描いたり、箱の横に物体を描く英語教員グループと留学生グループの持つイメージスキーマと同じようなイメージスキーマを描いていることがわかる。図12について、帰国子女③は、建物の中にいることを示す「in」と「at」は全く異なると指摘したうえで、建物の傍にいる「next to」「close to」は「at」の指示範囲と類似しているとインタビューの中で述べた。図14を描いた帰国子女⑤は、実際に在学していたアメリカのインターナショナルスクールで、「at」について

学習する際に、英語の教員が箱と物体を用いて指導していたことから、留学生③や留学生④と同様に、「at」のイメージが箱や建物の傍であるということに加えて、自身の学習経験も、「at」のイメージスキーマに影響を及ぼしているというインタビューの中で述べていた。図13を描いた帰国子女④も帰国子女③や⑤と同様の説明をしており、5人中3人の帰国子女がこのようなイメージスキーマを描いたことから、帰国子女グループの調査対象者の持つイメージスキーマは、英語母語話者の持つイメージスキーマに近似していること、また、前置詞「at」の指し示す範囲は、後述する国内学習者クラスグループよりも広範囲であることがわかった。また、図11のみが、時間を表したイメージスキーマを描いたが、国内学習者グループと同様に、直線に一つの点を置き、特定の時間を示した。つまり、時間に関する、イメージスキーマについては、帰国子女グループと国内学習者グループとは違いはなかったということである。さらに、時を表す際にも、日本人英語学習者は点的に「at」を捉えていることがわかる。一方英語教員グループの教員④は時間に関してのイメージスキーマとして、時計を描いていたことから、場所に関する「at」を点として捉えていないことがわかる。

1.4 国内学習者グループ

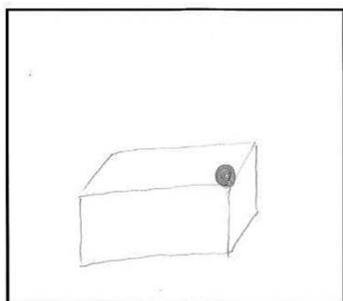


図15.国内学習者①

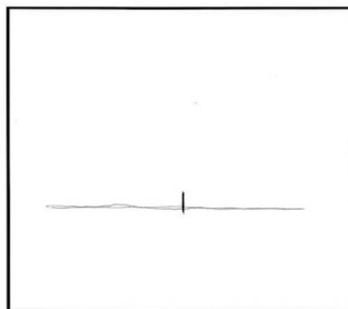


図16.国内学習者②

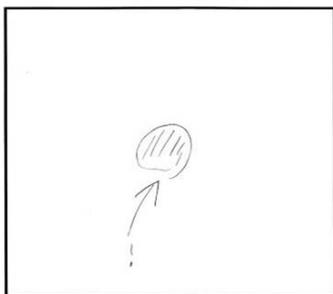


図17.国内学習者③

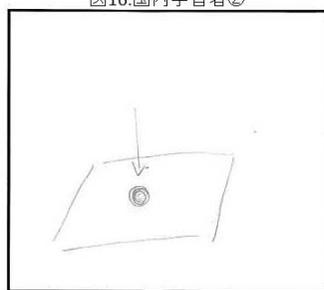


図18.国内学習者④

彼らが描いたイメージは、他のグループ同様に、それぞれ多様であった。4人中3人が、ある特定の場所を表すのが「at」だとし、それを表現するようなイメージを描いていた。4人の内で1人が、「at」の持つ意味の中でも、図16のように時間を表すイメージスキーマを描いたが、英語教員グループの中で描かれた時間を表すイメージスキーマとは異なり、直線のある一つの点、限定された点であると指した。この図16は、帰国子女グループの図

11と同様であることから、日本人英語学習者が持つ「at」の時間を表すイメージスキーマは点的で、帰国子女か否かに関わらず、類似している可能性が示唆される。次に、図 15 は、「at the corner」を例に挙げ、特定の場所を表すというイメージがあると説明した。また、箱の中に円形の物体を置いた場合は、「in」になってしまうことを指摘した上で、箱の中よりは、より一層具体的に表現するのが、「at」であると説明をした。次に、図 17 は、調査対象者が英語の教師から教わった方法をイメージスキーマとして描いた。これは国内学習者③によると、指差しの「at」といい、自身が中学生または、高校生時代に英語の教師が、前置詞「at」の指導の際に用いた方法で、例えば、駅を指さして「at the station」というように、指を指す動作を行いながら、英語で特定の場所を言うものである。英語教員グループの教員②が、「at」には「movement」の意味も含むと言っていたことから、「movement」を含むような感覚やイメージを生徒に理解させるために、この指導法を用いたのではないかと考えられる。次に、図 18 は、指をさし特定できるのが「at」であると説明をした。さらに、箱を用いて「at」を示すのであれば、角のみが「at」の指示範囲であるとし、箱の中を用いて考えるとそれは「in」であると述べた。彼らの持つ前置詞「at」のイメージは、英語母語話者と帰国子女グループの調査対象者が持つイメージよりは、指示範囲が狭く、ある特定の場所や点を示すことが明らかになった。同じ箱を用いたイメージスキーマの図でも、図 15 のように、角の部分にのみ物体(黒丸)が接していることから、英語教員グループ、留学生グループや帰国子女グループのイメージスキーマと比較をしても、その指示範囲が狭いことがわかる。また、国内学習者グループの多くが、インタビューの中で、「特定の場所」という単語を用いて、「at」のイメージについて説明をしていたことから、他の 3 つのグループの持つ「at」の指示範囲と比較しても狭く、点的であることが明らかになった。

各グループのイメージスキーマから「at」のプロトタイプの意味は、場所であり、直感的に「at」=場所であると捉える者が母語話者、非母語話者を問わず多かった。そして英語母語話者の持つイメージスキーマから、前置詞「at」の指示範囲は、ある特定の場所だけではなく、その場を含めた周辺や全体であるということが分かった。また、日本人英語学習者の持つイメージスキーマは、帰国子女グループと国内学習者グループで比較すると、帰国子女の方が、母語話者の持つイメージに近似していることがわかった。国内学習者グループの持つ「at」のイメージは、母語話者と帰国子女の持つイメージよりは範囲が狭く、限定的であった。時間に関するイメージスキーマは、日本人英語学習者(帰国子女と帰国子女ではない者)と、英語母語話者を比較すると、直線を引いて 1 点を置くイメージが日本人英語学習者であるのに対し、英語母語話者は、時計の絵を用いるとした。実際に図 4 を描いた調査対象者が置時計のイメージスキーマを描いたように、他の英語母語話者である大学教授にインタビューの中でも、時間を表すときはどのようなイメージを用いるのかと尋ねたところ、時計を描くと話をしていた。この違いからも、日本人英語学習者にとって「at」の指示範囲というのは、かなり狭く、ある一つの点であるというイメージが強いということ

がわかった。

2 留学生、帰国子女、国内学習者グループの「at」を用いた英文

次に、留学生グループ、帰国子女グループと国内学習者グループを対象に、「at」を用いた英文を書いてもらい「at」をどのような文脈で用いるのかについても尋ねているので、その結果について考察したい。なお、表の中で用いられている数字は、前の数字が調査対象者を表し、後ろの丸数字が当該調査対象者に書いてもらった英文の順序を表している。よって、例えば、1-①であれば、1人目の調査対象者が1番目に書いた英文、2-②であれば、2人目の調査対象者が2番目に書いた英文、ということである。

2.1 留学生グループの書いた英文

表 1. 留学生グループの英文

対象者と例文番号	英文
留学生 1-①	I will meet you at the mall.
留学生 1-②	I'm at home.
留学生 1-③	I have to be at work at LA.
留学生 2-①	I am at the bookstore.
留学生 2-②	We were at the restaurant 5minutes ago.
留学生 2-③	Can you meet me at the corner?
留学生 3-①	Meet me at the park.
留学生 3-②	Come to my home at 3 p.m.
留学生 3-③	We will eat at a Japanese restaurant.
留学生 4-①	I was at the intersection when my mother called me.
留学生 4-②	At 4:00, I will begin my MCIAT practice.
留学生 4-③	I was at home to prepare for my exam.
留学生 5-①	At the side of the road is where you will find me.
留学生 5-②	I was waiting at the station when she caught my eyes.
留学生 5-③	I saw sunrise at 8:40 this morning.

留学生グループの多くが前置詞「at」を場所を示す文で用いており、15文中12文が場所の意味用法であった。残りの3文は、時間を表す「at」で、動詞と前置詞からなる連語(以下、連語と称す)として「at」を用いた英文は書かれなかった。

2.2 帰国子女グループの書いた英文

表 2. 帰国子女グループの英文

帰国子女 1-①	I saw you at the super market yesterday.
----------	--

帰国子女 1-②	I am at the station.
帰国子女 1-③	I'll see you at three o'clock tomorrow evening.
帰国子女 2-①	I was in the classroom at that moment.
帰国子女 2-②	I am good at swimming.
帰国子女 2-③	I was at home when the earthquake happened
帰国子女 3-①	I am at the station.
帰国子女 3-②	I want to see you at 8 o'clock.
帰国子女 3-③	I am XXX* at your service.
帰国子女 4-①	I'm at the building.
帰国子女 4-②	She is at the store.
帰国子女 4-③	He will return at 3.
帰国子女 5-①	Meet me at the station.
帰国子女 5-②	She met her teacher at a park.
帰国子女 5-③	There was an accident at a traffic road.

注：*は当該調査対象者の個人名であったため、便宜的に XXX で代用する。

次に、帰国子女グループの対象者が書いた英文について考察をしたい。帰国子女グループも留学生グループ同様に、「at」を用いて場所を表す文が、15 文中 9 文、時間を表す文が 4 文、連語として「at」を用いた文が 2 文(「good at」、「at home」)であった。留学生グループは、連語として用いる文が書かれることはなかったが、このグループでは用いる者がいることがわかった。

2.3 国内学習者グループの書いた英文

表 3. 国内学習者グループの英文

国内学習者 1-①	A train arrived at the station.
国内学習者 1-②	He is looking at the desk.
国内学習者 1-③	She was playing tennis at that time.
国内学習者 2-①	I have just arrived at Narita airport.
国内学習者 2-②	I work at the flower shop across the street.
国内学習者 2-③	At that time, he was in United States.
国内学習者 3-①	The test will begin at two o'clock.
国内学習者 3-②	The accident happened at the station.
国内学習者 3-③	I often eat dinner and do assignments at the same time.

国内学習者 4-①	I pointed at his mistake.
国内学習者 4-②	She is gazing at that building.
国内学習者 4-③	Look at this photo.
国内学習者 5-①	I stayed at home.
国内学習者 5-②	At station, I have to wait over 30 minutes because of the train delay.
国内学習者 5-③	At a department store, there was sale.

次に、国内学習者の生徒が書いた英文について考察をする。「at」を用いて場所を表す文が、15文中5文と留学生グループ、帰国子女グループと比較しても圧倒的に少なく、時間を表す文が3文(「at that time」、「at the same time」を含む)、「at」を連語として用いる文が6文(「arrive at」、「look at」、「point at」、「gaze at」)とどのグループよりも多かった。場所の意味用法についての英文が、他のグループと比較すると少ないという結果の背景には、簡単な文を自分で作るとはいえ、「at」を用いるのが正しいのか、それとも「in」や「on」を用いるのが正しいのかということが頭を過ったのではないかと考える。つまり「at」の指示範囲をきちんと理解していないために、「at」を用いた英文を作るという指示に対して自信をもって取り組むことができなかつたのではないだろうか。さらに、連語を他のグループよりも多用している理由として、空で覚えた連語を用いた方が確実に正しい英文を書けると調査対象者は考えたのではないか。つまり、学校の英語教育で、「at」の意味範囲を教えるよりも、連語を覚えさせる教育が多く行われていることが影響しているのではないかと推測される。

最後に、調査対象者全員に書いてもらった英文全体をみると、イメージスキーマと同様に、「at」をある場所の前に付ける英文が多かった。45文中26文が、場所の意味用法についての英文で、11文が時間を表現するために用いた文、8文が「arrive at」や「look at」のような、連語として「at」を用いた文章であった。英文の数からみても、「at」のプロトタイプの意味は場所についての意味用法であると言えるであろう。また、8つの連語の用法のうち、「arrive at」、「look at」がそれぞれ2文ずつ、4文現れたことから、英語の授業の中で教師が指導する際に用いる「look at your text book」の「look at」や、初期の英語学習の中で学習した「arrive at」が定着していると考えられる。

これらの全ての結果から、日本人英語学習者と英語母語話者の持つイメージスキーマは異なることがわかった。英語母語話者の持つイメージスキーマから、「at」の指示範囲は、「in front of」や「next to」の範囲も含まれており、ある特定の場所を含めたその周辺を指していることが明らかになった。日本人英語学習者のうち、英語圏に滞在経験のある帰国子女に関しては、英語母語話者の持つイメージスキーマと非常に類似していた。一方、国

内学習者は、帰国子女、英語母語話者と比較すると、「at」の指示範囲を限定的に捉える傾向にある。この結果の背景には、日本の英語教育における、英語の前置詞「at」を日本語の「～で」や「～に」と対応させるような指導方法が影響しているのではないかと考えられる。その理由として、そもそも、日本人の多くが、前置詞「at」と対応する、日本語の「～で」や「～に」に対して、「～の中」というイメージを抱く傾向にあるからではないかと筆者は考える。実際に、「私は学校にいる」や「私は彼を図書館で待つ」というような文を例に挙げ考えてみたい。「私は学校にいる」という文章を用いるとき、自分は学校の外にいるというよりは、学校の中にいるということが無意識の内に表している場合が多い。また、同様に、「私は図書館で彼を待つ」という文章も、私は図書館の中で彼を待つということ表している場合が多く、図書館の周辺で待つことを表す場合には、「私は図書館の前で彼を待つ」や「私は図書館の外で彼を待つ」などと付け加えて表現をする。つまり、多くの日本人が「～で」や「～に」を用いて場所を示す場合、建物の中という意味を無意識的に含ませており、そのため、「～で」や「～に」に対応する「at」の指示範囲を、狭く、限定的に捉えているのではないかとということが考えられる。今回のイメージスキーマの調査においても、国内学習者グループは、「at」のイメージスキーマを描いたのではなく、彼らにとっての第一言語である日本語の「～で」や「～に」のイメージスキーマを描いたのではないかと考えられる。そのため、同じ日本人英語学習者であっても、帰国子女のイメージスキーマと異なったのではないだろうか。

調査結果を、研究課題に即してまとめると、以下の通りとなる。

- (1) 日本人英語学習者のうち、特に帰国子女の持つ「at」のイメージスキーマは、英語母語話者の持つイメージスキーマと非常に似ていた。しかし、日本人英語学習者のうち、帰国子女ではない国内学習者グループの持つイメージスキーマは、母語話者の持つイメージスキーマとはあまり似ていなかった。
- (2) 帰国子女の持つイメージスキーマの方が、母語話者の持つイメージスキーマと似ていたことから、学齢期に英語圏への滞在した経験が、影響を及ぼす可能性がある。

VI まとめと今後の課題

今回の研究では、日本人英語学習者と英語母語話者の持つ英語の前置詞「at」のイメージスキーマについて調べた。調査対象者全員にそれぞれの持つ「at」のイメージスキーマを描いてもらい、インタビューを通してどうしてそのようなイメージを持っているのかということについて掘り下げていった。その結果として、英語母語話者と非母語話者である日本人英語学習者の持つ前置詞「at」のイメージスキーマは、異なることがわかった。杉本(2006)の言葉を借りると、その両者間には外的状況把握の『ずれ』が存在し、前置詞「at」が示す範囲が、母語話者にとってはある特定の場所を含めたその全体や周辺であるのに対し、非

母語話者である日本人英語学習者にとっては、限定的かつ点的で、ある特定の場所のみを指すのが「at」であるということであった。また、日本人英語学習者のうち、英語圏への滞在経験のある帰国子女は英語母語話者と似たイメージスキーマを描いたことから、英語圏への滞在経験の有無がイメージスキーマに影響を及ぼす可能性があることが明らかになった。5名の帰国子女の英語圏への滞在歴をみると、帰国子女全員がアメリカへの滞在経験を有し、平均滞在年数は5.3年であった。さらに、5名全員が、第二言語習得における、臨界期と言われている思春期の間に英語圏に5.3年間滞在していることから、言語の概念を獲得する上でも、臨界期説が有効である可能性が考えられる。しかし、すべての中学校、高等学校に通う学習者が、思春期の間に英語圏へある程度の年数滞在することは、現実的に不可能である。そこで、筆者は、今後英語教員として、英語教育の現場においてイメージスキーマを用いた指導を行い、英語母語話者同様の概念を学習者に掲示したく、今回の調査を通して、筆者なりに前置詞「at」のイメージスキーマを考案した。イメージスキーマを作成する際に、英語母語話者の持つイメージスキーマの範囲が、日本人英語学習の持つものより広い範囲であったことや、国内学習者グループが描いたような点だけで捉えるイメージスキーマではなく、空間や「movement」といった感覚や概念をイメージスキーマの中にも含ませることなどに留意した。また、英語の前置詞「at」は中学校1年生の教科書から新出単語として現れることから、田中(2008)のコア図式のような、棒人間などの絵を用いたりすることでより生徒に視覚的にわかりやすくすることが求められることから、以下のようなイメージスキーマを提案したい。

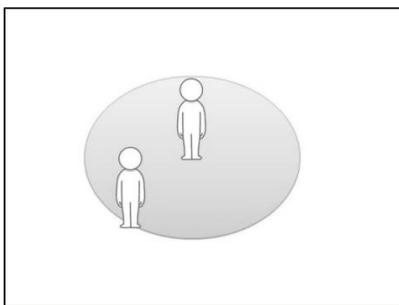


図 18. 「at」のイメージスキーマ

円の中と円の周りに人間のイメージを配置することで、ある特定の場所だけを示すことなく、「at」の意味範囲を示すことができる。実際の英語教育では、この円形の図は、学校であったりスーパーマーケットであったりと様々な絵を用いて応用することで、より「at」の指示範囲を身近にわかりやすく感じる事が可能であると考えられる。中心にある円形の中に人が立っていることから、「in」ではないかと指摘される可能性もあるが、そのように混同を起ささないために、従来で用いられているような「in」のイメージスキーマも一緒に教示し、比較することで、「at」の意味範囲を理解させるのが良いだろう。中学校段階においては、アニメーションの要素を取り入れたイメージスキーマを用いて、高等学校段階では、

より抽象化したイメージスキーマを用いて指導するなど、学習段階に応じたイメージスキーマを教示することも有効であると考えます。

今回の調査結果からの結論として、母語話者と日本人英語学習者(非母語話者)の持つ前置詞「at」のイメージスキーマは、母語話者の持つイメージスキーマの方が、日本人英語学習者(非母語話者)の持つイメージスキーマよりも広範囲を示しているという点で異なることがわかった。また、日本人英語学習者のなかでも、学齢期に英語圏への滞在経験のある帰国子女の方が、母語話者の持つイメージスキーマと非常に類似しているということも明らかになった。しかし、当該イメージスキーマを英語教育の現場で教えることで、英語圏への滞在経験の有無に問わず、前置詞「at」の指示範囲を的確に理解することが可能になり、英語能力の向上にもつながると考えられるため、今後、英語教育の現場で、イメージスキーマを用いた指導を実践することが重要であると考えます。

最後に、今後の課題に触れたい。まず、今回の調査では、日本人英語学習者を習熟度別に分ける方法として、帰国子女か帰国子女では無いもので分けて、統制を行ったが、今後は英語の習熟度の定義を明確にした上で、調査を行いたい。また、帰国子女と帰国子女ではない両者の TOEFL や TOEIC、実用英語技能検定の結果を見てみると、その能力や点数に大差はなくどちらも英語の能力は高かった。この事実から、英語習熟度をもう少し差をつけて見るべきであったと考える。英語の習熟度によって、イメージスキーマが類似しているのかということについては、引き続き調査対象者の英語のレベルを変えてみていきたい。加えて今回の調査の対象者の人数が、18人と少なかったために、このイメージスキーマの妥当性については、結論を留保せざるを得ない。本研究を基に、今後も日本人英語学習者、英語母語話者の対象範囲を広げ、両話者のイメージスキーマの調査を行うと同時に、日本人英語学習者を対象に筆者自身が考案したイメージスキーマを学校の英語教育の現場で用いて指導を行い、イメージスキーマを用いた英語の前置詞指導の有用性についても調査を行っていきたい。

付記

調査の実施に際しては、明治大学国際日本学部のアレン先生、マクロクリン先生、他の英語の先生方にご協力を賜りました。また、国際日本学部に所属する留学生、学部生の方々にも、調査に協力して頂きました。さらに、研究の過程では、ゼミのメンバー皆さんから、たくさんの示唆を頂きました。また、聖心女子大学の奥切恵先生には、参考文献として、ご自身の未刊行の修士論文をお送りいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 安藤貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 東京：開拓社.
- (2) 小島ますみ (2006) 「多義語におけるコア・ミーニングの有効性」『第 32 回全国英語教育学会高知研究大会発表要綱』,pp.75-77.
- (3) 笠原準一他(2015) 『NEW HORIZON English Course 1』 東京：東京書籍.
- (4) 後藤由佳 (2007) 「コア・イメージの視覚化が語彙習得に与える効果」『Otsuma Review』 第 40 号,pp.237-248.
- (5) 斎藤秀三郎・豊田実(1993) 『熟語本位 英和中辞典 新增補版』 東京：岩波書店
- (6) 佐野紀子 (2009) 「英語前置詞の習得方法に関する研究—日本で英語を学習する学習者とカナダで英語を学習する学習者に焦点を当てる—」『東京家政大学研究紀要』第 49 集, pp.115-123.
- (7) 杉本豊久 (2006) 「日本語助詞と英語前置詞の比較」『日英語の比較—発想・背景・文化 第二版』,pp.119-127.
- (8) 高木紀子 (2005) 「日本人英語学習者の前置詞習得に関する研究(2)—前置詞の多様性に焦点をあてる—」『東京家政大学研究紀要』第 46 集,pp.205-216.
- (9) 田中茂範 (2008) 「意味記述におけるコアの有効性と英語教育における応用可能性」『日英の言語・文化・教育—多様な視座を求めて』 pp.159-169.
- (10) 田中茂範・武田修一・川出才紀(編) (2003) 『E ゲイト英和辞典』 東京：ベネッセコーポレーション.
- (11) 辻幸夫 (2013) 『新編 認知言語学キーワード事典』 東京：研究社.
- (12) 根岸雅史他 (2015) 『NEW CROWN1 ENGLISH SERIES New Edition』 東京：三省堂.
- (13) 深田聡・鍋島弘治朗・野澤元(2002) 「認知言語学におけるイメージスキーマの先行研究」『認知言語学会 第 3 回全国大会 予稿集』 pp.334-338.
- (14) 横山晶一・弓場重成 (2004) 「機械処理のための機能語の分析」『言語処理学会年次大会 発表論文集』 第 10 巻, A10A2-04.
- (15) Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- (16) Okugiri Megumi (1997) *The acquisition of the English preposition on by Japanese speakers*. (Unpublished master's thesis). University of Wisconsin Milwaukee, WS.

付録

付録:1 日本人英語学習者用の調査同意書

調査協力についての同意書

私は、明治大学国際日本学部、本田愛香の実施する「日本人英語学習者の所有する、英語の前置詞(at)のイメージスキーマとその習得研究」について、その目的や方法の説明を受けました。また、個人が特定されるような情報は一切公開されないことについての説明も受けました。

よって、

本日記入した調査票を本田愛香の研究に使用されることに、

同意します。

同意しません。

1. データの収集は卒業研究のためであり、他の目的には一切しようしない。
2. 調査協力者のデータや個人に関する情報が卒業論文に掲載される場合、匿名とし、個人が特定される情報をすべて削除する。
3. 調査協力者は、本同意書で同意しても、いつでもこの同意を撤回できる。
同意を撤回する際は、以下の連絡先へ連絡する。

明治大学 国際日本学部 本田愛香

〒164-8525 東京都中野区中野 4-21-1

年 月 日

調査協力者 _____

Consent about using a result of a research of the image of “at”.

I would like to use the results of a research of a preposition, “at” in order to write my graduate thesis. Please read the description below and sign if you agree with my use of a research of a preposition, “at”.

【Description of the research】

This research will analyze an image of preposition, “at” native English speakers have. Based on this research, I want to write my graduate thesis which is about the acquisition of English preposition, “at” by Japanese students.

【Confidentiality】

Any information derived from the preposition research will be used only for the academic purposes and any information that personally identifies you will not be voluntarily released or disclosed without your separate consent. Furthermore, personal information that may identify you will not be released upon publication of the research as well.

【How will results be used】

The results of the research will be possibly used for my graduate thesis.

【Withdrawal of the consent】

You can withdraw your consent at any time. Please contact the address below when you wish to do so.

Manaka Honda
4-21-1 Nakano Nakano-ku 164-8525 Tokyo

I agree/disagree with the result of my preposition research being used for my graduate thesis.

I agree

I do NOT agree

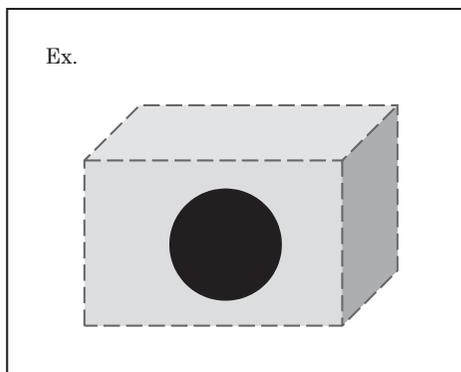
Date: _____

Signature: _____

付録3 イメージスキーマの調査用紙

○Please draw your image scheme of a preposition, “**at**” in this frame.

Ex.)This is an image scheme of a preposition, “**in**”.



なぜ日本人はキツネとタヌキに化かされるのか
—民俗学および古典から見た日本人のキツネ・タヌキ観—
Kitsune and Tanuki, or Shape-shifting Animals in Japanese Culture:
Focusing on Folklore and Classical Literature

明治大学 国際日本学部
浦上 ゆうき

Meiji University School of Global Japanese Studies
URAKAMI, Yuki

目 次

はじめに

I 動物学的比較からの考察

II 民俗学および古典比較からの考察

1. 中国の狐狸像
2. 狐狸から分離した「狐」：日本のキツネ像
3. 狐狸から分離した「狸」：日本のタヌキ像

おわりに

参考文献・ウェブサイト

はじめに

キツネやタヌキが人を化かすことを、わたしたちは知っている。幼い頃に読み聞かせてもらった絵本や、祖父母から教えてもらった昔話から。そういったものが無意識のうちに、わたしたちの中で常識的なイメージとして蓄積されていく。一方でわたしたちは、キツネやタヌキが「現実的には」人を化かすような不思議な力を持っていないことも知っている。ともすれば、わたしたちは矛盾した空想と現実を、矛盾していると意識しないまま生きていけると言えるのではないか。

科学の発達に伴いあらゆる現象から神秘性が失われつつある現代においても、わたしたち日本人は科学の光の届かない人里離れた辺境の地や夜闇に今もなお霊妙さを見出し、心霊現象や怪奇現象として無理やり説明しようとする。それは自分たちの認識の及ばない物事を、自分たちの納得できる形に押し込めて、自らを安心させようとする行為だ。キツネとタヌキに化かされたという話もその例に漏れない。自分が体験した不思議な出来事を解釈するために、身近な生き物たちを「利用」したに過ぎないのだ。

では、なぜ昔の日本人たちは「キツネ」と「タヌキ」に化かされたのか。そこにはやはり古来より人びとの生活に密接に関わってきた生き物としての親しみがあるだろう。しかし、親しみだけが理由なら、なにもキツネとタヌキに絞る必要はない。鳥でもネズミでもカエルでも、人里で見られる生き物ならなんでもよかったはずである。そこで私は、キツネとタヌキでなければならなかった理由を追究したいと考えた。本論文では、なぜキツネとタヌキが「人を化かす動物」としての性格を与えられたのか、また両者の化かし方の違いはなにかについて、キツネとタヌキの動物学的な生態と、両者が「化かす動物」として登場する古典を照らし合わせながら考察していく。

なお、本論文は二年次の教養講座Bで執筆したものを、三年次に加筆・修正したものである。

I 動物学的比較からの考察

キツネとタヌキは古来より日本に生息していた生き物で、ともすれば野山に囲まれた集落で生活していた大昔の日本人たちは現代人よりもキツネとタヌキに遭遇する機会が多く、またその生態にも詳しくはなかったはずである。そこからキツネとタヌキにまつわる説話伝承が生み出されたのは必然だった。むしろ、そうした物語は興味と親しみの眼差しをもって観察された実際の生態に基づいているはずなのである。そこで、まずは『世界大百科事典』の「キツネ」と「タヌキ」の項を参照しつつ、民俗学以外の知見から両者についての生態や習性を整理していくことにする。

キツネ（学名 *Vulpes vulpes*）はヨーロッパ、アジア、北アメリカに広く分布し、アカギツネをはじめ多くの亜種に区別される。日本には北海道のキタキツネ（*Vulpes vulpes schrencki*）と、本州・四国・九州のホンドギツネ（*Vulpes vulpes japonica*）が生息しているが、どちらもアカギツネの亜種である。生息域は極めて広く、「平地から標高 1800 メートルくらいまでの山地に多く見られるが、高山帯にもすみ、富士山の頂上に出没することもあ（『世界大百科事典』「キツネ」の項）」り、加えて人家付近でもしばしば目撃されている。キツネが地球全体でみてもさほど珍しくない生き物であるのに対し、タヌキ（*Nyctereutes procyonoides*）はアジア東部の特産である。北はシベリアのアムール沿岸から南は中国南部、ベトナム北部のあたりまで。現在ヨーロッパに分布しているものについては、1920 年代にソ連からヨーロッパ東部に移入されたという背景がある。すなわち日本は意外にもキツネとタヌキが同時に見られる世界的に珍しい地域なのである。様々な環境によく適応するキツネに比べるとタヌキの生息域はやや狭く、「平地から低山に多く、おもに森林にすみ（同書「タヌキ」の項）」「まれに人家や寺院の縁の下にすみつくこともある（同上）」という。キツネは西方でも古代ギリシアのイソップ物語や中世の動物寓意譚にたびたび登場しており、古来より存在がよく認知されていたことが伺えるが、タヌキに関する伝承が少ないのは生息地域が非常に限定されていたためであろう。

次いで詳しい生態をみていく。キツネとタヌキはともに夜行性のイヌ科で、季節によって若干異なるものの野ネズミやカエル、昆虫などの動物質や、果物などの植物質のものを食べる雑食性でもある。イヌやオオカミなどの発達したイヌ科は鋭い嗅覚と高い知能を持ち、活動的な性質を示すのだが、やはりキツネもこの例に漏れず、とりわけ聴覚に優れている。一か月前に地中に埋めて貯蔵した獲物の位置を記憶しているし、身体能力については好物のネズミを捕獲する際に「背のびをするように高く後脚で立ち上がり、上方からかかる独特の捕獲行動（同書「キツネ」の項）」を披露するくらいすばしっこい。三角形の顔やしなやかで美しい体つきも小型のイヌに似ている。一方のタヌキはどうだろう。イヌ科のなかでは原始的な生き物で、毛深く四肢も短いので、ずんぐりとして見える。正面から見た顔は円形に近く、むしろどこかとぼけているようにも思われ、キツネのような鋭利さや気品はほとんどない。加えてイヌ科では珍しく冬ごもりをするので、直前の秋頃には脂肪を蓄えて 5 キロ近く体重を増やすという。キツネに比べると特徴に欠ける見た目から、古くはアナグマ、イタチ、テンといった姿の似た動物とあまり区別されてこなかったようである。

吉野（1980）は民間伝承のなかのキツネ研究に先んじてその生態について触れており、とりわけキツネの恋愛事情に着目していた。確かに『世界大百科事典』を引いてもタヌキのそれの倍の記述がある。タヌキは春先に交尾をし、約 9 週間の妊娠期間を経て、一度に 1～8 子を生む。両親に餌を与えられ育てられた「子が独立するのはその年の秋だが、そのまま両親の巣穴で冬ごもりをすることも多い（同書「タヌキ」の項）」という。そんなタヌキ

の繁殖に比べると、キツネのものは随分と激しいように思われる。まず繁殖期の冬になると複数の雄が一匹の雌を奪い合う。妊娠期間は51日ほどで、4月頃に3~5子を出産し、その後は大抵雄が餌を運んで育児の手助けをする。巣穴から出られるようになると子は両親と遊び、次第に木の葉やバッタなどの動くものをいじくって狩りの練習をしはじめる。秋頃になると「1腹子相互の攻撃性が高まり、また、親の子に対する攻撃性も高まって分散(同書「キツネ」の項)」し、子はひとり立ちするのだ。

ここまではキツネとタヌキに対する、どちらかといえば好意的かつ魅力的な生態について述べてきた。しかしながら、のちに両者に付与される「化かす」イメージは、こうした愛らしい特徴からはかけ離れた、むしろネガティブなものであるはずである。では、昔の人びとはキツネとタヌキの生態のどのような側面を否定的にみたのだろうか。民俗学の見地を踏まえて分析していこう。

中世ヨーロッパでは「空腹のとき、赤土の上に転がり血に塗れて死んだふりをし、鳥たちが寄ってきたとき、急に起き上がってつかまえて食べる(同上)」といったように、キツネの狡猾な知者としての姿が強調され、寓話、民間信仰、呪術などの主人公だった。吉野はキツネに対する嫌悪について、三角形の顔かたちが優美さというより狡猾さを感じさせ、またその鋭敏な感覚もキツネの悪賢いイメージに影響したのではないかと指摘している。また、バッタなどの小動物をいじって遊んだり、頭上に水草を乗せて水中から鴨の群れに忍び寄りたりと、知能の高さも時として嫌悪される理由になった。そういう意味で「だます」というのはあながち間違いではない。

ところで、キツネが頭の上に「なにか」を乗せる行為というのは、民間伝承のなかではよくみられる。例えばキツネが木の葉を頭の上に乗せて宙返りをする、というのは現代でもよく知られている話であろう。古くは唐代の文人・段成式による異聞集『酉陽雜俎』巻15に、キツネが「妖怪になるときは、かならず、ドクロを頭に乗せて、北斗にお辞儀をする。ドクロが、おちなければ、人間に化ける」という記述がある。この頃からキツネが人間に化けるとされていたことも興味深い。それはⅡで述べることにして、ここではキツネがわざわざドクロを用いた点を深めたい。小松(2015)によるキツネの化け方の分析によると、ドクロを乗せたキツネは室町時代の『狐草紙絵巻』にも出現している。好色な老僧が契りを交わした美女の正体は実はキツネだったという単純なストーリーなのだが、逃げ出す4匹のキツネのうち2匹がドクロと人間の髪の毛らしきものを頭に乗せているのだ。小松によるとこれらは「狐が人間や道具などに化けるときのいでたちを表してい」て、「髪の毛は人間の女の髪の毛で、それをかぶって化けることによって、その髪の毛のもともとの持ち主と同様の美しい女に化けることができた」のだという。ドクロについても生前の若い女の姿に化けるための呪的なアイテムだったのだろう。『酉陽雜俎』の「北斗(北斗七星)」は道教(古代中国で興った神仙思想を母体とする宗教)で生死を司る神を象徴しており、その神に拝することでドクロの主の姿に化ける力を得たのかもしれない。

一方、キツネほど利口ではないタヌキの「化かす」イメージの根幹は「タヌキ寝入り」にあるのではないかと思う。『世界大百科事典』には「漁師の撃った銃の音などに激しく驚かされると失神し、しばらく後に正気に戻り逃げ出すと昔からいわれ（「タヌキ」の項）」ていたとあるから、この習性を人びとが「化かされた！」と感じたとしてもおかしくはない。

以上のことから、日本では中国から「人を化かす生き物」としてのイメージが入ってくる以前より、人を化かすとまではいかないまでもキツネやタヌキに対するネガティブなイメージは存在していたと思われる。けれど、それは祟りや呪いで人間に害をもたらす、といったものではなく、あくまでも摩訶不思議な霊力を有する森羅万象の一部として見なされていた。ゆえに、西洋の伝承にみられるように極端な「悪」や「邪悪な存在」にならなかったのではないかと推測する。

II 民俗学および古典比較からの考察

1. 中国の狐狸像

キツネとタヌキについて、その生態の特異性が時にネガティブなものとして捉えられていたことは先に述べた。その否定的な要素を基盤として「人を化かす動物」としてのイメージが構築され定着していくのだが、ここではその過程に大きな影響を与えた中国の「狐狸」という存在について触れてみたい。

古代の日本人たちは万物に靈魂が宿ると信じていた。人間という生き物にはじまり、自分たちの生活を取り巻く山や川、森、岩、気象にいたるありとあらゆるものの靈魂を「八百万の神」として崇拝する姿勢は、日本の神道の基盤となる。イギリスの人類学者エドワード・タイラー (Edward B. Tylor) はこの考え方を「アニミズム (精霊崇拜)」と名付け、あらゆる宗教の根底にこの靈的存在への信仰が存在すると考えた。諏訪 (2010) は、日本では縄文時代早期から靈魂の存在を認識し死者を埋葬する習慣が生まれたが、それよりも5000年ほど前にはすでに中国人は死者の靈魂を認めていたとしている。とすれば、前述したとおり、古代の中国人たちがわたしたちの祖先と同様にキツネに靈妙な性格を見出していた可能性は十分に考えられる。けれどタヌキに関していえば、その限定的な分布も相まってキツネほど注目されなかったのである。

それゆえに、「狐」と「狸」を組み合わせた「狐狸^リ」という中国語には、タヌキの意味は一切含まれない。本来「狸」はヤマネコを中心としたネコ型の哺乳類全般を指し、「狐狸」といえば「頭が大きく尾が小さなヤマネコ＝キツネ」でしかなかった。この二字の漢字が仏教や儒教とともに日本に伝わったとき、日本にはヤマネコが生息していなかったものだから、当時の日本人たちは「狸」の字をもともと日本に生息していたタヌキに当てること

にした。そうして古代日本において、キツネほど文献に現れることのなかったタヌキも晴れて「化ける動物」として認知されるようになったのだ。つまり、タヌキがキツネと並んで人間を化かすとされるのは、まったくの日本人の独創だったわけである。

日本に入ってくる以前の中国の狐狸、すなわち「妖怪としてのキツネ」は、女性に化けて男性をたぶらかし、男性にも化けて女性もたぶらかす、男女両性の妖怪とされていた。それでもどちらかといえば女性に化けることの方が多かったようである。日本のキツネがもっぱら人間の女性、とりわけ美女に化けることが圧倒的に多いのもその影響であろう。

では、なぜ中国の狐狸は女性に化けたのか。その理由の説明にあたっては、中国の陰陽五行思想が深く関わってくる。この思想は今から約 5000 年前に成立した中国古代哲学で、「陰」と「陽」の二元の変化によって宇宙の万象を説明しようとする陰陽思想と、「木火土金水」の五つの要素によって万物は成り立つとする五行思想を統合して生まれた。この思想に基づけば、黄色の体色をもつキツネは土行に属し、陰陽で分ければ「陰の気」のものになる。したがって、狐狸はたとえ雄であっても女性に化けて人間の男性をたぶらかし、「男性の精気＝陽の気」を得て、陰陽のバランスをとろうとするのだ。この陰陽五行思想は狐狸像とともに 5 世紀から 6 世紀の間に日本に伝わり、そのうち道教の要素なども取り入れて陰陽道という日本独自の形で発展を遂げていくことになる。

古代中国において、キツネが人間の美女に化けて人間の男性をたぶらかす、という記述の最古のものは、調べるかぎり 3 世紀末、晋の郭璞によって編纂された『玄中記』のようである。ただし『玄中記』は現存していないため、これを大量に引用している『太平広記』巻 447、を引いた魯迅の『古小説鉤沈』を参照したい。

狐五十歳能變化爲婦人。百歳爲美女爲神巫或爲丈夫、與女人交接能知千里外事善蠱魅、使人迷惑失智。千歳即與天通、爲天狐。

すなわち、キツネは 50 歳で婦人、100 歳で美女あるいは巫女となり、丈夫（男性）と交わる。遠く離れた場所のことを知る能力があり、蠱魅（魅惑する術）が上手で、人を惑わせる。1000 歳になると天に通じ、天狐となるのだという。『太平広記』は全 500 巻ある宋代の怪異小説集だが、これらのうちキツネの項目だけで 9 巻が占められており、当時どれだけの狐狸にまつわる怪異話がまことしやかに囁かれていたかがよくわかる。

2. 狐狸から分離した「狐」：日本のキツネ像

5～6 世紀頃、狐狸の概念は仏教や儒教とともに日本に伝わった。

それ以前から日本の中では稲の天敵であるネズミを捕食してくれるキツネを稲の神の使いとみなす稲荷信仰が広まっていたこともあり、昔の日本人たちにとってより身近な存在

となったキツネはタヌキよりも文献上に現れる機会は多かった。そんなキツネが日本の説話の中ではっきりと人間の女性に化けてみせたのはやはり狐狸像が輸入されたのちの平安時代初期で、現存する日本最古の説話集『日本霊異記』上巻第2に初めて出現する。「狐を妻として子を生ましめし縁」（キツネを妻にして子どもを産ませた話）と題された物語で、次のように語られている。

欽明天皇の時代に、美濃国の男が美しい女と出会い結婚する。しばらくして妻は一人の男の子を出産する。同時期にその家の飼い犬も子犬を出産したが、この子犬は妻に向かって吠え立てるばかり。妻は夫に「此の犬を打ち殺せ」と頼むが、夫は子犬を可哀想に思って殺せなかった。ある日、餅つきの際に犬が妻に噛みつこうとして、怯えた妻はキツネの正体を現してしまう。キツネが夫の元を去る際に、夫は「汝と我との間に子を相生めるが故に、吾は忘れじ。毎つねに来たりて相寝よ」と言い、その言葉を忘れなかったキツネはその後も男を訪ねて泊まっていった。これを「来きつ寝ね」（来て寝よ）と名付け、キツネの語源になったという。

この物語のように、キツネと人間の異類婚譚（狐女房型説話）は各地に伝えられていて、キツネにまつわる民間伝承の中核をなしている。女性に化けたキツネが恩人の嫁となり子を成すが、やがて正体を知られて破局する、という流れを基本とするが、吉野はこのタイプの説話は男女の破局というよりもむしろ母子の別れに重点が置かれていると分析している。残された子は大抵が特別な能力を発揮して成功しており、始祖伝承としても成立するのだ。「狐を妻として子を生ましめし縁」も美濃国の「狐の直」という氏族の伝承で、当時勢いのあった氏族の背景にキツネの存在を見出しているのは興味深い。

類い希な能力を得て活躍した最たる例は安倍晴明だろう。中世の『信太妻（信田妻）』にはじまり、近世以降には人形浄瑠璃や歌舞伎で「蘆屋道満大内鑑」として脚色され語り継がれてきた。『信太妻』では、安倍晴明の経歴が次のように語られている。

平安時代の中頃、摂津の安部（安倍）保名は和泉国の信太明神へ参詣の折にキツネを助けた。キツネは恩返しのために若い女（葛の葉狐）に化けて現れ保名の妻となり、二人の間には男の子が生まれる。しかしあるときキツネの正体が子にばれてしまい、「恋しくば訪ね来てみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」と書き残して森に去っていく。キツネは追ってきた父子に黄金の箱（竜宮の秘符）と水晶の玉（鳥獣の声が理解できる呪具）を与えており、子はこれらの道具を駆使して高名な天文博士（陰陽師）に成長、末代まで栄えた。

狐女房型説話はこのように、キツネの母が子の前から去る「子別れ」なくしては成立しない。中国の狐狸には見られない特徴である。これについて吉野は以下のように述べている。

狐の生態の中で、もっとも人の心に訴えるものは、初秋の候におけるこの「子別れの儀式」であったろう。人は限りない哀愁を、母と子のこの別れの中に見るの

である。〔中略〕人の目からみればそれはいかにも殊勝で物悲しく、昔の日本人の表現に従えば「畜生ながら健気なこと」と見なされ、心情に迫ってくるものとして受けとめられたのである。(11-12 頁)

日本のキツネは中国の狐狸のように人間の女性に化けて男性を誘惑した。けれどその一方、キツネにとっては種族維持の本能に従っているに過ぎないことに対して、昔の日本人たちは感情を移入した。結果として日本では、母と幼子の胸を裂くような悲しい子別れの物語が生み出され、それらは動物の枠を越えた人間臭ささえ感じさせるのだ。

けれど時として、日本のキツネも狐狸らしく振る舞った。子を想う母の姿からは一転して、人間に憑依して病気にしたり、死に至らしめたりする凶悪な妖怪となるのである。明確な悪意あるいは嘲弄をもって人間を化かすキツネの話は平安時代末期の説話集『今昔物語集』巻 27 に多く見られるのだが、そのうち第 40 話「狐人に託きて取られし玉を乞い返して恩を報ずる語」(人に憑いたキツネが取り上げられた玉を返してもらい恩返しをする話)はキツネ憑きの話である。ここでは物の怪に取り憑かれて病気になった人がいて、巫女に祈ってもらったところキツネの仕業であることが判明している。

悪名高いキツネといえば、なんといっても「玉藻前」だろう。室町時代以降の御伽草子『玉藻の草子』や能「殺生石」、近世以降には浮世絵などの題材としても人気を博した。どのような物語か見てみよう。

1154 年(久寿元年)、鳥羽上皇の前に絶世の美女「玉藻前」が現れる。院は見目麗しく才能にも溢れた彼女を寵愛するが、次第に体調を崩してしまう。治療のために招かれた陰陽師の安倍泰成が占ったところ、玉藻前の正体がキツネであることが発覚し、逃げたキツネは激闘の末に上野国の那須野原で退治された。キツネの怨念が殺生石となって残った。

作中では玉藻前の正体は中国から渡ってきたキツネの妖怪であるとされている。そのキツネというのが明代に成立した神怪小説『封神演義』に登場する「妲己」で、狐狸像の集大成ともいえる存在だ。この妲己というのはもともと妖怪ではなく、冀州侯蘇護の娘だった。しかし「千年狐狸の精」というキツネの妖怪がこの妲己の魂を奪って成りすまし、紀元前 11 世紀末頃、殷の紂王の寵妃となって王を誘惑し、国を傾けたという。

二階堂(2003)は実在した妲己が狐狸と同一視された理由として、『史記』殷本紀などに見える紂王の悪行は、妲己がそそのかしたものとされ、その残虐さが“人間ではない”と思われたから」としている。確かに妲己の項を『中国文化史大辞典』で引くと、「紂王は〔愛する妲己の〕その言葉をすべて聞き入れ、酒池肉林などの享楽に耽るとともに、重税や炮烙の刑などの悪政を繰り広げた」とあり、そんな妲己の亡国の美女ぶりが男性をたぶらかす狐狸のイメージと結びつけられたのだろう。この妲己伝説はのちに日本へ伝わり、玉藻前伝説という妖怪退治の物語へと独自の発展を遂げるわけである。ちなみに玉藻前の怨念の結晶だという殺生石は現在も栃木県那須野にあり、周辺では火山性の有毒ガスがた

えず噴き出している。松尾芭蕉はその様子を『奥の細道』のなかで「殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒気いまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ、真砂まきごの色の見えぬほどかさなり死す」と記している。また、玉藻前の正体を看破した安倍泰成は安倍晴明の子孫であり、作者が意図したかは不明だが、安倍一族とキツネの因縁は根強いようである。

3. 狐狸から分離した「狸」：日本のタヌキ像

狐狸像が伝来したとき、当時の日本人は「狐」と「狸」を分離させ、女性的な性格を前者に、男性的な性格を後者に与えた。こうして日本においてキツネとタヌキが「人を化かす動物」の双璧をなすようになるのだが、日本のタヌキは「狸」が本来意味するところの中国のヤマネコほど神秘的で恐ろしいイメージを持ち合わせていなかった。タヌキに対して間抜けでユーモラスな性格を与えたのは、まったくの日本人の独創なのである。

キツネがはっきりと人間の女性に化けてみせた説話が仏教伝来後に現れるのとほぼ同時期に、タヌキが人に化けてみせた現象が『日本書紀』巻22に確認できる。

三十五年春二月、陸奥国有貉化人以歌之。

(三十五年の春二月に、陸奥国に貉有りて人に化りて歌うたふ)

627年(推古35年)、陸奥国に現れた「貉」が人に化けて歌をうたったという。下線部について、平安時代中期の漢和辞書『倭名類聚抄』20巻本「貉」の項には「説文云、貉、漢語抄云、無之奈、似狐而善睡者也」とあるから、「貉」の字に「むじな」の音を当てていたことがわかる。この頃にはまだ「たぬき」の語がない上に、タヌキによく似たアナグマなどの生き物と明確に区別されておらず、まとめて「むじな」と呼んでいたようである。

タヌキはそのちも平安時代の『日本霊異記』『今昔物語集』、鎌倉時代の『宇治拾遺物語』『平家物語』などに度々現れるが、稻荷信仰やキツネ憑きなどでなにかと注目されていたキツネほど脚光は浴びなかった。近世以前のタヌキは、人間を化かす動物というよりも、姿の見えない音の怪の正体の説明に用いられることが多かったようである。木を鋸で切る音、木が倒れる音、太鼓やお囃子の音、小豆を洗う音など、耳には聞こえるけれどその場所に行ってみても痕跡がない怪異はもっぱらタヌキの仕業にされた。おそらく、はっきりとした姿に化けて人間を誑かす行為はキツネの専売特許だったのである。ビジュアルな化け方で人の目を欺くのがキツネなら、タヌキは人の耳を欺いていたといえるだろう。

ただし四国ではその限りではない。四国全域、とりわけ阿波(徳島)にはタヌキ話が非常に多く、むしろキツネの影は驚くほど薄い。だから人を化かすのはもっぱらタヌキなのである。例えば高畑勲監督のアニメーション映画「平成狸合戦ぽんぽこ」(1994)に登場する無数のタヌキのうち、三匹の長老(太三郎禿狸・隠神刑部・六代目金長)はいずれも四

国に伝わる有名なタヌキたちだ。キツネ憑きの話も四国ではあまり見られず、同種 of 精神異常を説明する手段としてタヌキ憑き（ムジナ憑き）がある。井上（1980）は四国にタヌキ話が多い理由として、四国出身の弘法大師（空海）の言い伝えを挙げている。曰く、四国のキツネがあまりにも人間にいたずらをするので、弘法大師がキツネを四国から追い出したのだという。現実にはキツネも生息しているのだが、民間伝承の世界ではタヌキが四国の王様なのである。

キツネほど取りざたされることのなかったタヌキが、キツネと並んで「人を化かす動物」と認識されるようになるのは江戸時代以降だ。町人文化の隆盛のなかで、お世辞にもキツネほど利口だとも優美だとも言えないタヌキはその肥満体の印象から、戯作者たちの手によってその滑稽さを増して人びとの日常の中に溶け込んでいく。タヌキが巨大な陰囊と大福帳を持っていたり、腹鼓を打つようになったり、「狸爺」や「一つ穴のむじな」といった言葉が生まれたりしたのもこの時期だ。現代に至るタヌキ話の多くは、このイメージに基づいて成立している。

タヌキが登場する代表作といえば『文福茶釜』が挙げられる。現代では、貧しい男に命を救われたタヌキが茶釜に化けて、綱渡りの見世物で儲けて男に恩返しをする動物報恩譚として一般に知られているが、これは江戸時代の赤本『文福茶釜』を童話化したものである。「ぶんぶく」とは茶釜の湯が沸く音だとも、「分福」と書いて「福を分ける」意ともいわれている。『日本民俗大辞典』によると、もともとは「男が狐（狸・貉）を助けると、狐は茶釜・遊女・馬などに化け、売られて男に金もうけをさせる」話であったのが、早くから笑話化し、「狸が茶釜に化けたが毛が生えて正体を現すという話となり、元禄年間（1688-1704）から〈文福茶釜に毛が生えた〉という諺が流行し、浄瑠璃『双生隅田川』（1720）や享保年間（1716-36）の赤本『文福茶釜』をはじめ、諺書・俳書・黄表紙・咄本などで広く知られた」という。この昔話は特定の茶釜を宝物とする寺院では茶釜の由来譚にもなり、いくつか語り継がれているもののなかでは群馬県茂林寺に伝わる話が有名だ。次は茂林寺の公式ホームページに記載された内容をまとめたものである。

1570年（元亀元年）、大規模な法会の際に大勢の来客をもてなす茶釜が必要となり困っていたところ、和尚の守鶴が一晚のうちにどこからか不思議な茶釜を持ってきた。いくら湯を汲んでも尽きることがないその茶釜を守鶴は福を分け与える「紫金銅分福茶釜」と名付けた。その後、守鶴はタヌキの姿でいびき高らかに眠っているところを発見され、正体が露見したタヌキは去っていった。

江戸時代には草双紙の刊行によって庶民層にまで出版物が行き渡ることになる。初期の草双紙は赤本とも呼ばれ、お伽噺を中心とした子ども向けの絵本として親しまれた。わかりやすくユーモラスにデフォルメされた動物の姿は子どもたちを惹きつける。茶釜に化けているのがタヌキだと一目でわかるように、茶釜にはタヌキの顔や手足が描かれ、また傘を手に綱渡りを披露してみせるようになったのではなかろうか。

中国の狐狸から分離した際に男性的な性格を与えられながら、タヌキが「人間の男性に化けて女性を襲う」というイメージを持つことはなかった。キツネのように人間と結婚して子を成したり、人を食い殺したりといった危害を及ぼすことはほとんどしない。どこか愛嬌のある見た目をしたタヌキはむしろ、性別にとらわれず人をアッと驚かせることに重点を置き、大入道などの化け物や道具にすら化けてみせるようになるのだ。

そういったタヌキの化かし方の性質を踏まえると、悪いタヌキに婆が殺されてしまう『かちかち山』は例外というべきだろう。その場面に限って言えば、婆を殺すタヌキの姿はどこか化け猫を彷彿とさせ、「狸」という名には依然として中国的なヤマネコの要素が含まれている。日本五大昔話のひとつとして現代に伝えられる『かちかち山』は、畑仕事の邪魔をするタヌキを爺が生け捕りにして家へ持ち帰るところから始まる。タヌキは爺が留守の間に婆をだまして殺し、挙句には婆汁を作って爺に食べさせてしまう。事実を知って悲しむ爺のために心優しいウサギが敵討ちを決意する。その方法は三通りあり、まず柴刈りに行ってタヌキに火傷を負わせ、次に薬売りに扮して唐辛子入りの薬を傷口に塗って苦しみ、最後に魚釣りに誘ってタヌキの泥舟を沈める、という徹底ぶりである。室町時代には原型が成立していたとされている。

このタヌキ話は、ウサギがタヌキを繰り返しやっつけるところが痛快な一方で、婆の人肉を食べてしまうという場面が気味悪さを伴う。そしてなによりタヌキの性格が一貫していない。トリモチの罠にかかってまんまと捕まる間抜けなタヌキ、かと思えば途端に悪賢くなって婆を騙し挙句にタヌキ汁と偽って爺に婆汁を食べさせる残忍なタヌキ、そして子どものような好奇心でウサギに騙され成敗される哀れなタヌキ、というようにタヌキのキャラクターが二転三転とする。これについて柳田國男は著書『昔話と文学』のなかで、『かちかち山』が別々の三つの話を繋ぎ合わせて作られていると指摘した。第一部では豊作祈願の呪詞を唱えながら種蒔きをする爺に対して、タヌキが呪詞を言い換えてひやかす悪者を演じているから、農耕儀礼に深く関わっているとされる。第二部のカニバリズム的表現は日本人の思想に合わないことから、原型は中国・晋代の怪奇小説集『搜神記』ではあるまいかといわれており、ヤマネコに騙された二人の子どもが父親を殴り殺してしまう話に共通点がみられる。第三部になると唐突にウサギが主人公となって敵討ちをするわけだが、各地に伝わる「ウサギとクマ（サル）」がベースになっていると思われる。この類型ではウサギがクマやサルを徹底的に懲らしめるのだが、あまりにも唐突すぎるので第一部と第二部の動機を加えて勧善懲悪の話にまとめたのであろう。あるいは井上の言うように、第一部・第二部で終わってしまっただけではあまりにも悲惨であるから、「幼い聴衆の失望を慰むべく、爺が泣いているところに兎が訪ねて来て仇討ちを約束」したのかもしれない。

厳しい身分統制によって徳川幕府の権力を維持した江戸時代では、藩校や寺子屋で目上の者や権力を持つ者を敬うよう教育がなされた。その中で、目上の者に害をなす悪者は徹底的に罰せられなければならないという勧善懲悪、ならびに質素儉約の話が好まれるよう

になってくる。『桃太郎』や『花咲爺』などの日本五大昔話もその例に漏れない。『かちかち山』についてはウサギに懲らしめられるタヌキに子どもたちが同情を寄せることがないよう、火傷を負う場面などを省いたものも存在する。また、現代的な倫理観から、タヌキが婆を殴り殺したり、タヌキがウサギに殺されたりする場面は残忍であるとして、そういった場面を省いたり改変したりして出版されているものも少なくない。

『文福茶釜』や『かちかち山』を含め、タヌキにまつわる伝承や説話は江戸時代の間大きく変化し、豊かな町人文化のなかで道具や妖怪に化けて滑稽味を増していったのだ。

おわりに

本論文では、なぜキツネとタヌキは日本人を化かしたのか、また両者の化かし方の違いはなにかについて、まず動物としての特徴や生態を整理したのちに、民俗学および古典を参照して比較しつつ考察してきた。

まずキツネとタヌキが人を化かすようになった経緯について、もともと人を化かしていたのは中国のキツネであるところの狐狸だったことが判明した。この狐狸は男女両性の淫獣だったが、次第に中国の陰陽五行思想の影響を受けて「陰＝女性」の性質を強く帯びるようになってくる。陰陽のバランスを保つために「陽＝男性」を求めるとされた狐狸は「人間の女性に化けて男性をたぶらかす存在」としてのイメージを構築し、このイメージが仏教・儒教とともに日本に流入した。けれどここで日本人が「狐狸」を「(女性的な)狐」と「(男性的な)狸」に分離させ、「狸」の性質をタヌキに与えてしまったために、日本においてキツネとタヌキが人を化かす動物の双璧をなすようになってしまった。したがって、タヌキが化けるようになったのはまったくの日本人の独創だったのである。

次いで化かし方の比較だが、日本のキツネは中国の狐狸のイメージの影響を受けて、もっぱら美女に化けるものとされた。狐狸由来の人間の男性を誘惑する狡猾さを持ちながらも、昔の日本人によって捉えられたキツネの生態とそれに対する日本人の情緒を受けて、日本独特の哀愁を帯びた狐女房型説話が生み出されていくことになる。対するタヌキは、狐狸から分離した際に男性としての性質を分け与えられたが、馴染み深く愛嬌のある見た目から「人間の男性に化けて女性を襲う」というイメージは定着しなかった。そのかわり、性別や美しさにとらわれず、人をアッと驚かせるために妖怪や道具にすら化けるようになる。利口なキツネと違って間抜けな役を演じることが多いのも、タヌキにまつわる物語が爆発的に増えた江戸町民の風刺文化の影響が大きいのではないかという結論に至った。

今回の研究によって、日本のキツネとタヌキは、その生態から把握された特異性を下敷きにして、同時に中国の文献や思想の影響を受けながら、独自の発展を遂げてきたことが明らかとなった。古来より日本人を化かしてきたキツネとタヌキは、中国の狐狸に共通のルーツを持つ、いわば双子のような存在だったのである。昔の日本人たちがこのような両

者の関係性を把握していたのかは定かではない。けれど彼らが生み出し語り継いできたキツネとタヌキにまつわる物語は、現代においてもなお私たち日本人の感性を刺激し、どこか懐かしさすら覚えさせてくれるのだ。

参考文献・ウェブサイト

井上友治『狸と日本人』、黎明書房、1980年。

尾崎雄二郎、笠沙雅章、戸川芳郎編『中国文化史大辞典』、大修館書店、2013年。

工藤寛正『完全版おくのほそ道探訪事典：「随行日記」で歩く全行程』、東京堂出版、2011年。

小島憲之、他校注・訳『日本書紀2』、小学館、1996年。

小松和彦『異界と日本人』、角川ソフィア文庫、2015年。

下中直人編「キツネ」『世界大百科事典7 キセ - キン』、平凡社、1988年。

下中直人編「タヌキ」『世界大百科事典17 タイス - チキヨ』、平凡社、1988年。

諏訪春雄『靈魂の文化誌：神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究』、勉誠出版、2010年。

田中祝夫校注・訳『日本靈異記』、小学館、1995年。

段成式（今村与志雄訳注）『酉陽雜俎3』、東洋文庫、1981年。

二階堂善弘『中国妖怪伝：怪しきものたちの系譜』、平凡社新書、2003年。

福田アジオ、他編「文福茶釜」『日本民俗大辞典 下』、吉川弘文館、2000年。

馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語集4』、小学館、2002年。

柳田國男『昔話と文学』、角川学芸出版、1971年。

吉野裕子『狐：陰陽五行と稲荷信仰』、法政大学出版局、1980年。

魯迅「古小説鈎沈（下巻）」『魯迅三十年集』、新藝出版社、1970年。

<http://www7.plala.or.jp/morin/chagama.html>（「文福茶釜と茂林寺」曹洞宗茂林寺、2017年1月26日閲覧）

Jファッションと日本人

—ロリータから原宿系までにみる日本人の「カワイイ」と独創性—

J Fashion and Japanese

—Japanese's concept *KAWAII* and its originality seen from
Lolita Fashion to Harajuku Style Fashion—

明治大学 国際日本学部

周 晞彤

Meiji University School of Global Japanese Studies
CHAU, Haytung

目次

- I 序章 日本におけるカワイイ文化
 - II ロリータたちからみた永遠に未成熟を求める考え方
 - 1. 日本人とロリータファッション
 - 2. 未成熟とは
 - 3. ロリータたちのゴールとはなにか
 - 4. 世界のロリータたちと未成熟
 - III 原宿系ファッション（青文字系）からみた日本人の独創性
 - 1. 原宿系とカワイイ文化
 - 2. 原宿系ファッションが日本に与えた影響
 - 3. 誰のためのカワイイ
 - IV 制服文化からみた日本人の個性と発想力
 - 1. ファッションと制服
 - 2. 無個性と言われる日本人
 - 3. 海外からみた制服文化
 - V 結論 カワイイ文化の再発見
- 参考文献

I 序章—日本におけるカワイイ文化

今日、日本の多彩なファッションスタイルは国内だけではなく海外の多くの人々を魅了していることから、ファッション大国とも呼ばれている。なかでも、東京の原宿や渋谷など若者を中心に流行っている日本発のストリートファッションはJファッションの一種として名が知られている。世界中で人気を集めている、写真を加工したりSNSで共有できるスマートフォンアプリケーションのインスタグラム（Instagram）でJファッション（#jfashion）を検索してみると、二十万件以上の写真が登録されており、世界中の人々からコスプレの写真や日本のキャラクター、原宿系ファッションの写真が見られる。すべての写真も日本特有のカワイイ要素があり、多様な種類の写真が混ざり合っている。

さらに、このようなカワイイファッションやJファッションは、ただ単に若者の間に流行っているだけではなく、2009年に外務省は、通称「カワイイ大使」と呼ばれるポップカルチャー発信使を3人の女性モデルに任命した。彼女たちはそれぞれロリータファッション界のカリスマの青木美沙子や、原宿系ファッションリーダーの木村優、ブランド制服ショップ「CONOMI」のアドバイザーの藤岡静香の3人である。⁽¹⁾彼女たちはカワイイ大使として活動している間、日本だけではなく海外の多くのファッション交流イベントに参加し、日本のポップカルチャーとファッション文化を発信していた。カワイイ大使の任期は2010年3月31日をもって満了したが、彼女たちは今も日本の文化を広げるためにさまざまな活動を計画し、活動している。

このような日本のカワイイ文化を代表するJファッションは今世界中で注目されているが、一体このような日本発のファッションはなぜ他の国ではなく、日本で生まれたのか。そこには日本人の国民性や独創性などが大きく関係しているのではないだろうか。その観点から、筆者は日本発のJファッションと日本人の国民性や独創性について考察したい。前述したように、外務省はロリータファッションや原宿系ファッション、制服系ファッションの3つのファッションを代表したモデルをカワイイ大使として任命した。つまり、この3種類のファッションは、Jファッションのなかでも、日本のポップカルチャーの代表的存在としてみなされ、事実、海外でも高い人気を誇っている。よって本論では、主にこの3種類のJファッションに着目し、

(1) 外務省 「ポップカルチャー発信使（ファッション分野）の委嘱」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/koryu/pop/kawaii/>（2016年12月15日 アクセス）

日本人の国民性や独創性に関して論じていきたいと考えている。さらに、筆者が考えた現代におけるカワイイという言葉についての使い方は、単に幼いものに対しての褒め言葉だけでなく、さまざまな場面で使われるようになった。その理由や意味についても解明したいと考えている。

II ロリータたちからみた永遠に未成熟を求める考え方

1. 日本人とロリータファッション

日本文化は今や世界的にも知られ、伝統文化はもちろん、ポップカルチャーやファッション文化などもその重要な位置を占めている。また、多くの日本語はそのままローマ字で世界中の辞書にも掲載されている通りである。なかでも、世界で最も使われている日本語は「KAWAII」ではないかと筆者は考えている。特に、日本のファッションは海外のファッションより可愛らしさのある要素を多く取り入れられ、外国人からみるとコスプレまたはパーティに行く格好ではないかと勘違いされるケースもある。多彩なJファッションの中でカワイイカルチャーと言えばロリータファッションに連想する人も少なくないだろう。但し、本当にカワイイ要素があったらロリータファッションと言えるのか。ロリータファッションをしているロリータたちは何を求めているのか。また、ロリータファッションは日本人の性格や特性とどんな接点があるのかをこの章の中で明らかにしたい。

まず、ロリータやゴスロリ（ゴシックロリータの略称）と聞くと、大きなカチューシャをつけ、大量なフリルとレースを使ったブラウスやスカートを着用している女性のイメージがあるかもしれないが、実はロリータファッションの中でもさまざまな種類があり、服装のイメージやテーマもそれぞれ異なる。但し、ひとつだけ共通しているのはロリータファッションやゴシックロリータファッションを着ている女性たちは少女らしさを大切にしていることである。つまり、松浦（2007）によれば、ロリータファッションは少女的な志向のストリートファッションであり、「ロリータ」というのは着用している服装だけではなく、自分を示すアイデンティティをさす言葉でもある。⁽²⁾ ロリータファッションは今日本発のストリートファッションの一つとして知られていて、海外でもオリジナルのロリータファッションを生産している会社も増

(2) 松浦桃（2007）『セカイと私とロリータファッション』青弓社 p.9

えている。但し、一体なぜロリータファッションは他の国ではなく、日本で生まれたのか。筆者は日本人の「未成熟」を求める特性や日本の社会や文化と関係しているのではないかと推測している。

2. 未成熟とは

というのも、ロリータファッションはよく「大人の少女服」と形容されている。また、ロリータファッションを着ているロリータたちは外見だけ「少女」としてみられていけばいいのではなく、中身も「少女」としての精神を大切にしている。ロリータファッションは日本発のファッションだが、中世のヨーロッパの少女服と婦人服や18世紀のフランスのロココ時代の様式を参考にしたものである。但し、欧米などでは、このようなイメージをもつファッションは日本ほど支持されていない。一部の国ではこのような目立つファッションを着ているだけで軽蔑されたり、危険な目にあう可能性もある。支持されていない理由の一つとして、海外の多くの国では青少年は早く成熟した大人になって、一人前として認められるこそが理想とされるからである。但し、ロリータファッションの精神とは正反対であり、大人になってもフリルがたくさんついた洋服を着て、少女がもっているとされる「未成熟」の心を持っているこそが重要だと思われる。ロリータたちは、そこにある種の純真さを見出しているのかもしれない。同様に、実は、ロリータファッションだけではなく、日本のさまざまな文化からでも未成熟を尊ぶ文化がみられる。例えば、欧米のアイドルたちは一日も早く歌もダンスも上手になって、高いパフォーマンススキルの付いた歌手になるのが目標だが、日本のアイドルたちは未成熟を一つの売りとして、ファンから支持を得ている。このような未成熟を求める文化は日本でしかみられないのか。それに、なぜ日本人は未成熟を求めているのか。現在、日本のACG文化（アニメ、コミック、ゲーム）の流行や日本政府が積極的に“クールジャパン”を宣伝しているなか、日本人は未成熟な文化を楽しんでいるという概念を持っている外国人も少なくない。特に、今流行しているカワイイ文化がそれを象徴している。しかし、一般的に、欧米などの国では成熟を尊ぶ傾向があるのに対し、なぜ日本では未成熟を尊ぶ傾向にあるのだろうか。もちろん、人はそれぞれの考えがあり、成熟と未成熟への認識や捉え方に関してもそれぞれであろう。但し、一般的な考えはどうか、筆者は日本という国はカワイイが溢れていると毎日実感している。筆者は香港出身で、4年前から東京に留学しに来た。留学する前から一定の日本語を習得したが、特に「カワイイ」という単語の使い方に迷っていた。香港でも「可愛（ホーオイ）」とい

う単語があり、日本語と同じ小さいもの、子供や小動物に対して使うことが多い。もちろん、「KAWAII」という日本から来た単語も流行っているなか、日本製のキャラクター商品や日本の特色を持ったものに対して「KAWAII」を使う人も多数いる。但し、日本での留学生生活を始めたと同時に、カワイイという単語を聞かない日は一日もなかった。通学の途中、駅で女子高校生が「この新しい自販機かわいくない?」、電車の中で見た「カワイイ系自動車」の広告や大学の食堂で髪を切った身長 170 センチを超えた男子学生が女子学生に「その髪型めっちゃかわいいよ!めっちゃ似合う!」と言われるなど、「カワイイ」は日常の中で溢れている。本当にカワイイを使わないと他に適している形容詞がないのかを考える時期もあった。例えば、自動販売機についてはカワイイのではなく「便利である」とか、女性をターゲットにした自動車は「コンパクト」を使い、髪を切った男性には「カッコいい」を使った方が適しているのではないかと思われる。それは、もし香港で男性に対してカワイイと褒めても、相手は子供っぽいという言葉として理解し、失礼な発言にもなり得るからだ。それでは、なぜ日本人はかくも日常的カワイイを口にするのだろうか。

その後、日本での4年間の生活の中で筆者が発見したのは、多くの人が口にする「カワイイ」とは、もちろん賞賛しているカワイイの意味合いもあるが、特に意味を持っていないカワイイもあることがわかった。つまり、カワイイは「はい」、「わかった」、「知っている」などの意味が含まれている時もあるではないか。例えば、この前レストランで二人の女子高校生の会話が耳に入った。一人の女子生徒は「このアイドルグループの新しいPVみた?」の質問に対して、もう一人の女子生徒は「うん、それかわいいよね。でも私そういうタイプ嫌い。」という返事をした。このように、女子生徒が使ったカワイイは好きなものに対する賞賛ではなく、あくまで相手の発言を理解していることを示す相槌のような機能性も含まれていると考えられる。

また、半年前、同じく日本で留学中の香港の男性友人からカワイイに関する悩み相談をされた。彼は日本人の彼女と出かけた時、彼女がある腕時計に対して「見て!この腕時計かわいいよね。私に似合う?」と言った。彼は彼女がその腕時計が欲しいというメッセージを感じ、後日その腕時計を彼女にプレゼントしたが、彼女は感謝したけど別に欲しいとは言っていないと彼に伝えた。彼の言葉によると香港で付き合っていた女性だと、彼氏に向けて言うカワイイ=欲しいなはずなのに、日本女性のカワイイは本当に理解しにくいと今も悩んでいる。このよう

に、カワイイを使うのは相手に感想を伝えるためだけではなく、特定なものに対してカワイイと感じる自分もカワイイだと思われたい状況もある。先の例の彼女のように、特に欲しくない腕時計に対してカワイイと言ったのはこの腕時計をカワイイと感じる自分はセンスがあるところのカワイイ腕時計はカワイイ自分に似合っているという意味も含まれているではないか。

このように、日本人はカワイイものに対してのセンスとカワイイという言葉を通じて、自分の未成熟さを示す場合も多くみられる。四方田（2006）によると、未成熟を示すことは自分は無害であることを示すことと関係している。無害である自分に対して隣人は警戒を解き、互いに未成熟さと幼稚さを共有している組織が今の日本である。⁽³⁾つまり、未成熟は単なる自己表現ではなく、社会の一員として溶け込む一手段と言っても過言ではないだろう。

3. ロリータたちのゴールとはなにか

服装は身体の延長で、機能性を持っていると言われる。服装そのものの基本的機能としては、環境や天気から体を守ることである。同様に、ファッションにも必ず機能性がついていると考えられる。よくファッション雑誌の表紙から「着まわして勝ちに行く」、「大人シンプルな着かた」や「自分らしさをだそう」など、明確した目標があり、その目標を達成するためにどのようなファッションをすればいいとファッション雑誌はいつもさまざまなアイディアを提供している。また、ファッションを通じて自分の個性を表現するのもファッションの機能の一つだと考えられる。例えば、男子にモテたい女子には、ゆるふわファッションが流行っているのと同じ、ロリータファッションをしているロリータたちもロリータファッションを楽しめると同時に何かを追求しているのではないか。松浦（2007）によると、ロリータファッションがあらわれたのは1970年代であり、その時代では、まだ一般的に世間からそれがどのようなファッションスタイルであるか知られてはいなかった。但し、1980年代になって、初めてファッション誌に掲載された記事のタイトルは「ロリータファッション批判」という記事だった（1987年9月号、流行通信）。内容はある一定の年齢を超えた女性が少女のような服装や振る舞いをしてることを批判している。⁽⁴⁾ 今のように、ロリータファッションがファッションの一つの

(3) 四方田彦彦（2006）『「かわいい」論』筑摩書房 p.123

(4) 松浦（2007）、前掲、p.30-34

テゴリーとして定着したのは1990年代のことである。もともと、ロリータファッションのロリータはウラジーミル・ナボコフ (Vladimir Nabokov) の『ロリータ』から来ていた。しかし、ロリータという言葉が日本で普及したきっかけは1988年の宮崎勤による連続幼女誘拐殺人事件だった。この事件で浮き彫りとなった小児性的傾向はメディアから「ロリータコンプレックス」として大きく取り上げられた。このように、ロリータという言葉は幼女や少女に対して性的な見方を持つ言葉としてとらえられ、偏見を帯びた言葉となった。但し、一部の女性が違う見方からみるとロリータは少女である魅力を発揮し、一般のファッションではみられない少女のような可愛さ、清楚さを表現している。

ファッションは自己表現の一種で、服を着なければならない社会のなかでファッションは自分の個性やメッセージを出す最も直接的な方法だと筆者は考えている。ロリータファッションはコスプレとは違って、誰かになるのではなく、ファッションとして自分を表現する服装である。もちろん、ロリータファッションは日常離れした、過剰な装飾だと感じられるため、学校や仕事で着るのは難しく、休日だけロリータファッションを楽しむロリータも少なくない。ロリータファッションの種類や、ロリータとしても、その過ごし方は人それぞれであるが、彼女たちは自分の目標やメッセージを強く持っていることのあらわれでもあると考えられるのではなかろうか。

4. 世界のロリータたちと未成熟

日本には「日本人離れ」という褒め言葉がある。よく聴くのは「日本人離れしている顔だろ」、つまり顔の輪郭が濃い、美形という意味が含まれている。香港では「香港人離れ」という言葉はないが、「〇〇人に似ている」という言葉の使い方はある。例えば、性格がアメリカ人に似ているといえ、性格が自由奔放という意味である。外見が日本人に似ていると言われると外見が可愛らしい意味があり、若い女性の間では褒め言葉だか、なかにはこどもっぽいという意味も含まれている可能性もある。クールジャパンの普及とジャパン・カルチャー・フェスティバルのように、日本文化が今では海外でもイベントが行われるようになり、海外にいても日本文化に簡単に触れることができるようになった。ロリータファッションの文化も同じく、有名ロリータファッションブランドも海外展開をし、日本ロリータ協会も海外向けのイベントやトークショーを多く開催している。前述したように、多くの日本女性は少女らしさを追求し、ロ

リータファッションで自己表現をしている人が多いが、海外のロリータは一体どのような理由でロリータファッションをしているのか、また海外でのロリータファッションはどのようにみられているのか。

フランスはヨーロッパのなかでも一番カワイイカルチャーに影響され、日本のポップカルチャーがもっとも認知されている国と言っても過言ではないだろう。⁽⁵⁾ ジャパン・エキスポは日本のさまざまな伝統文化やポップカルチャーを融合し、フランス人の手から開催されたイベントである。2000年から開催されたジャパン・エキスポは、今年で16回目に突入する。参加者は最初に数千人程度から現在では二十万人程度を超えた有名なイベントとなった。参加者だけ増加しているだけではなく、日本からイベントに参加するゲストも漫画家や有名コスプレイヤー、歌手、ロックバンドなどさまざまなジャンルの人々が参加している。桜井(2009)によると、ジャパン・エキスポの会場の中では「原宿系ファッション」を着ている女子が多数いた。しかも、単なる「原宿系ファッション」ではなく、アニメのような二次元の文化とファッションが混じりあったものであった。つまり、原宿と秋葉原の文化は、パリで融合したのではないかという状況になっている。⁽⁶⁾

フランスはファッション大国だというイメージを多くの日本人は抱いているが、フランス人からみるとフランスのファッションは「みんな同じ」という意見もあった。確かに、筆者からみても日本のファッションは多様性に溢れており、社会でさまざまなファッションスタイルが流行っていても、東京ではみんなと同じスタイルになるのではなく、「自分」を持っている人が多いと思う。この数年、香港に帰国するたびに実感していることは、香港では多くの若い人のファッションや髪型が同じに見え、男性は髪を両サイドを刈り、女性は韓国風

(5) フランスにおける日本のファッションの伝播についてはKyoko Koma, “Globalization or orientalism? Japanese Aestheticism through French influenced Japanese Fashion,” in *Japan and Europe in Global Communication*, 2014, pp. 266-280、並びに、高馬京子(2013)「カワイイ/kawaii: 成熟と未成熟の間で」『アリーナ=ARENA』中部大学国際人間学研究所、16号、p. 427-431 参照

(6) 桜井孝昌(2009)、前掲、p. 141『世界カワイイ革命 なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』PHP 研究所 p. 15-18

スタイルのファッションを着る人が街中に溢れている点である。桜井（2009）は著書の中で、あるフランス人のロリータにインタビューすると、彼女からも今の女性フランス人はみんな同じに見えて、逆に日本のロリータファッションは一種の文化のように、自分のテーマを持っているのですばらしいとのことだった。⁽⁷⁾つまり、海外でロリータファッションをしている女性はみなと同じ格好をするのが嫌で、ロリータファッションの多様さとテーマ性に魅力を感じた人も少なくない。

このように、ロリータカルチャーは現在単なるファッションの一種として捉えられるだけではなく、代表的なJファッションとして文化外交の手段とさえ認識されているといっても過言ではない。ロリータファッションに対しての偏見を持つ日本人も多数いるであろうが、ロリータファッションも多くの文化と同じ、現代日本文化を象徴するテーマ性とメッセージ性を秘めたものであることは確かだろう。

Ⅲ 原宿系ファッション（青文字系）からみた日本人の独創性

1. 原宿系ファッションとカワイイ文化

原宿系ファッションの一般的なイメージは全身色鮮やかなファッションを身に纏い、派手な髪色と髪型、濃いメイクをしている人に連想する人が多いかもしれないが、実は原宿系ファッションのなかでもさまざまなジャンルがあり、テーマがある。但し、原宿系ファッションの愛好者たちが共通していることは自分の個性を大事にすることと周囲の目や環境に妥協しないことである。日本はさまざまなファッションスタイルを世界中に発信しており、例えば、90年代には渋谷系（赤文字系）が最も流行、若者たちにとって渋谷はファッションの聖地と化したと言っても過言ではないのだが、現在では赤文字系だけではなく、青文字系、つまり原宿系のファッションも若者の中でブームになり、原宿を中心に多くのファッションブランドが展開している。原宿系ファッションを扱うファッション誌『Zipper』や『CUTiE』もよく個性をテーマとしてアピールしている。つまり、原宿系ファッションなかは個性的であり、周りの人と違う格

(7) 桜井（2009）、前掲、p. 66

好をするのが一般的だと思われ、かつ、そのなかでも着こなし、カワイイ、オリジナルなどのキーワードを大切にしているファッションである。

それでは原宿系とカワイイの関係とは一体何か。前章ではロリータたちはカワイイというテーマを大切にしている自分が思うカワイイを通じて自分のアイデンティティを示していることを論じた。もちろん、カワイイという言葉は小さいもの、幼いものに対する感情を表す以外、現在の若者にとって「理解している」のような相槌的な意味も含まれていると筆者は思う。但し、カワイイというのは一方通行の感情表現ではなく、思う時もあれば、思われたい時もある。筆者は前日某テレビ番組をみてそう実感した。その番組は司会者が2人と渋谷系ファッションと原宿系ファッションをそれぞれ代表する男女3人がいた。番組の内容とは関係のない話かもしれないが、香港出身の筆者にとってはとても不思議な感じがした。それは、地理的に渋谷と原宿の位置とても近いはずなのに、ファッションスタイルや性格の違いがあまりにも大きすぎて衝撃を受けたと言っても過言ではない。香港は小さい都市だが、その中もさまざまな街が分かれている。但し、このような隣の街とファッションや個性が違うのは聞いたことがないので、さすが日本はファッション大国と感心した。話を戻すと、番組の中では渋谷系ファッションと原宿系ファッションのどちらの方が人気で、優れているかを言い争う論点がいくつもあった。そのなかで、筆者が目指したいのは渋谷系のゲストたちは渋谷系ファッションの良さは自分の体のスタイル（ボディライン）を出し、相手に見せつけることで自信をつけるが、原宿系ファッションのゲストたちは自分の体に自信がないからこそ、露出するファッションを避けているとコメントしたことである。原宿系のゲストたちによると原宿系ファッションはカラフルで派手なイメージがあるかもしれないが、わざわざカラフルにしているのではなく、自分の格好をしているだけとコメントした。そこで、筆者が考えたのは原宿系ファッションのカワイイとは他人から思われるものではなく、自分らしさを全面的に出すことによって自分のことをカワイイと思うのではないか。櫻井 (2009) によると、20年前の女性ファッション雑誌では男目線（＝他人目線）で作られているものは自分目線のファッション雑誌より圧倒的に売れていた。⁽⁸⁾つまり、当時の日本人は自分の個性を出すためにファッションを着ているというより自分がどう思われたいか、他人の目線や評価を得るのためにファッションを着ていると言っても過言ではない。そのなかで、原宿系ファッションというのは自分らしさをアピールしたいという願望

(8) 櫻井 (2009) 、前掲、 p. 141-142

があり、その結果「一人」になっても構わない、相手のためにファッションを変えることはしないのが重要なことである。さまざまな「一人」がさまざまにファッションスタイルを表現し、生まれたのが現在の原宿系ファッションなのだ。要するに、原宿系ファッションはその多様性によって成立しているファッション文化なのである。特に櫻井（2009）が著書の中で使っていた「自分のファッションを変えてまでモテたくない」というサブタイトルこそ、その真髓を物語るものではなからうか。⁽⁹⁾

2. 原宿系ファッションが日本に与えた影響

原宿系ファッションは日本でも話題になり、中高生や二十代の若者を中心に人気を集めている。原宿系ファッションと言ってもさまざまなジャンルがあり、ルールに縛られずに自分らしさを出すことが一番重要なので、「自分目線」という単語も流行るようになった。そこで、筆者は若者を対象にしているファッション雑誌はどのような内容で読者の好みに合わせているかに注目したいと思う。屋葺（2012）によると、日本の女性向けのファッション雑誌はそれぞれのターゲットや嗜好も違うが、共通していることは「自分の視点/感覚」「同性からの視線」「異性からの視線」の3つの意識である。例えば、主婦向けの雑誌は「同性からの視線」が重視されており、十代の女性向けの雑誌だと「自分の視点/感覚」を大事にしている。⁽¹⁰⁾ 筆者は高校時代から日本のファッションがとても好きなので、留学する前から日本のファッション雑誌を愛読してきた。日本語教室が終わった毎週末には、必ず日本雑誌を扱う書店に行く時期があった。但し、毎回驚かされるのは日本のファッション雑誌が細かく分類化されていることである。香港のファッション雑誌ももちろん年齢層やターゲットによって分かれているが、主な対象は20代から40代の女性である。日本のような「自分の視点/感覚」「同性からの視線」「異性からの視線」3つの分け方に分かれていることはもちろんない。また、屋葺（2012）によると、このような状況は台湾のなかでも珍しくない。台湾は日本文化が好きな若者がとても多く、日本が大好きな若者は「哈日族（ハーリーズ）」と呼ばれている。よって台湾には日本のファッションが好きな若者も大勢いる。台湾も香港と同様に、日本に比べると雑誌の種類が少ない

(9) 櫻井（2009）、前掲、p. 141

(10) 屋葺素子 他（2012）

『ポップカルチャーとジェンダー 「セイフクファッションにみるジェンダー」』明石書店 p. 100-101

ため、台湾の若者が日本のファッション雑誌を通じて「自分のファッション感覚を信じる」という考え方を持つようになるのではないかと述べていた。⁽¹¹⁾ 雑誌によってターゲットや伝えたいメッセージも違うと思うが、原宿系ファッションを中心に扱う『KERA』や『ZIPPER』などは特に、自分を発信することの大事さをアピールしていると思われる。つまり、それはいかなるファッションを着ていても、自分の世界観を持つことがとても大切であるというメッセージであると筆者は考えている。事実として、今は世界中で有名になっている原宿系ファッション雑誌の読者モデル出身のきゃりーぱみゅぱみゅは、まさにその独自の世界観を体現したアーティストであり、彼女が自分の一番好きな格好をし、自分のファッションに対する熱意をもち、一貫した姿勢を持ち続けていることも、彼女が人気になった理由のひとつであるだろう。

近年ではファッション雑誌の販売部数が年々減少していて、前述した原宿系ファッションの発展に大きく貢献した『CUTiE』も2015年8月11日発売の9月号をもって休刊となった。但し、日本だけではなく、海外の多くの女性にとってファッション雑誌は成長する段階で不可欠なメディアのひとつと言ってもいいだろう。好きなファッションスタイルが違っていると読むファッション雑誌ももちろん違う。ファッション雑誌は、基本的に雑誌に合うスタイルのファッションを載せるだけではなく、そのスタイルに合ったモデルを起用することもとても重要である。1990年代には、原宿系ファッションと渋谷系ファッションの二つのスタイルも日本のカワイイファッションを代表する重要なファッションスタイルになり、この二つのスタイルを紹介するファッション雑誌『CanCam』と『CUTiE』も当時の若い世代の女性を中心にブームとなった。古賀(2009)では「『CanCam』における「かわいい」は、『CUTiE』とは対極的である。『CUTiE』の「かわいい」が、「わたしたちの」という「共感性」にあったのに対して、『CanCam』にとって「かわいい」とは異性に好かれるための絶対的価値であった。」と著書で述べていた。⁽¹²⁾ そこで、筆者が考えたのは、読者はファッション雑誌を購入するにあたり、必ず読者のもつ目的があるという点がある。もちろん、雑誌を買う理由は人それぞれで、好きなモデルやブランドが載っているからやコレクションとして集める人もいると思うが、一番の目的は雑誌のファッションスタイルやコーディネートを参考にしたり、真似することで自分の目的を達成させているのではないかと考える。すなわち、『CanCam』のコンセプトは異性にモテることを追求している。つ

(11) 屋草、前掲、p. 96 - 101

(12) 古賀令子(2009)『「かわいい」の帝国 モードとメディアと女の子たち』青土社、p131

まり、読者は『CanCam』が提案したファッションを着用することによって他人（異性）から肯定されれば、目標は達成される。『CUTiE』のコンセプトでは「わたしたちの」、つまり「自分」という対象をターゲットにするのは、他の人からの共感や称賛を得られることはできないかもしれないが、自分が思うカワイイを完成し、納得できることこそが、その目的を果たすことを意味しているのである。

原宿系ファッションは今若者を中心に流行っているが、一部の人にとっては奇抜で、理解しがたいファッションとして捉えられているかもしれない。筆者は、ファッションは自分をさらに良くする、自分をより自分が想像した形にできるものだと考えている。その点において、日本のような一つの地域の中でも複数のファッションスタイルが存在していることは、それすなわち、自己表現のありかたをめぐって、人々の豊かな想像力と独創性が存在していることを指し示しているのではなかろうか。

3. 誰のためのカワイイ

女性向けのファッション雑誌はよく「カワイイ」という言葉を表紙の一面に大きく使っている。ファッション雑誌だけではなく、「可愛くなれる方法」や「愛されメイク」、「モテ服」などをテーマにした本もよく書店やコンビニエンスストアで見かける。ヨーロッパやアメリカなど西洋の国々ではカワイイは子供の象徴であるため、可愛さをこだわるより「かっこいい」、「セクシー」のような成熟さを手に入れる方がモテると言うのは一般的な考え方である。日本でも主として女性に対して「セクシー」という言葉を褒め言葉として捉えるが、実際「セクシー」と言われると、どうしても自分の肉体や性的側面に対する評価と捉える人も少なくない。したがって、相手に直接「セクシー」であると褒める人は多くないだろう。事実、「セクシー」は日本語に翻訳すると色気の意味も含まれていて、広辞苑によると性的魅力のあるさま、肉感的という意味もある。⁽¹³⁾他方、日本女性に「カワイイ」と褒めると、それは肉体に対する評価ではなく、顔や表情、仕草、服装、雰囲気など全体的な印象に対する評価として捉える人が多いだろう。そこで、筆者が考えたのは日本人の女性は「カワイイ」という言葉にこだわるのはカワイイと未成熟と切り離せない関係があるからではないかという点である。カワイイは未成熟、未完成であるため、発展や進歩する空間、未知の将来への期待も含まれているのではな

(13) 広辞苑 第6版 (2008) 岩波書店 p. 1567

いか。さらに、成人しても、「カワイイ」であり続ければまだ知らない未来があるため、将来の自分への期待や夢もあると考えられる。

原宿系ファッションにもさまざまなジャンルがあるものの、渋谷系ファッションに比べると露出が少なく、幼さの印象がある。つまり、全面的に未成熟としての可愛さを出すのが一般的な原宿系ファッションである。だからこそカラフルで派手なファッションを身に纏っている原宿系ファッションの愛好者は時に「カワイイ過ぎる」と評価されることもある。「カワイイ」という言葉自体は褒め言葉として捉える人が多いが、「カワイイ過ぎる」という言葉は否定的の意味合いとして使われることもあり、原宿系ファッションを指している「カワイイ過ぎる」は原宿系愛好者以外の人にとっては理解できない意味もあり、身につけている過剰な装飾や着ている服装は自分の年齢や体形に合わないことの意味もある。つまり、かわいくないと同じ意味である。古賀（2009）の言葉によると「「原宿系」の「かわいい」ファッションの、一見でたらめとも見えるスタイルは、彼女たちの個人主義的な「かわいい」感覚によって秩序づけられたものである」。⁽¹⁴⁾日本人はよく集団行動を好むと言われるが、むしろ原宿系ファッションは個人主義を大切にしているファッションとみなされる一面をもつのではないか。そしてこれこそ日本人の独創性を表しているとののではないか。東京は日本の首都でありながら、ファッション発信地の中心でもある。この都市の中ではさまざまなファッションスタイルが存在していて、ファッション大国日本を支えていると言っても過言ではない。海外の多くの国を見ても、東京のような都市の中で多数のファッションスタイルを生まれる街は少ないだろう。その点で、このように東京にみられるファッションのありかたこそ、日本の文化的な独創性を物語っているのではなかろうか。

人は社会のなかで生きている限り、多かれ少なかれ周囲の目線を気にするものであり、自分らしさを全面的に出すこともなかなか勇気が必要なことである。しかし、海外の国々に比べると、日本は実は服装に関するタブーが少ない社会であるとも考えられる。ならば、周りに流されずファッションを通じて自分を解放して、自分自身になってみるのはどうだろうか。前述したように、櫻井（2013）によると、一部の海外の国ではオシャレをして個性を出したい若者が

(14) 古賀、前掲、p. 87

いても、周りの環境や雰囲気がそれを許されない状況になっている。⁽¹⁵⁾ または、一部の国では少し目立つようなファッションを着ていることだけで危険な目に遭うかもしれない。そう考えると、日本で原宿系ファッションをはじめ多様性がみられることは、ファッションを通じて自分の個性や自分らしさを表現することの尊さが、文化として成立していることを指し示しているのではなかろうか。その点で、日本のファッション文化とは、実は自分というものを表現すること、そして自分になることが許されているといえるのではなかろうか。

IV 制服文化からみた日本人の個性と独創性

1. 無個性と言われる日本人

パリ・コレクション通称パリコレのような世界から注目されるファッションショーやイベントは多くフランスのパリで定期的に行われていることに加えて、多くの日本人だけではなく、筆者も子供の頃からフランスはファッション大国というイメージを抱いてきた。だが、前章で述べたように、フランスに住む一部の若者は今のフランス人のファッションは「みんな同じ」というイメージがあり、つまりファッションからその人の個性をみるのはなかなかむずかしく、周りの人に合わせるのが一般的だと思われる。櫻井（2013）によるとパリ＝ファッションの最先端というイメージがあるが、実際にパリに行ってみると歩いている人達のファッションはとても保守的であることを実感できる。ファーストファッションが流行っているなか、みんなが同じような服装を着ているのが一般的かもしれないが、オシャレをして個性を出したい若者がいても、周りの環境や雰囲気が許してくれない状況になっている。⁽¹⁶⁾ 一般的に、日本人はよく個性がないといわれ、海外の人は個性をしっかりと持っている人が多いといわれるが、では、個性があるかどうかはいったいどのように判断するのか。学校や会社で地味な服装でいると、個性がないと思う人もいるかもしれない。では、目立たないファッションを着ないと個性は表

(15) 櫻井 孝昌 上坂 すみれ (2013) 『世界でいちばんユニークなニッポンだからできること 僕らの文化外交宣言』 PARCO 出版 p. 70-72

(16) 櫻井 上坂 (2013) 、前掲、p. 132

現できないのか。そこで、筆者が注目したいのは日本の制服文化である。もちろん、制服と言ってもさまざまな種類があるが、ここでは日本の女子高校生の制服を論じたい。

日本の女子高校生の制服は主にセーラー服とブレザースタイルがあり、他にも多様な種類が存在している。欧米の国々では私服で通学するのが一般的であるが、日本では制服が主流である。学生は制服を着るべきかというテーマは多くの場で議論されており、メリットとデメリットもあると思うので、筆者もどちらかの意見だけを支持するわけではない。但し、ここで議論したいのは制服はいったい自由の象徴であるのか、それとも規制の象徴であるのか、である。制服はよくないと思う人の論点は主にみなと同じ服装を着るのは個性の抹殺ではないかと制服を批判している。確かに古賀（2012）によると、大正時代のセーラー服は軍服から取り入れた要素がありながら、子供服の「いい子」という要素が同時に含まれている。女子生徒はセーラー服を身に着けることによって清楚で可憐な女子学生というイメージを象徴している。但し、1960～1970年代ではこのような制服は青少年の没個性化の元凶の一つとされたため、ブレザースタイルの制服が登場した。1980年半ば以降では制服を自分の好みに改造し、「着崩し」が多くの女子生徒の中で流行るようになった。⁽¹⁷⁾つまり、女子高校生たちは「制服」という同じ土台から始まって、制服をアレンジすることによって個性と自分らしさを出している。香港も日本と同じ制服通学の高校が一般的でありながら、多くの香港人学生にとって日本の制服は永遠の憧れである。筆者もその一人であり、日本のドラマやアニメからみた日本人の制服とそのアレンジはとても魅力的であり、同じ制服ではあるが、靴下の長さやセーターの有無などからその人の特徴や個性が見えるのはかわいくて、素晴らしいと思った。こうして日本の制服に憧れているのは筆者だけではなく、世界中の多くの若者も同じように感じている。櫻井（2009）によると、日本文化に憧れている若者にとって制服は自由の象徴であり、制服をアレンジして着るのは自分の個性を出す方法でもある。また、制服はファッションと思わない人もいるであろうが、今では「なんちゃって制服」や「ブランド制服」も日本や海外で流行っているのは、制服の一種でありながら、ファッションとして着こなす人も多いことを示している。このよう

(17) 古賀令子 他 (2012) 『ポップカルチャーとジェンダー 「セイフクファッションにみるジェンダー」』明石書店 p. 61-62

な「制服はファッションではない」という古い「常識」が自然体で崩れているのは日本の女子高校生たちの考え方に共鳴する人が世界中に増えているのではないかと述べていた。⁽¹⁸⁾

このように、ファッションは人の外見に影響するものであり、人には周りの雰囲気や場所によって服装を選ばなければいけない状況も当然ながらある。但し、たとえ社会における最低限のルールや制限があるとしても自分の個性や自分らしさは、些細なことから表現しアピールすることができることを、日本の制服文化は物語っているのではなかろうか。

2. ファッションと制服

学生の制服をファッションの一種として捉えるかどうかはやはり個人差があると思う。「服の乱れは心の乱れ」という言葉のような学生は同じ制服を着ることによって周りの人と同じ状態で学業に励むのが一番理想的であるため、学校はファッションを通じて自己主張をすべき場所ではないと思う人もいれば、身に着けているものを自分が好きないように組み合わせるのがファッションで、同じ服を着ていても個人差があるのがファッションであると思う人もいるだろう。学生は制服を着るべきかどうかは今日もよく議論される議題であると同じ、考え方は人それぞれであるが、冒頭で話したように2009年3月、外務省は「制服コーディネートの魔術師」の愛称を持つブランド制服ショップ「CONOMi」のアドバイザー藤岡静香を「カワイイ大使」の一人として任命した。つまり、制服をカワイイファッションの一種として外務省にみなしたといえる。日本人はよく集団意識が強い国民性として認識されていて、なかでも制服その象徴であろう。それでは、日本人はどのように制服を通じて自分の個性を示しているだろうか。

多くの人も学生時代の頃に制服の着こなしと着崩しを経験したことがあるだろう。広辞苑第六版(2008)によると、「着こなす」はからだにじっくり合わせて自分に似合うようにたくみに着物を着る意味があつて、「着崩す」は和服を、粋な感じが出るようわざと少し型を崩して着ることを指している。⁽¹⁹⁾つまり、制服を自分のスタイルや好みに合わせることによって、他の人との違いをわざと作り出している。人々は集団のなかで生きるのが一般的であるため、学校のような環境においては周りの人と同じ制服を着ることによって仲間意識や集団意識を生

(18) 櫻井(2009)、前掲、p.29-34

(19) 広辞苑 第6版(2008)、前掲、p.667、671

み出していると同時に、着こなしや着崩しによって他者との差別化を図り、自分という存在をアピールし、承認を求めているのではないかと筆者は考える。もちろん、校則が厳しい学校も少なくないため着こなしや着崩しすることができない人も大勢いるはずである。但し、厳しい校則があっても、人の自己顕示欲や、他者からの承認欲求は必ず存在する。または、厳しい環境によってその欲望はさらに大きくなるだろう。友人の話によると、彼女の高校の校則は非常に厳しく、化粧はもちろん、制服を少し着崩すことさえ許されなかった。その理由から学校という環境の中では学生たちの外見は所謂「いい子」として認識されている。但し、休日になると、学生たちは厳しい校則の反発もあって私服のファッションは派手な人もたくさんいた。友人の言葉によると、初めて学校以外で友だちと会った時、相手のファッションと制服のイメージがあまりにも違うため、驚いたこともあった。難波（2012）は「服装検査は生徒の着こなしや流行を完全に取締まることは出来なかった。こうした営みからみえてくるのは、身分や所属を表す制服を受け入れた上で、さらに一つの型から女子生徒たちが展開する着こなしのバリエーション及び差異化の動きである。（中略）すなわち、服装自由を主張する教育者は、制服という手段を廃することで生徒の自由や個性を發揮されようとしたが、女子生徒は制服の着用を通して自分たちの好みや流行の着こなしなどを実現したのである。」と述べていた。⁽²⁰⁾つまり、校則が厳しいからこそ日常の中で自分の個性やスタイルをさらにアピールしたいという自己顕示欲が強くなったのではないだろうか。

3. 海外からみた制服文化

アメリカや制服文化があまり流行っていない一部の国にとって、日本の制服文化はとても新鮮なものかもしれないが、制服文化が発展している国にとって日本の制服はどのような魅力があるだろう。三田村（2008）は「学生服は、ティーンの女の子をキュート見せるコスプレだ。セーラー服、もしくはブレザーとチェックのスカートの組み合わせは海外でも人気がある。（中略）体形がえらく違う白人が着ても、それなりに見えるから不思議だ。どうやら、女子学生服は世界に通用するコスプレらしい。」と述べていた。⁽²¹⁾確かに、筆者の出身地香港でも制服

(20) 難波知子（2012）『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社 p. 313

(21) 三田村露子（2008）『コスプレ なぜ、日本人は制服が好きなのか』祥伝社 p. 110

は主流であり、日本の制服スタイル寄りの学校もある。但し、一度は着てみたい制服と言うと必ず日本の制服を浮かび上がる。一体どうしてこのような文化が形成したのだろうか。

櫻井（2013）によれば、日本の制服ファッションは日本のアニメ文化の普及と切り離せない関係があるという。その理由としてアニメは中高生に向けた作品が多く、アニメの主人公も中高生が多いので、必然的に学校シーンがあることにも起因する。⁽²²⁾ 確かに、日本人だけではなく、多くの海外の若者は、幼少期に観た日本のアニメと言えば、「美少女戦士セーラームーン」や「ちびまる子ちゃん」、「涼宮ハルヒの憂鬱」など日常や学校をテーマにしたアニメが多いだろう。たとえ世代が違っても、必ずその時期に流行っている学園ものの作品がある。作中のキャラクターに憧れ、キャラクターに近づきたいと思うのは多くの若者も経験したことであるがコスプレをするのは時間や環境、経済的な面などいろいろな問題に左右される。コスプレとは違って、作中の登場人物が着ている制服に似た服装を着たり、自分の制服をアレンジしたりするのも楽しみ方の一つである。また、櫻井（2009）によると、2009年3月にタイのバンコクでは制服をテーマにした「カワイイ・フェスタ」が開催されていた。タイ人の若者に聞いてみたところ、日本の制服の魅力はシンプルでカワイイ、さらにいろいろな組み合わせができるから好きと答えた。⁽²³⁾ 日本では「CONOMi」のようなブランド制服ショップや原宿、渋谷など若者が集まる街でも簡単に「なんちゃって制服」のアイテムが購入できる。他方、母国の香港では学生服を買うには必ず制服の専門店で自分の学校の服をセットで購入する必要がある。そこで、筆者が考えたのは、日本では制服の専門店以外にも制服と制服に似たアイテムが購入できる店が多いことが理由で、若者たちは自分が好きな制服スタイルをオリジナルで作れることによって、制服は単なる学生服ではなく、ファッションの一種と化していることがわかる。よって今や制服といえは、規則や束縛、一体感など古いイメージを持つ人は徐々に少なくなつて、その代わりに自由やおしゃれ、カワイイなどの代名詞になっている。人気アイドルによる制服図鑑という写真集の出版や人気な制服系カジュアルファッションブランド「LucyPop」の海外販売会の展開により日本の制服ファッション文化はさらに世界中の人々に名が知られるようになった。制服の古い常識を変え、ファッションとしての可能性を生み出しているのは日本人

(22) 櫻井 上坂（2013）前掲、p. 149-150

(23) 櫻井（2009）前掲、p. 46-56

のもつファッションに対する執着ともいえる自己表現欲求から生まれた独創性といえるのではなからうか。

V 結論—カワイイ文化の再発見

ファッションといえば、おしゃれや流行、ブランド品などのイメージがあるかもしれないが、筆者の考えたファッションはさらに日常に近く、生活に密接に関わっているものである。日本は今ファッション大国と呼ばれており、原宿のような若者が中心に集まる街はファッションの発信地とも呼ばれている。但し、ロリータファッションや原宿系ファッション、制服ファッションのようなJファッションは日本人の国民性や特性と深く関わっており、これからは日本のポップカルチャーの普及に伴い、さらに世界中に知られていくだろう。また、日本人はよく集団意識が強く、集団行動パターンをもつと言われるが、日本発のJファッションとカワイイ文化から、日本人は周りの人の視線や評価を意識しながらもファッションを通して自分のテーマやメッセージを表現していることがわかる。このような独特なJファッションを生んだのも、周りの視線や評価があるからこそだと思われる。周りの評価を気にする人はファッションを通じて努力し、友人や異性にモテるためにいろいろな工夫をして、自分を完成させる。他方、周りの評価や環境に妥協したくない人はファッションを通じて、自分の個性や独創性をアピールし、その内面的個性を全面的に表現することによって同じ興味のある人が集まり、新たなJファッションを創り上げていくのではないか。要するに、先述したように、Jファッションの台頭と興隆は、無個性で集団主義的であると一般的に認識されている日本人の自己表現欲求と他者からの承認欲求から生まれた独創性にあるのだ。

今やJファッションの普及は日本にとどまらず、アジア以外の国でもとても人気を誇っている。これまでも述べた「カワイイ大使」は2010年3月31日をもって任期満了したが、日本のカワイイファッションを海外に向けて発信するイベントやトークショーはまだ多く開催されており、外国人からも人気を集めている。Jファッションが日本で生まれ発展した理由が、日本人の特性や日本の文化と大きく関わっていることと同じように、Jファッションは海外に伝播していく過程でさらにさまざまな文化や要素と混ざりあい、新たなファッション文化を生み出していくであろう。Jファッションは日本で生まれたファッション文化として知られているが、これからは海外での普及や伝播により、逆に日本のファッションにも新しい衝撃やアイディア

をもたらすと考える。そして、そのようなグローバルな展開から、Jファッションは、日本のみならず世界各地でも、さまざまな文化や社会の特質を有機的に反映させる形で、発展をとげていくのではなかろうか。

参考文献

高馬京子. 2013. 「カワイイ/kawaii: 成熟と未成熟の間で」『アリーナ=ARENA』中部大学国際人間学研究所. 16号

古賀令子 屋草素子 他. 2012. 『ポップカルチャーとジェンダー 「セイフクファッションにみるジェンダー」』明石書店

広辞苑 第6版. 2008. 岩波書店 編者 新村出

桜井孝昌. 2009. 『世界カワイイ革命 なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』PHP 研究所

櫻井孝昌 上坂すみれ. 2013. 『世界でいちばんユニークなニッポンだからできること 僕らの文化外交宣言』PARCO 出版

難波知子. 2012. 『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社

松浦桃. 2007. 『セカイと私とロリータファッション』青弓社

三田村露子. 2008. 『コスプレ なぜ、日本人は制服が好きなのか』祥伝社

屋草素子 他. 2012. 『ポップカルチャーとジェンダー 「セイフクファッションにみるジェンダー」』明石書店

四方田犬彦. 2006. 『「かわいい」論』筑摩書房

外務省. 2009. 『ポップカルチャー発信使（ファッション分野）の委嘱』

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/koryu/pop/kawaii/> (検索日:2016年12月15日)

Kyoko Koma, “Globalization or orientalism? Japanese Aestheticism through French influenced Japanese Fashion,” in *Japan and Europe in Global Communication*, 2014, pp.266-280

本号執筆者

小森和子ゼミナール

井口 博希 高 ミンソン 牟 博宸 中村 華子 本田 愛香

野村清ゼミナール

浦上 ゆうき

眞嶋亜有ゼミナール

周 晞彤

編集委員

○田中 牧郎

張 競

渡 浩一

鹿島 茂

ワルド, ライアン M.

(○編集委員長)

明治大学国際日本学部学生論集 第3集 (2016)

2017年3月17日

編集責任者 明治大学国際日本学部

発行所 東京都中野区中野4-21-1

明治大学国際日本学部

電話 (03) 5343-8045

印刷所 アライ印刷株式会社

